

六ノ坪IV遺跡・源ヶ谷古墳群
発掘調査報告書

1998

掛川市教育委員会
文化財係



六ノ坪Ⅳ遺跡・源ヶ谷古墳群
発掘調査報告書

1998

掛川市教育委員会

例 言

1. 本書は静岡県掛川市秋葉路25-1・他に所在する、六ノ坪IV遺跡・源ヶ谷古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は日本舗道株式会社による第2秋葉路宅地開発事業に伴う事前の記録保存調査として実施したもので、掛川市教育委員会が平成8年度に行った試掘調査の結果に基づき、平成9年3月10日～同年7月11日に行った。
3. 調査にあたっては、静岡県教育委員会・掛川市教育委員会の指導を受け「六ノ坪IV遺跡・源ヶ谷古墳群遺跡発掘連絡会」を設置し、発掘方法・日程などの協議を行いながら調査を実施した。

「六ノ坪IV遺跡・源ヶ谷古墳群遺跡発掘連絡会」の組織は次の通りである。

・発掘調査主体者	掛川市教育委員会教育長	小松弥生
・調査指導機関	静岡県教育委員会文化課課長	飯田英雄
		(担当 指導主事 篠原修二)
・調査担当機関	株式会社武蔵文化財研究所所長	山村貴輝
	〃 所員	惟村志志
	〃 所員	大坪直雄 (調査担当)
	〃 所員	北爪一行
・調査事務局	掛川市教育委員会社会教育課	松本一男
	〃	前田庄一
・事業主体者	日本舗道株式会社中部支店常務取締役支店長	福田 弘
	日本舗道株式会社掛川開発事務所所長	神谷和夫

4. 現地調査の参加者は次の通りである。
 飯上 進 高梨雅幸 恩田育夫 笹波真理子 瀬野鉄夫
 大庭録吉 伊藤正夫 宮下鶴次 榊業治吉 笹本六郎 小野田光雄 山本新平 木下 治 宮崎昭太郎
 柳沢寅男 大庭 稔
 鈴木勝一 岡本兼作 小池官治 平田辰夫 山下市郎 山浦正義 大場良一 一木源三郎 乗松良孝
 多米とく 多米よし子 鈴木くに子 袴田きよ 堀内ひろ 山崎くに 大石とも 松浦てつ子 鈴木秀子
 松浦富美江 梅津まさえ 松浦まさ子 神谷一江 伊藤静江
5. 整理調査の参加者は次の通りである。
 石村貞道 井東 浩 小口利恵子 北爪明子 高梨雅幸 浜田裕子
6. 国家座標を用いた方眼の設定、航空写真撮影、写真測量、遺構の図化・トレース作業は(株)フジテクノに委託した。
7. 古墳主体部から出土した鉄製品の復元・保存処理は、石川隆司氏に依頼した。
8. 住居跡から出土した炭化材、炭化種子の種同定は、(株)パリオナーヴェイに依頼し、結果を附録として収録した。
9. 出土品の整理及び報告書の作成・編集は平成9年10月1日から平成10年6月27日まで行った。
10. 本書は第1章を前田庄一が執筆し、第2～5章の執筆・編集を大坪直雄の指示の下に北爪一行が行った。
11. 発掘調査並びに報告書作成にあたっては、次の諸氏・諸機関に御協力・ご指導を賜った。記して感謝いたします。(敬称略・順不同)

日本舗道株式会社、横山太郎(飯根不動原遺跡調査団)、鈴木敏則(浜松市博物館)、向坂銅二、賢 元洋(豊橋市教育委員会)、大家真弘・稲村 繁(横須賀市人文博物館)、中三川昇(横須賀市教育委員会)、安藤広道(横浜市歴史博物館)、神奈川県武蔵文化財センター、株式会社渋谷興業

12. 出土資料は、一括して掛川市教育委員会で保管している。

凡 例

1. 遺構実測図の水糸高は標高を示す。
2. 遺構配置図・平面図の方位は真北を、配置図中の-46.350等は国家座標を示す。
3. 遺構・遺物の挿入の縮尺は次の通りでその他のものについては図中のスケールを参照されたい。
 遺構 遺構配置図・・・1/100・1/300 古墳……………1/100 住居跡……………1/60
 方形周溝墓・溝……………1/80 焼土遺構・土器棺墓……………1/30 土坑……………1/30・1/60
 遺物微細図……………1/30・1/40
 遺物 土器・陶磁器……………1/3・1/4 鉄製品……………1/2 玉・鏡貨……………1/1
4. 遺構の略号は次の通りである。S Z=墳墓遺構、S I=竪穴住居跡、S D=溝、S K=土坑、S X=その他の遺構
5. 須恵器・灰釉陶器の断面、施釉範囲はスクリーントーンで示している。
6. 土層・土器胎土の色調は、新版「標準土色帳」(農林水産省農林水産技術会議監修 1995年版)を使用した。

目 次

例言・凡例

目次

第1章 調査にいたる経緯	1
第2章 遺跡の環境	2
第3章 調査経過	5
第4章 調査	6
1地点	6
3地点	9
4地点	16
6・8地点	18
9地点	26
10地点	30
11地点	32
12地点	47
第5章 まとめ	72

附編 六ノ坪IV遺跡12地点から出土した炭化材・種実遺体の種類

遺跡抄録

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第2図	調査区配置図	4
			1地点		
第3図	SZ01平面図	7			
			3地点		
第4図	SZ01主体部平面図	10	第8図	近世遺構配置図	14
第5図	SZ01平面図	11	第9図	近世出土遺物実測図	14
第6図	SZ01出土遺物実測図	13	第10図	出土銭貨拓影図	15
第7図	SX01(集石遺構)平面図	14			
			4地点		
第11図	遺構配置図	16	第13図	4地点出土遺物実測図	17
第12図	SX01(焼土遺構)平面図	17			
			6・8地点		
第14図	6・8及び9地点遺構配置図	19	第19図	SK01・02出土遺物実測図	24
第15図	SZ01平面図	21	第20図	SK01・02平面図	24
第16図	SZ01出土遺物実測図	23	第21図	SX01平面図	25
第17図	SZ02平面図	23	第22図	SX02出土遺物実測図	25
第18図	SZ02出土遺物実測図	23			
			9地点		
第23図	SZ01・02平面図	27	第25図	SK03出土遺物実測図	29
第24図	SK01～03平面図	28	第26図	遺構外出土遺物実測図(平安時代)	29
			10地点		
第27図	遺構配置図	30	第29図	SK01～04平面図	31
第28図	SD01平面図	30			
			11地点		
第30図	遺構配置図	32	第37図	SZ03出土遺物実測図	42
第31図	層序	33	第38図	SZ04出土遺物実測図	42
第32図	SZ01平面図	34	第39図	SZ05平面図	43
第33図	SZ02平面図・南溝遺物微細図	35	第40図	SI01平面図	44
第34図	SZ03平面図・北溝遺物微細図	37	第41図	SD01・02平面図	45
第35図	SZ04平面図・東溝遺物微細図	39	第42図	SD02出土遺物実測図	46
第36図	SZ02出土遺物実測図	41	第43図	SX01平面図	46
			12地点		
第44図	層序	47	第58図	SI08平面図	55
第45図	遺構配置図	48	第59図	SI08出土遺物実測図	56
第46図	SI01平面図	49	第60図	SI09・10平面図	56
第47図	SI02平面図	50	第61図	SI09出土遺物実測図	57
第48図	SI02出土遺物実測図	51	第62図	SZ01平面図・出土遺物実測図	57
第49図	SI03出土遺物実測図	51	第63図	SK01・02平面図	58
第50図	SI03・05平面図	52	第64図	SK01・02出土遺物実測図	58
第51図	SI04平面図	53	第65図	SX03平面図	58
第52図	SI04出土遺物実測図	53	第66図	遺構外出土遺物実測図(弥生時代)	59
第53図	SI05出土遺物実測図	53	第67図	SX01平面図	60
第54図	SI06平面図	54	第68図	SX01出土遺物実測図	60
第55図	SI06出土遺物実測図	54	第69図	SX02平面図	61
第56図	SI07平面図	54	第70図	SX02出土遺物実測図(奈良・平安時代)	61
第57図	SI07出土遺物実測図	55	第71図	遺構外出土遺物実測図(奈良・平安時代)	62
附図	6・8地点SX02平面図				

表目次

第1表	6・8地点出土土器観察表(弥生時代)……………63	第7表	6・8地点出土土器観察表(奈良時代)……………69
第2表	9地点出土土器観察表(弥生時代)……………63	第8表	9地点出土土器観察表(平安時代)……………69
第3表	11地点出土土器観察表(弥生時代)……………63	第9表	11地点出土土器観察表(古墳時代)……………69
第4表	12地点出土土器観察表(弥生時代)……………63	第10表	12地点出土土器観察表(奈良・平安時代)……………69
第5表	3地点出土土器観察表(古墳時代以降)……………67	第11表	3地点出土土銭貨一覧表……………71
第6表	4地点出土土器観察表(近代)……………68		

写真図版

図版1	1. 遺跡透景(空撮、南から) 2. 遺跡全景(空撮、南から)	図版12	1. 11地点SZ04(空撮) 2. 11地点SZ05(空撮)
図版2	1. 遺跡全景(空撮) 2. 遺跡透景(空撮、西から)	図版13	1. 11地点SZ02南溝遺物出土状況① 2. 11地点SZ02南溝遺物出土状況② 3. 11地点SZ02南溝遺物出土状況③
図版3	1. 1地点全景(空撮) 2. 遺跡透景 3. 1地点全景(空撮、北から) 4. 3地点現況(南から) 5. 3地点全景(空撮、南から)	4. 11地点SI01、SD01・02(空撮) 5. 11地点SI01(東から) 6. 11地点SD01 7. 11地点SD02 8. 11地点SX01	5. 11地点SI01(東から) 6. 11地点SD01 7. 11地点SD02 8. 11地点SX01
図版4	1. 3地点全景(空撮) 2. 3地点全景(南から) 3. 3地点全景(東から)	図版14	1. 12地点全景(空撮) 2. 12地点全景(南から) 3. 12地点セクション① 4. 12地点SI01-04、09(南から) 5. 12地点SI05-08(西から)
図版5	1. 3地点SZ01主体部(南から) 2. 3地点SZ01東主体部 3. 3地点SZ01西主体部 4. 3地点SZ01東主体部遺物出土状況 5. 3地点SZ01北側周溝セクション 6. 3地点SX01 7. 4地点全景(東から) 8. 4地点SX01	図版15	1. 12地点SI01 2. 12地点SI02 3. 12地点SI02遺物出土状況① 4. 12地点SI02遺物出土状況② 5. 12地点SI03 6. 12地点SI04 7. 12地点SI04遺物出土状況 8. 12地点SI05・07
図版6	1. 6・8, 9地点全景(空撮) 2. 6・8地点SX02全景(空撮)	図版16	1. 12地点SI06 2. 12地点SI06遺物出土状況 3. 12地点SI08 4. 12地点SI08遺物出土状況 5. 12地点SI09 6. 12地点SI09遺物出土状況 7. 12地点SZ01掘り方 8. 12地点SZ01遺物出土状況
図版7	1. 6・8地点全景(西から) 2. 6・8地点SX02(空撮、西から) 3. 6・8地点SZ01 4. 6・8地点SZ01第1主体部 5. 6・8地点SZ01第2主体部 6. 6・8地点SZ02 7. 6・8地点SK01 8. 6・8地点SX01	図版17	1. 12地点SK01掘り方 2. 12地点SK01遺物出土状況 3. 12地点SK02掘り方 4. 12地点SK02遺物出土状況 5. 12地点SX01 6. 12地点SX02 7. 12地点SX03 8. 調査状況(12地点)
図版8	1. 9地点全景(西から) 2. 9地点SZ01 3. 9地点SZ02 4. 9地点SK01 5. 9地点SK03 6. 9地点SK03遺物出土状況 7. 10地点全景(東から) 8. 10地点SD01	図版18	1. 3地点出土遺物 2. 6・8地点出土遺物
図版9	1. 11地点全景(空撮) 2. 10地点SK01 3. 10地点SK02 4. 11地点全景(西から) 5. 11地点全景(東から)	図版19	1. 9地点出土遺物 2. 11地点出土遺物
図版10	1. 11地点SZ01(空撮) 2. 11地点SZ02(空撮)	図版20	12地点出土遺物①
図版11	1. 11地点SZ03(空撮) 2. 11地点SZ03北溝遺物出土状況① 3. 11地点SZ03北溝遺物出土状況②	図版21	12地点出土遺物②
		図版22	12地点出土遺物③
		図版23	炭化材(附編)
		図版24	種実遺体(附編)

第1章 調査にいたる経緯

今回の発掘調査地点は、平成元年度・2年度に日本鋪道株式会社中部支店が計画を進める秋葉路宅地開発事業に伴い掛川市教育委員会が発掘調査を実施した源ヶ谷遺跡、六ノ坪遺跡の西側に隣接する。

源ヶ谷遺跡からは、縄文時代中期から奈良時代までの竪穴住居跡約60軒、古墳時代の掘立柱建物跡17棟、弥生時代後期の方形周溝墓、土坑墓、古墳7基などが発見された。出土遺物には、縄文時代から奈良時代までの土器、弥生時代のガラス玉、石製管玉、古墳からの玉、刀などがある。六ノ坪遺跡からは、弥生時代後期から平安時代までの竪穴住居跡約90軒、奈良時代から平安時代までの掘立柱建物跡34棟、弥生時代中期から古墳時代前期までの方形周溝墓、古墳3基などが発見された。出土遺物には、弥生時代から平安時代までの土器、奈良時代の瓦、緑釉陶器、二彩、三彩陶器、古墳から刀、鎌などがある。

平成8年11月26日付で日本鋪道株式会社中部支店から掛川市教育委員会に「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱い」について照会があった。

この照会に対し、掛川市教育委員会は平成8年2月20日付で回答を送付した。このなかで、1基の古墳、8ヶ所の古墳状の地形、3ヶ所の平坦面・緩斜面があり集落等の遺跡の可能性があると回答した。

同年8月5日付で、日本鋪道株式会社掛川開発事務所から「確認調査の依頼」が掛川市教育委員会に提出された。

9月3日、掛川市教育委員会から日本鋪道株式会社掛川開発事務所に「埋蔵文化財確認調査計画書」を送付した。

11月11日から25日にかけて市教育委員会で上記の12ヶ所の確認調査を実施したところ、そのうち9ヶ所が遺跡であることが確認された。この9ヶ所が今回の発掘調査地点である。

平成9年2月18日付で、日本鋪道株式会社中部支店を委託者とし、株式会社武蔵文化財研究所を受託者として埋蔵文化財発掘調査・出土品整理作業の契約を締結し、同日、日本鋪道株式会社中部支店、掛川市教育委員会、そして株式会社武蔵文化財研究所の3者で「源ヶ谷古墳群ほか遺跡発掘調査に関する協定書」を締結し、平成9年3月10日の発掘調査開始に至った。

発掘調査終了後の9月10日、日本鋪道株式会社、株式会社武蔵文化財研究所、静岡県教育委員会、掛川市教育委員会の4者で、整理作業について協議し、日本鋪道株式会社中部支店と株式会社武蔵文化財研究所間で「埋蔵文化財発掘調査出土品整理作業に関する契約書」を締結し、10月1日付けで、日本鋪道株式会社中部支店、掛川市教育委員会、株式会社武蔵文化財研究所の3者で、「源ヶ谷古墳群ほか遺跡整理調査に関する協定書」を締結し、同日より整理作業を開始した。

第2章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置 (第1・2図 図版1-1)

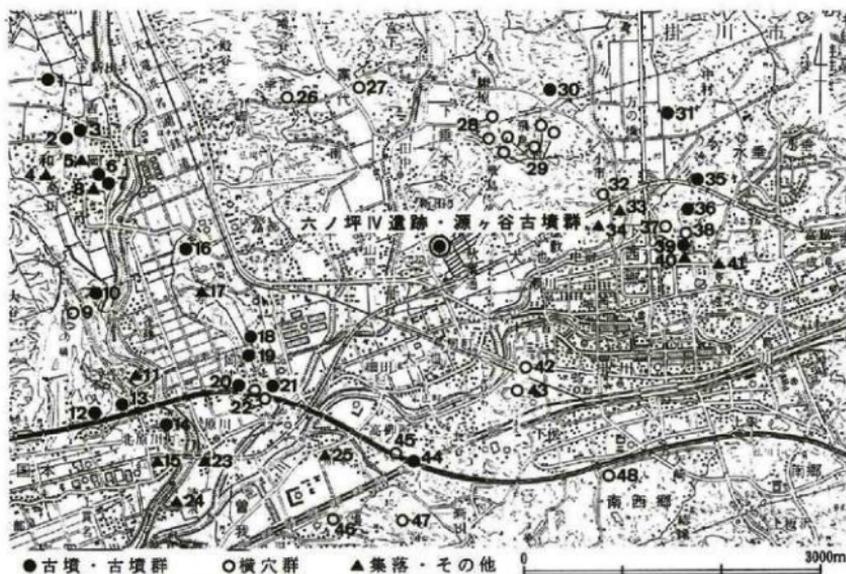
六ノ坪IV遺跡・源ヶ谷古墳群は、掛川市南西部の秋葉路25-1・他に所在する。遺跡の東南東2.5kmの位置にはJR掛川駅があり、南側150mの位置には国道1号線掛川バイパス大池インターチェンジが位置する。

本遺跡は掛川市南部を西流する逆川の右岸にあって、東を倉真川、西を垂木川の逆川支流に挟まれた丘陵南端部に位置する。周辺の丘陵はこれらの河川と大小の支流によって開析された複雑な地形を呈している。本遺跡の載る丘陵支脈は頂上部の幅が最大でも20m程の瘦せ尾根状を呈しており、北東側の丘陵本体から西に弧を描いて沖積地に張り出し、西端部は垂木川に達している。丘陵支脈の標高は45~55m、逆川河畔の沖積地からの比高差25~35mを測る。本遺跡は西側の丘陵端部から500m程東側の位置にあり、南北に走る切り通しが遺跡西側で丘陵を分断している。

六ノ坪IV遺跡・源ヶ谷古墳群では丘陵内の8地点が調査された。これらは丘陵の複雑な地形を反映して、丘陵脊梁部、南向き斜面、南向き谷戸内という多彩な立地条件を示している。

2. 周辺の遺跡 (第1図)

六ノ坪IV遺跡・源ヶ谷古墳群周辺では丘陵を解析しつつ平行して南流する原野谷川、垂木川、倉真川と、これらと合流しながら西流する逆川の4河川流域の沖積地に面した丘陵裾部への遺跡の分布が多くみられ



1 吉岡大塚古墳	9 菅ヶ谷横穴群	17 岡津原古墳	25 傾家遺跡	33 原遺跡	41 大ヶ谷遺跡
2 藤六3号墳	10 各和金塚古墳	18 神明塚古墳	26 十五ヶ谷横穴群	34 不動ヶ谷遺跡	42 山麓山横穴
3 藤六4号墳	11 山下遺跡	19 奥ノ原古墳	27 別所横穴群	35 戸塚古墳	43 宇割ヶ谷横穴
4 關戸山I遺跡	12 浅間山古墳	20 西岡津古墳	28 金谷横穴群	36 八景山古墳	44 東原ヶ谷古墳群
5 高田遺跡	13 権現山古墳	21 向山古墳群	29 飛鳥横穴群	37 原新田横穴	45 本村横穴群
6 行人塚古墳	14 宇佐八幡古墳	22 岡津横穴群	30 打越古墳	38 天王山横穴	46 城山横穴群
7 鷹塚古墳	15 坂尻遺跡	23 原川遺跡	31 下山古墳群	39 天王山古墳群	47 大谷代横穴群
8 女高遺跡	16 高代山古墳群	24 駒橋北遺跡	32 西谷田横穴群	40 天王山遺跡	48 久保横穴群

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

る。これらのうち、本遺跡の時期と関連する弥生時代～古代の遺跡について概観する。

本遺跡の西側4kmの位置を流れる原野谷川西岸の和田岡原の台地上には吉岡原遺跡、瀬戸山I遺跡、女高遺跡、高田遺跡などが位置し、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝墓などが多数検出されており、南側3kmの山下遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓群が検出され、東岸の岡津原III遺跡でも弥生時代中期の方形周溝墓が検出されている。やや下流の自然堤防上の微高地には、東岸では弥生時代中期初頭の土器棺墓、掘立柱建物、古墳時代、奈良・平安時代の集落が検出された原川遺跡、原川遺跡と共に多くの墨書土器が出土した梅橋北遺跡が、西岸には古墳時代前期から鎌倉時代の坂尻遺跡がある。坂尻遺跡では、特に奈良時代には多数の掘立柱建物跡と共に、官衙・官職名などを記した多量の墨書土器が出土し佐野群衙の可能性が指摘されている。出土遺物の推移から平安時代には、坂尻遺跡から原川遺跡、梅橋北遺跡に中心が移るとみられている。

原野谷川流域はまた、多くの古墳が分布しており、西岸の和田岡原にはこの地域の首長墓と目される古墳時代中期の前方後円墳である各和金塚古墳、瓢塚古墳、吉岡大塚古墳や大型円墳の春林院古墳があり、これらの南側には宇佐八幡地内1号墳、権現山古墳の小前方後円墳がある。坂尻遺跡付近で西側に流路を変えた原野谷川から北側に切れ込んだ支谷の最奥部には100基を越える大規模な横穴墓群である菅ヶ谷横穴群がある。東岸では古墳時代中期の奥ノ原古墳のほか、高代山古墳群などの円墳も数多く築かれており、古墳時代後期末～奈良時代初頭と考えられる岡津横穴群などもある。

垂木川流域では、西側に分かれる支流の家代川に面して、6世紀後葉の別所横穴群があり、本遺跡から北西に1.3kmを隔てた垂木川支流の谷奥には、6世紀後葉～7世紀中葉の飛鳥横穴群がある。

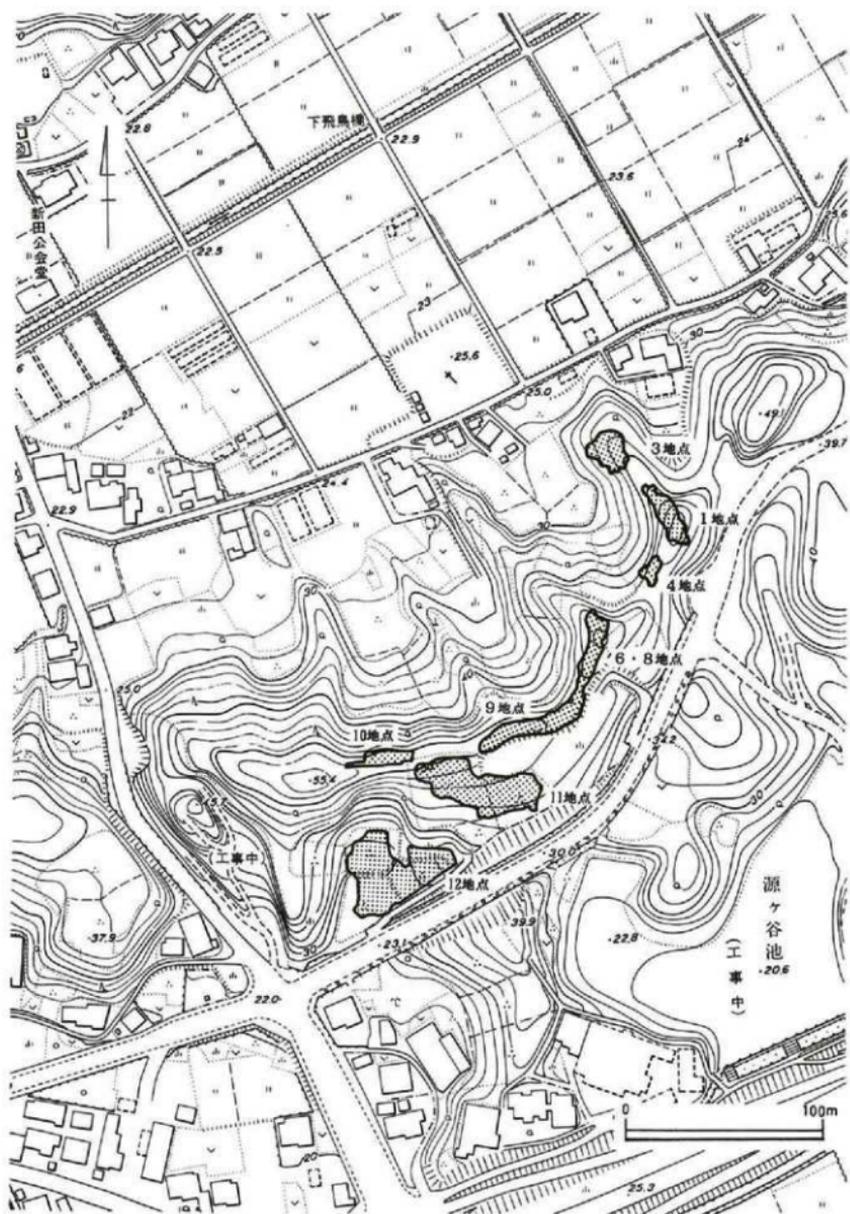
本遺跡東側に隣接して1990年に調査された六ノ坪遺跡では縄文時代～近世の遺構・遺物が検出され、特に奈良・平安時代には企画性を持って配された掘立柱建物跡群とこれを圍繞する環濠が検出された(未報告)。

本遺跡東側2kmを流れる倉真川流域では、掛川市街地から北側に切れ込む谷の開口部東岸の大ヶ谷遺跡で弥生時代中期の方形周溝墓が検出されており、原新田遺跡、天王山遺跡では弥生時代後期の集落が検出され、西岸では原遺跡、不動ヶ谷遺跡で弥生時代中期の方形周溝墓などが検出されている。また、八景山古墳のような小規模な古墳や横穴墓群も密に分布している。

逆川北側の小笠山丘陵北麓では横穴墓が多くみられ、6世紀中葉の山籠横穴、造り付けの石棺が検出された6世紀後半の宇洞ヶ谷横穴の単独横穴から多数の副葬品が出土したほか、本村横穴群、大谷代横穴群、などの横穴墓群、本村1号墳、東照ヶ谷1・2号墳などの円墳も分布する。

参考文献

- 掛川市教育委員会 1964『掛川市城山横穴墓調査報告書』
- 掛川市教育委員会 1971『掛川市宇洞ヶ谷横穴墓』
- 掛川市教育委員会 1985『女高遺跡発掘調査概報』
- 掛川市教育委員会 1987『吉岡原遺跡発掘調査概報』
- 掛川市教育委員会 1988『高田遺跡発掘調査概報』
- 掛川市教育委員会 1996『女高I遺跡発掘調査概報』
- 静岡県 1990『静岡県史 資料編1』
- 静岡県 1990『静岡県史 資料編2』
- 静岡県教育委員会 1979『静岡県遺跡地図』『静岡県遺跡地名表』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1990『原川遺跡III』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第24集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988『領家遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第18集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988『梅橋北遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第14集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992『吉岡原遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第34集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992『坂尻遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第29集
- 平野和男 1992『第9章 遠江』『前方後円墳集 中部編』山川出版社
- 前田庄一 1991『奈良時代～平安時代の掘立柱建物跡』『静岡の原像を探る!』静岡県教育委員会



第3章 調査経過

六ノ坪IV遺跡・源ヶ谷古墳群の発掘調査は、平成8年度に掛川市教育委員会によって行われた試掘調査の結果に基づいて行われたものである。

試掘調査の結果としては、3地点一溝、4地点一焼土、6地点一集石、8地点一集石、9地点一黒色土の落ち込み、10地点一集石と黒色土の落ち込み、11地点一溝、という遺構の検出と、8地点から奈良時代の須恵器、12地点から古墳時代の土器及び鎌倉時代の陶器の出土が報告されている。

今回の調査はこの試掘調査の結果に基づき、試掘調査3・4・6・8・9・10・11・12地点と、今回の調査原因と同一の宅地開発の事前調査で以前に調査された古墳の一部である1地点について行われた。

調査にあたって、調査地点の名称は試掘調査で用いられた地点名をそのまま踏襲して1・3・・・12地点と呼称し、立地・内容が同一と考えられる6地点、8地点については6・8地点とした。従って2・5・7地点は欠番となる。

調査は平成9年3月10日より開始した。まず、丘陵脊梁部の1～10地点の伐採と共に、茶畑であった11・12地点の茶樹の伐根を重機によって行った。3月12日からは、これらの作業と平行して重機による11・12地点の表土剥ぎを開始した。11・12地点では表土下から若干の弥生土器、灰釉陶器が出土したが、遺構確認面はさらに下位の土層となると考えられたため、3月26日から重機と人力によって各地点とも数本のトレンチを掘削し遺構の確認につとめた。この結果11地点からは数本の溝状の遺構ブランが、12地点では土層断面に焼土を伴う遺構が検出されたが、4月3日～7日の豪雨によって12地点のトレンチが崩落し、確認された遺構も被害を受けた。4月8日からは重機と人力により11地点の遺構確認までの掘り下げを行い4月16日からは遺構調査を開始した。これ以降は各地点の表土剥ぎ、遺構確認作業と遺構調査を平行して行ったが、人員数、作業内容などに応じて断続的に調査を行った地点もある。遺構調査は下記の行程で進行した。

11地点	4月8日～5月21日
12地点	4月21日～6月13日
6・8地点	4月29日～7月9日
1地点	5月26日～7月3日
3地点	5月27日～7月4日
4地点	6月19日～6月25日
9地点	6月29日～7月7日
10地点	7月6日～7月7日

この間4月9日には、静岡県教育委員会、掛川市教育委員会の指導の元に調査連絡会議を催し調査方針の検討を行った。また、5月23日には11地点、6月13日には6・8地点配石遺構面、6月25日には12地点、7月5日には1、3、4地点、7月10日には6・8、9、10地点についてラジコンヘリコプターを用い、測量を兼ねた空撮を行った。

調査期間は、当初は6月一杯を予定していたが4・6月中の雨天のためやや遅延し、7月10日に全調査を終了し、7月11日に現場事務所を撤収した。なお、調査終了後の8月7・8日に航空測量図の現地補測を行った。

第4章 調査

1 地点

1. 地点の概要 (第2図 図版1・2)

1 地点は遺跡内の北東側において瘦せ尾根状の丘陵頂部に位置する。調査区全域が平成2年度調査された古墳墳丘の一部であるが(未報告)、その後の宅地開発工事で墳丘の主要部分である北東側を大きく削られており、現況では頂部の幅1~2mの極めて細い尾根状を呈している。また、南東端部は後世の削平(おそらくは近年の作業小屋等と思われる)を受け、平坦面となっている。平成2年の地形図によれば、本地点は北東-南西方向に走る丘陵から、北西方向に向かう支脈が派生する交点に位置しており、北側と北西側には丘陵を開析する小支谷が切れ込んでいる。本地点付近の丘陵は頂部で10m程の幅をもつ。調査前の現況は南東側は植林による杉林、北西側は孟宗竹が繁茂しており、現況での最高点の標高は47.1mを測る。

本地点からは古墳墳丘以外の遺構は検出されていない。

調査は、伐採後、尾根状の地形に沿う方向と、これに直交する方向に土層確認用の3本のベルトを残し、墳丘面までの掘削を行った。

調査区の堆積土層は黄褐色土の単層で、上部は竹根による攪乱が著しく腐葉土を交える表土に漸移するが細分はしていない。また、南東側の削平部分に見られた堆積土層は、肉眼観察によって墳丘上の土層と区別できなかった。地山は黄褐色のシルト質の土層で、標高45m前後から以下では軟質のシルト岩層に移行する。

2. 検出された遺構

SZ01(古墳)(第3図 図版3-1・3)

占地・景観

前述のように、本跡は北東側の大部分を削られており、原地形を残すのは尾根状地形の南西側の斜面のみであるが、この部分においても北西側から切れ込む支谷に向かう崩落が著しい。

現況では樹木に視界を遮られているが、地形図からは丘陵下の北側に広がる垂木川支流の流域から北西側600m付近を南流する垂木川にかけての眺望が得られるものと考えられる。

本跡の北西側25mには、本遺跡3地点SZ01(古墳)が位置している。

墳丘

盛り土と考えられる土層は認められず、墳丘は地山整形によっていると考えられる。

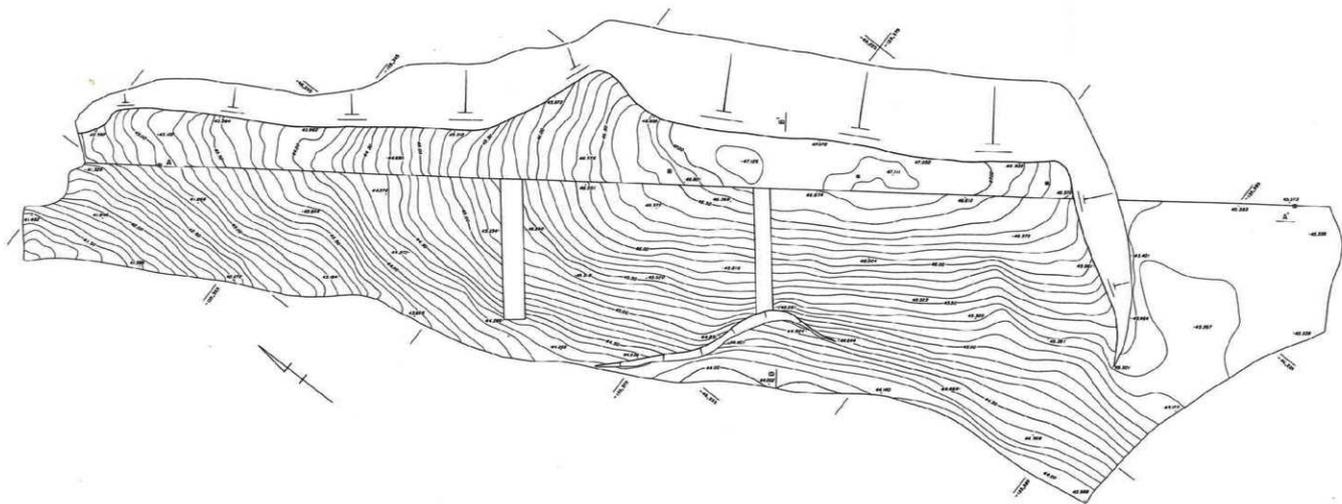
墳丘北西側の標高44.5mの等高線の下側には、50cm~1mの幅で弧を描き勾配が若干緩やかになった部分が認められ、墳丘裾部である可能性が考えられる。44.5mの等高線は南西側では斜面に沿った崩落によって途切れている。墳丘南東側平坦面の現況での標高は45.3m前後を測るが、この周辺からは地山の整形は確認できないことから、南側の墳丘裾部は北西側と標高を違えていたものと考えられる。

南西側墳丘面の等高線は北西-南東方向に直線的に走っているが、この周辺は最も崩落の著しい部分である点と、墳丘上の堆積と南東側の削平面上の堆積を肉眼観察で分類できなかった点から、後世の崩落、削平等によって地形が改変されている可能性を考慮に入れる必要がある。

現況地形では頂部は8.5×1.5m程の広がりをもつ平坦部となっていた。北東側への崩落の危険があるため頂部の掘削は行っていないが、現況及び確認部分からは9×2m程の広がり、弧状の縁辺部をもつ標高46.7m程の平坦面が遺存していると思われる。縁辺部から墳丘裾部までの水平距離は5~7.5m程を測り、北西側で長い。

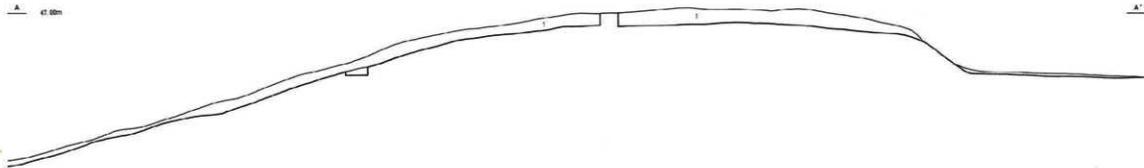
以上から、本跡は円丘部の一部と推測されるが、南西側の外形線は直線的であった可能性がある。円丘の規模は外径20~25m、墳頂平坦部の径10m前後と推測される。墳丘高は、北西側では2.2mを測り、南側では1.4m以下となる。

埋葬施設、周溝・葦き石等の外部施設は検出されていない。また、遺物も出土していない。



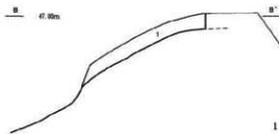
A 41.00m

A'



B 41.00m

B'



1 黄褐色土(2.5R-5/0) 上部は草木根により擾乱される。粘性・しりやや有。



第3図 SZ01平面図

3 地点

1. 地点の概要 (第2図 図版1-2)

3地点は遺跡の北東端にあり、北西に突出する丘陵支脈の端部に位置する。この丘陵支脈は基部にあたる本遺跡1地点で標高47.1mを測り、端部に向かい高度を下げ、3地点で若干の高まりを見せ、標高40.4mを測る。丘陵の北側は垂木川流域の沖積地で、東西には丘陵を開析する小支谷が切れ込んでいる。調査前の現況は、樹木を交えた孟宗竹の竹林で、高まりの頂部には基礎石が数基見られた。

本地点からは古墳1基、近世の火葬墓8基、近世と思われる集石遺構1基が検出された。

調査は、伐採後まず調査区全域を占める高まりを十字に切る試掘溝を設定し土層の堆積状況を確認したが、全体に竹根による攪乱が著しいため分層は不可能で、地山上は暗褐色土の単層とした。地山は軟質の岩盤層で、頂部の一部のみに風化した岩盤のブロックを多量に含む黄褐色土層が最大20cmの厚さで認められた。その後、全体の表土を除去したところ、頂上部から埋葬施設が検出され古墳であることが確認された。この間、墳丘上から検出された火葬墓の調査を行った。

2. 検出された遺構・遺物

a. 古墳時代

SZ01 (古墳) (第5図 図版3-4・5、4、5-1~5)

占地・景観

丘陵先端に位置し、現況での最高点の標高は40.4mを測る。

現況では樹木に視界を遮られているが、北東側から西側の、垂木川支流の流域から垂木川との合流点にかけての良好な眺望が得られるものと考えられる。

本跡の南東側25mには、本遺跡3地点SZ01 (古墳) が位置している。

墳丘

本跡の構築は丘陵端部の地形を利用しており、確認された限りでは地山整形のみによっている。前述のように墳頂部の土層は竹根による攪乱が著しかったため盛り土の有無は確認できなかった。平面プランは北西辺が長く、南東辺が短い隅丸台形に近い形状と見ることができる。北東・南西側の墳丘等高線が直線的で主体部と平行していることから方墳の可能性も考えられるが、形状が明らかな北側と南東側裾部が弧状を描いていることから円墳として構築されたと見ておきたい。丘陵の走行方向と平行して2個所の埋葬施設が検出されており、長軸方向はN-34°-Wを指す。

墳丘の範囲は地山の整形が明らかな北側と南西側の他は明瞭ではないが、北西側のセクションポイントB'付近では37.7m前後、南西側のセクションポイントA付近と北東側のセクションポイントA'南側では37.5m前後で勾配の転換が見られ、標高と墳頂部からの距離が近似する点からこれらが墳丘外形を示していると考えられる。この範囲に基づく墳丘外形の規模は北西-南東が13.7m、北東-南西が13.8mを測る。

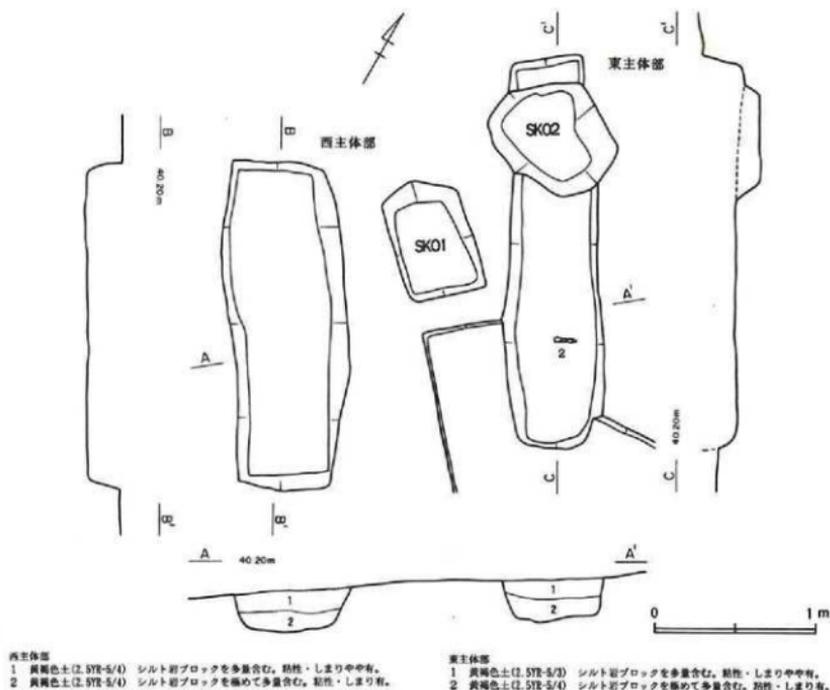
墳頂平坦部は墳丘とはほぼ相似形の隅丸台形を呈するが、埋葬施設の深さから見て、かなり削平されているものと考えられる。規模は北西-南東が5.7m、北東-南西が5.5m、標高は39.9~40.17mを測る。墳丘高は北東側で最大の2.7m、南東側で最小の94cmを測る。

周溝は墳丘の北側と南東側から検出され、丘陵の尾根状地形から墳丘を区画している。北溝は浅く緩やかに立ち上がり、東端は地形にわけこみ消滅する。セクションC-C'のベルト西側では溝の形状は確認できなかった。上端幅2.5m、下端幅1.6m、墳丘側からの深さ30cmを測り、3.3mの長さまで確認された。外側の立ち上がりに沿って幅50~70cm深さ26cmの溝が走る。南東溝は逆台形の断面で、部分的に墳丘側に段をもつ。上端幅90~159cm、下端幅39~130cm、深さ28cm、長さ6mを測る。両端は地形にわけこみ消滅する。

埋葬施設 (第4図 図版5-1~4)

墳丘上の2箇所から検出された。共に長方形の平面形をもち、地山の岩盤層を掘り込んで構築されている。墳丘主軸線の左右にあって長軸方向が平行する。以下の記述では西主体部・東主体部と呼称する。

西主体部 (図版5-3) は両側辺がやや不整であるが整った平面プランをもつ。両小口側は丁寧に整形され、



第4図 SZ01主体部平面図

底面・側面との境が明瞭に屈曲する。底面は若干の凹凸が見られる。規模は、長さ200cm、幅75cm、深さ29cmを測る。

棺、遺体の痕跡は認められなかったが、小口部の形状からみて、掘り込みに内接する組合式木棺の直葬であった可能性が考えられる。

西主体部の遺物は覆土内から土師器片1点が出土したが、小片で図示できなかった。器種は不明である。

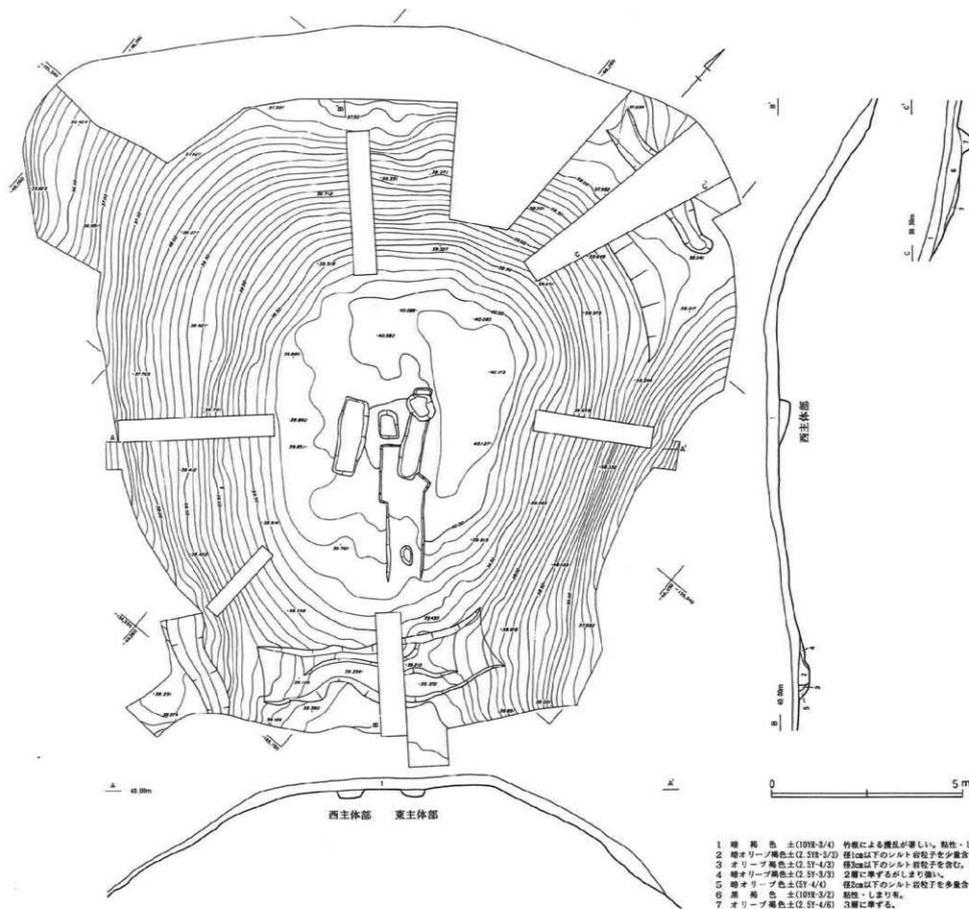
東主体部(図版5-2)は西主体部に比してやや不整な平面プランをもつ。小口部は北側では西主体部同様に丁寧に整形されているが、南側は丸みを帯びる。底面は若干の凹凸が見られる。規模は、長さ240cm、幅62cm、深さ27cmを測る。

棺、遺体の痕跡は認められなかったが、北側小口部の形状からみて、組合式木棺の直葬であった可能性が考えられる。

東主体部の遺物は鉄剣1点、小玉5点が出土した。小玉は2点と3点が錆着し2個体として取り上げた。鉄剣は主体部南端部より60cmの位置から出土し、底面から1cm程浮いた出土状況であった。切っ先は東を向き長軸方向と直交する。竹根による攪乱で刃部の半ば以下を欠く。玉は鉄剣下から出土し、鉄剣と錆着していた。4は鉄剣の錆着としの段階で確認された。

調査後両主体部覆土を5mm、2mmの篩でふるったが、東主体部覆土から鉄剣の破片と思われる数点の鉄片を得たのみである。

墳丘上からは東西の主体部の他に2基の土坑が検出されている。1基は東主体部を壊して構築されており、



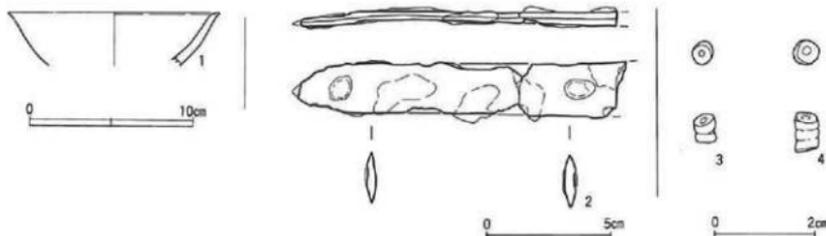
第5図 SZ01平面図

共に覆土が表土と類似することから、後述する近世の遺構の一環であろうと推測される。

出土遺物(第6図 第5表 図版18-1)

上記の主体部出土遺物の他に、墳丘上の表土から出土した土師器片1点を図示した。

1は口唇端部が外反する土師器片である。小片であるため口縁部の傾き、器側に誤差がある可能性が考えられるが、口径13cmに図上復元した。器種は不明である。2は端をもたない鉄刺で、鋒と刃部の半ば以下を欠く。接合しない破片が数点見られる。残存長13.3cm、刃幅2.1~2.0cm、刃厚3.5~5.0mm、重さ25.1gを測る。3・4は小玉で、3は2点、4は3点の玉が鉄刺の錆によって錆着していると考えられる。表面の大部分を錆に覆われているが、3の表面観察から滑石製と思われる。3・4とも孔は貫通していることから、それぞれ連なった状態で埋納されたと推測される。第6図の上方から順に3a・b、4a・b・cとした。現状での計測で径・厚さは、3aが4.9mm・2.8mm、3bが4.7mm・1.8mm、4aが4.9mm・2.9mm、4bが4.8mm・2.1mm、4cが4.8mm・2.7mm、総重量0.4gを測る。



第6図 SZ01出土遺物実測図

b. 近世以降(第8図)

SZ02~09(火葬墓)

墳丘上の南寄りを中心に8基が検出された。古墳表土中に掘り込まれているが、竹根が縦横に張っておりいずれも掘り方は確認できなかったため位置のみを図示した。それぞれの出土遺物は次の通りで、接合できなかった小片が少量含まれるが、大きな変動はないと思われる。

- | | |
|-------------------|-------------------|
| SZ02一かわらけ2点、鉄銭1点。 | SZ03一かわらけ4点、銅銭1点。 |
| SZ04一人骨のみ | SZ05一骨壺・蓋、かわらけ2点。 |
| SZ06一かわらけ2点。 | SZ07一かわらけ2点。 |
| SZ08一かわらけ1点。 | SZ09一骨壺・蓋各1点。 |

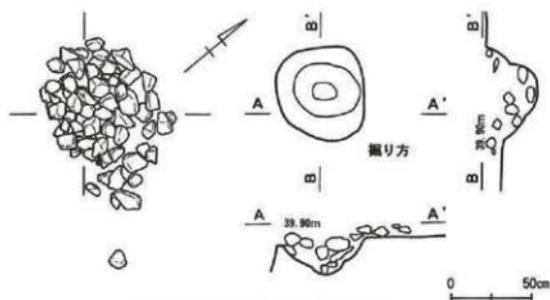
SZ05は、骨壺内に充填された焼骨中に2点のかわらけが向かい合わせて納められ、歯が納められており、SZ03でも向かい合わせたかわらけ内から歯が出土した。SZ09周辺の4箇所からは銭貨が数枚ずつ出土しており、銭Dは板材の付着した状態で出土した。このほか、表土中から土師質の骨壺、かわらけ、近世以降の所産と思われる陶磁器類が出土しており、上記以上に近世以降の墓が存在したものと思われる。

SX01(墓石遺構)(第7図 図版5-6)

SZ01墳丘上の南東側から検出された。厳密には時期は不明であるが墳丘表土内から確認されていることから近世以降に属すると判断した。

本跡は土坑内及びその周囲の1.1×0.7mの範囲を中心に礫が検出されたものである。土坑は不整な円形を呈し、径59×53cm、深さ32cmを測り、底部は2段に掘り窪められている。礫は径10cm前後を中心に、径5~17cmのものが77点出土した。礫の石質は調査時の観察であるが、みな砂岩と思われる火熱を受けたものは見られなかった。

礫以外の遺物は出土していない。



第7図 SX01(集石遺構)平面図



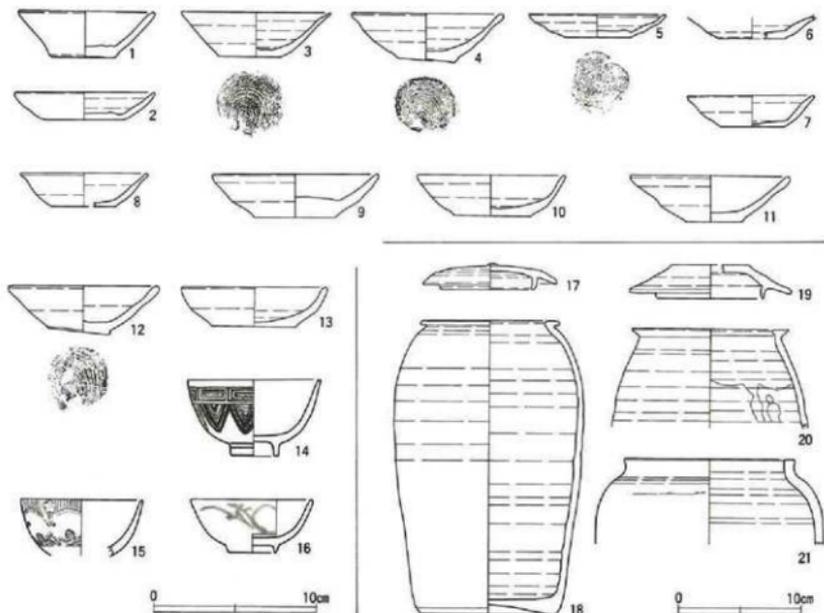
第8図 近世遺構配置図

SK01・02 (第4・8図 図版5-1)

SZ01 墳丘上から検出された。ほぼSK02 直上からは基礎石が検出されている。前述のように、SZ01 東主体部との重複と覆土の状況から近世以降に属すると判断した。

共に長方形を呈し、SK01は72×49cm、深さ28cm、SK02は77×66cm、深さ44cmを測る。

遺物は出土していない。

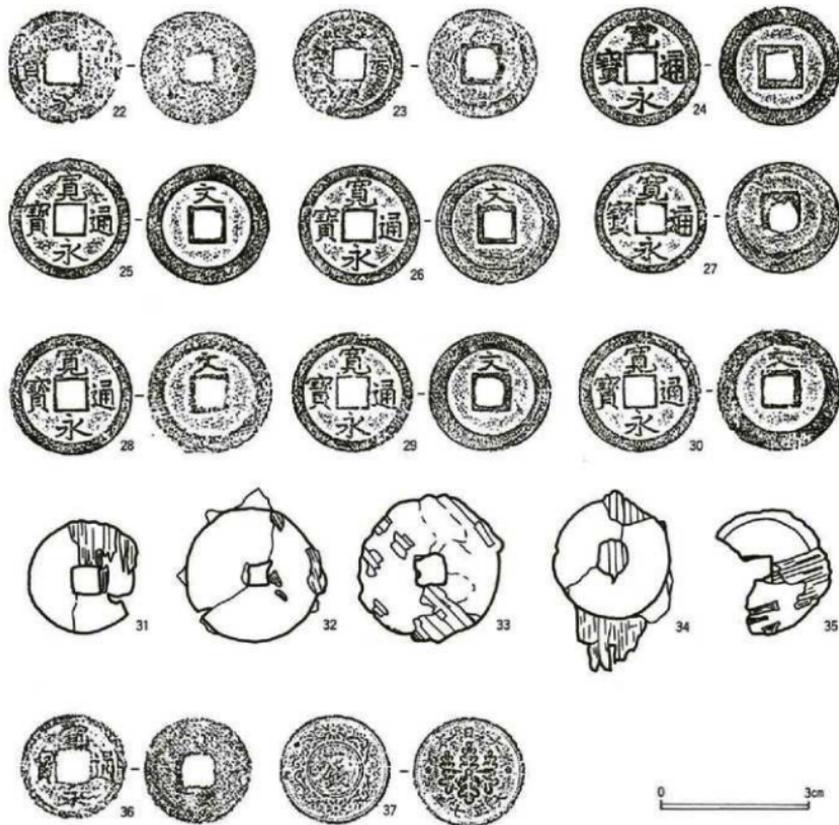


第9図 近世出土遺物実測図

近世以降の出土遺物（第9・10図 第5・11表 図版18-1）

ここでは火葬墓出土の遺物、表土出土の陶磁器類、銭貨の37点を図示した。

1～13はかわらけで、すべて底部は回転糸切りされる。14～16は近世の陶磁器類、17・18、19・20は骨壺と蓋でそれぞれが対になる。21も骨壺と思われる。22～37は銭貨である。



第10図 出土銭貨拓影図

4 地点

1. 地点の概要 (第2・11図 図版5-7)

4地点は遺跡内の北東側において、北東-南西に走る細尾根状の丘陵上に位置する。南西側は丘陵の北西と南東側から切れ込む谷頭の出会う鞍部となっている。調査区の南西部は径8m、高さ1m程の高まりとなっており、北東部は丘陵を横断する幅2.5m程の溝状の凹地となっていた。北東側10mには丘陵づたいに本遺跡1地点、南西側25mには前述の鞍部を隔てて本遺跡6・8地点が位置している。調査前の現況は植林による杉林で、多少の雑木と孟宗竹を交えていた。現況の標高は南西側の頂部で45.5mを測る。

本地点からは焼土遺構1基が検出された。

調査は、伐採後高まりを十字に切る方向に設定した試掘溝によって土層の堆積状況を確認した後、焼土遺構確認面までの排土を行った。



第11図 遺構配置図

調査区の堆積土層は基盤のシルト岩粒子を含み、高まりの頂部ではオリーブ褐色土、裾部では暗褐色土で、上部は腐植土を交え表土化している。地山は黄褐色の破砕シルト岩を主体とする土層である。

排土後の地形は現況を踏襲するもので、南西部の高まりは頂部に5×3m程の平坦部をもち、標高45.3mを測る。

前述の溝状の凹部が人為によるものである確証は得られなかったが、土層の状況からは焼土遺構の形成後に埋没していると考えられる。

2. 検出された遺構・遺物

SX01 (焼土遺構) (第12図 図版5-8)

本跡は調査区南寄りにあり、調査区頂部に位置する。確認面は破砕シルト岩を主体とする土層である。

遺構は浅い土坑から若干の焼土・炭化物が検出されたもので、土坑の規模は56×50cmの範囲が確認され、深さ10cmを測る。北東側にある樹木根のため全容は確認できなかった。この西側には径36×25cm、深さ16cmを測る土坑と同様の覆土をもつピットがある。土坑、ピットの周囲の径2m程の範囲にはチップ状のものを中心に炭化物が分布していたが明瞭な掘り込み等は認められなかった。

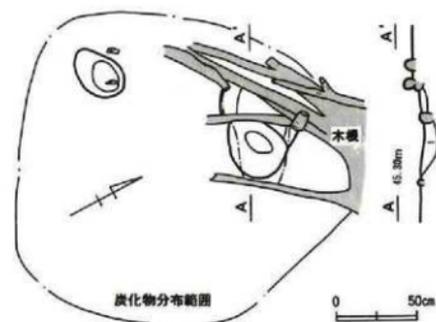
ピット付近で検出された長さ7cm程の炭化材には一部木質が遺存するものが見られた。

遺物は出土していない。地点全体でも本跡付近から陶磁器2点が出土したのみである。

本跡の時期は、付近から出土した遺物と木質の遺存する炭化材から見て近世以降に属すると思われる。なお、土坑上に見られた樹木は年輪観察では樹齢45年程と見られ、遺構の下限を示すと考えられる。

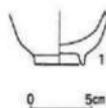
遺構外の出土遺物 (第13図 第6表)

1は陶器碗で、近代の所産と思われる。遺構外からの出土である。



1 オリーブ褐色土(2.57E-4) 炭化物少量と焼土ごく少量を含む。粘性・しまり強い。

第12図 SX01 (焼土遺構) 平面図



第13図 4地点出土遺物実測図

6・8地点

1. 地点の概要(第2・14図 図版6-1、7-1)

6・8地点は遺跡中央であり、北東-南西に走る細尾根状の丘陵上に位置する。調査区の北東端からは北西に走る丘陵支脈が派生しており、その北東側は比高差のある鞍部で丘陵が途切れている。調査区の南西端では丘陵は東-西に走行方向を変え、頂部に本遺跡9地点、10地点を載せる。現況では南東側は大きく削られ比高差4m程の崖面になっているが、本来は南東側に位置する源ヶ谷池に向かう斜面であったものと思われる。調査区からの眺望は良好で、北側には垂木川支流の低地を見下ろし、南側には逆川流域の低地を介して小笠丘陵を望む。調査前の現況は山林で、現況での標高は、最高点で52.2mを測る。

本地点からは弥生時代後期の方形周溝墓1基、土坑2基、土器棺墓1基、焼土遺構1基と、これらの遺構を覆ってほぼ調査区全域にわたって広がる配石遺構1基が検出された。弥生時代の遺構は尾根状の丘陵頂部に1列に並んで検出されている。

調査は、樹木の伐採後、土層確認用のベルトを残して配石までの排土を行い、航空測量によって配石の実測を行った後、下位の遺構調査を行った。撤去しきれなかった木根が多くあるため遺構の多くは全容を確認できなかった。

調査区の堆積土層は全体に砂質で、小礫が多く含まれる。表土下からは配石遺構が検出された。下面の弥生時代遺構の確認面は径1cm前後の礫と砂を基調とする砂礫層で、方形周溝墓北溝底面ではその下位に軟質の岩盤層が認められた。

2. 検出された遺構・遺物

a. 弥生時代

SZ01(方形周溝墓)(第15図 図版7-3~5)

調査区北東端の、前述の丘陵支脈分岐点に位置する。調査区内の最高点にあたる。

北・西・南溝と2箇所の主体部が検出された。東側は南東に傾斜する斜面となっており、東溝は検出されていない。排除しきれなかった木根が多いため第1主体部が完掘できたのみで、他の溝、第2主体部は未確認部分がある。西溝と平行する第1主体部の方向を主軸方位とした。N-38°-Eを指す。周溝は北西・南西のコーナー部が切れ、北西部は1.6m、南西部は2.3m以上の陸橋部となっている。方台部に盛り土は確認されており、方台部の規模は南北8.5m、東西は南溝東端までの距離で6.6mを測る。

主体部(図版7-4・5)は、第1主体部が方台部北寄り、第2主体部が南寄りから検出された。第2主体部は残存部から長軸方向が未確認部分にかかると思われ、主軸方向は第1主体部の主軸方向と直交する。形状は、第1主体部が長方形の整った箱形を呈し、第2主体部も同様な形状と推定される。規模は、第1主体部が確認面で長軸243cm、短軸108cm、底面で長軸208cm、短軸77cm、深さ34cmを、第2主体部が、確認面で長軸100cm(確認部分)、短軸111cm、底面で長軸83cm、短軸70cm、深さ57cmを測る。

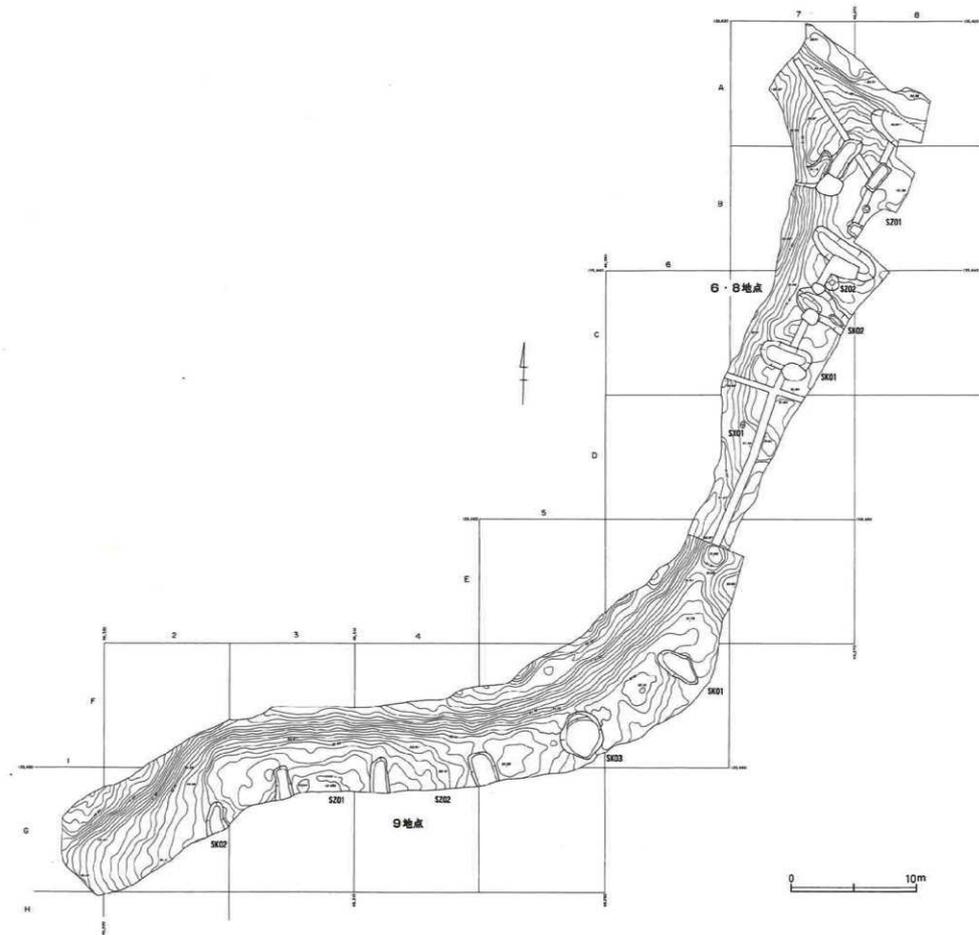
両主体部のほぼ中間の位置からは径60cm、深さ25cmを測るビット1基が検出された。ビットの覆土は第1主体部2層と同様であることから本跡に属すると思われる。

南溝は確認面での長さ6.0m、幅2.0m、底面の長さ5.0m、幅0.9m、深さ60~80cmを測る。横断面は逆台形を呈するが、立ち上がりは丸みをもつ。底面は比較的平坦で、緩く西傾する。

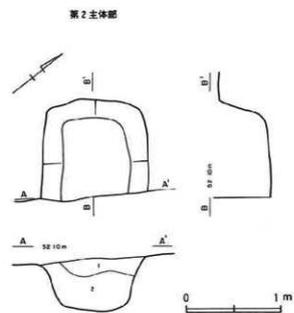
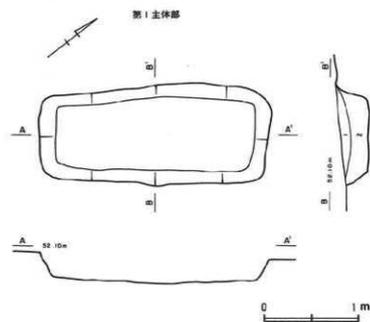
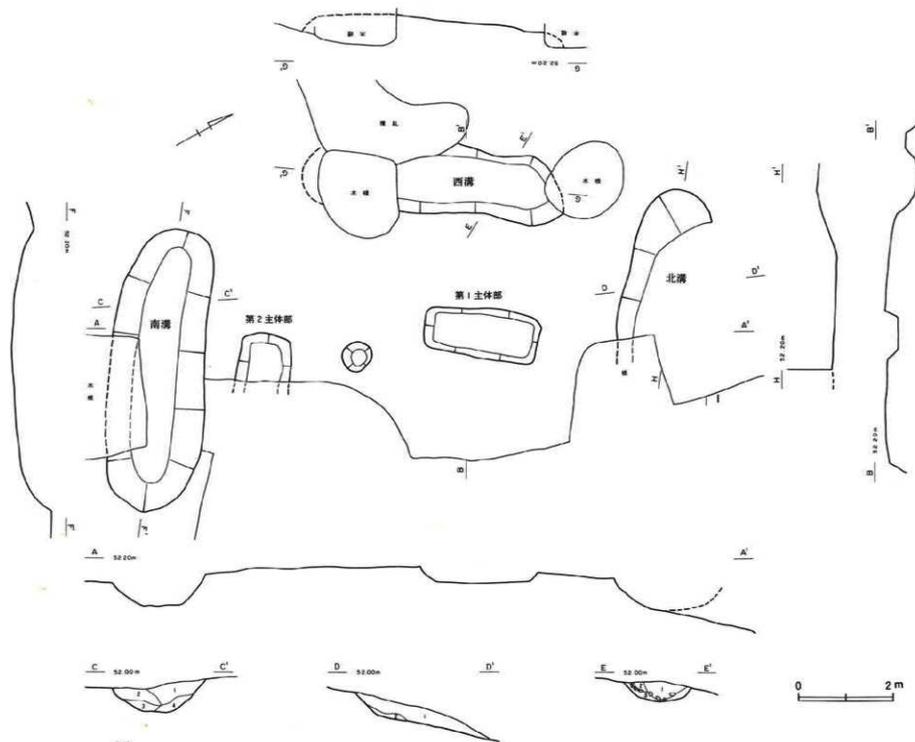
西溝は木根のため両端を確認できなかったが、北端は残存部の形状から推定できる。南端は木根が著しく掘り上げることができなかったが確認面での土質から推定した。確認面での長さ5.5m前後、幅1.3~1.5m、底面の幅0.9~1.0m、深さ35~70cmを測る。横断面はレンズ状を呈する。底面は南傾する。

北溝は東側を木根のため確認できず北側は斜面に沿って崩落しているが、未調査部の土層断面から幅が推定できる。確認面での長さ4.5m以上、幅2.2m前後、底面の幅1.5m前後、深さ70cmを測る。方台部側は丸みをもって立ち上がる。

各溝の底面は地形に応じた傾斜は見られるが、標高51.0~51.2m前後となり、主体部底面の標高は第1主体部が51.7m、第2主体部が51.4mを測る。



第14図 G・B及びD地点遺構配置図



北溝

- 1 黒褐色土(10R-3/2) 径3cm以下の礫多量と径10cm前後の礫を含む。粘性弱く、しまり欠ける。
- 2 黒褐色土(10R-3/2) 径3cm以下の礫多量と径10cm前後の礫を含む。粘性弱く、しまり欠ける。

南溝

- 1 黒色土(5YR-2/1) 径5cm以下の礫を含む。粘性有、しまり弱い。
- 2 黒褐色土(10R-2/2) 径3cm以下の礫・シト・砂粒を含む。粘性・しまり弱い。
- 3 黒色土(10YR-4/3) 径3cm以下の礫・シト・砂粒を含む。粘性・しまり欠ける。

南溝

- 1 黒褐色土(10R-2/2) 径3cm以下の礫・シト・砂粒を含む。粘性・しまり弱い。
- 2 黒色土(5YR-2/1) 径5cm以下の礫を含む。粘性有、しまり弱い。
- 3 黒褐色土(10R-3/2) 径3cm以下の礫を多量含む。粘性やや有、しまり欠ける。
- 4 黒色土(10YR-4/3) 径3cm以下の礫多量とシト・砂粒を含む。粘性・しまり欠ける。

主体部(南溝)

- 1 黒褐色土(10R-3/4) 径5cm前後の礫を多量含む。粘性欠け、しまりやや有。
- 2 黒褐色土(10R-3/2) 径10cm前後の礫を多量含む。粘性・しまりやや有。

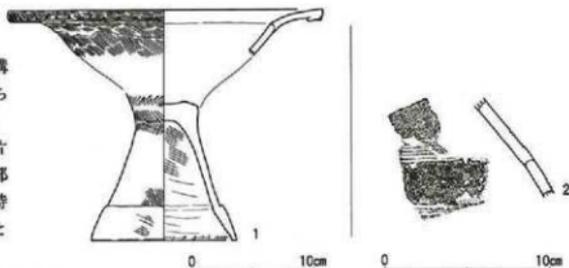
第15図 SZ01平面図

出土遺物

(第16図 第1表 図版18-2)

南溝から高坏、北溝から壺、西溝から高坏と蓋が出土した。このうち南溝、北溝出土の2点を図示した。

1は高坏ではほぼ1個体分の破片が出土したが、遺存状況が悪く坏部の下半は復元できなかった。弥生時代後後半(菊川式期)に属すると思われる。2は壺片である。



第16図 SZ01出土遺物実測図

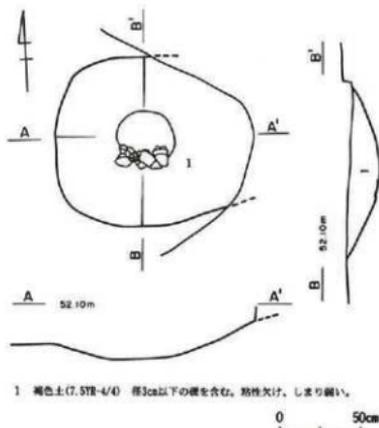
SZ02 (土器棺墓) (第17図 図版7-6)

SZ01南溝とSK02の中間に位置する。

一部木根にかかり上端の形状に未確認の部分があるが、隅丸方形または楕円形の掘り込みを持つと思われる、長軸方向はN-90°を指す。規模は長軸が121cmまで確認され、短軸104cm、深さ19cmを測る。断面形はレンズ状を呈する。遺物は、底面に張りつくように壺の底部のみが検出された。この出土状況からみて、本跡上部は削平されているものと思われる。

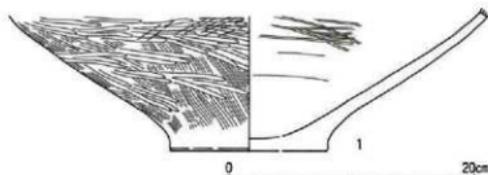
出土遺物 (第18図 第1表)

上記の壺1点を図示した。胴部最大径を下位にもつと思われ、弥生時代後後半以降に属すると思われる。



1 褐色土(7.5TB-4/0) 径3cm以下の破を含む。粘性欠け、しまり弱い。

第17図 SZ02平面図



第18図 SZ02出土遺物実測図

SK01 (第20図 図版7-7)

土坑は2基が検出された。形状の上では周溝墓の周溝と差はないが、周溝墓を構成する組み合わせが確認できなかったものを土坑とした。SZ01南溝と平行して丘陵を横断する方向に、ほぼ等間隔でSK01・SK02が位置している。

SK01は南東側に木根がかかり一部未調査である。形状は楕円形を呈し、規模は長軸413cm、短軸202cm、深さ68cmを測る。断面形は皿状を呈する。覆土下層からは拳大の礫が多量出土した。礫の上位からは土器片がやや集中して出土している。土層断面の観察によれば、土器を覆う土層は土坑外の土層に連続しており自然堆積と考えられる。

SK02 (第20図)

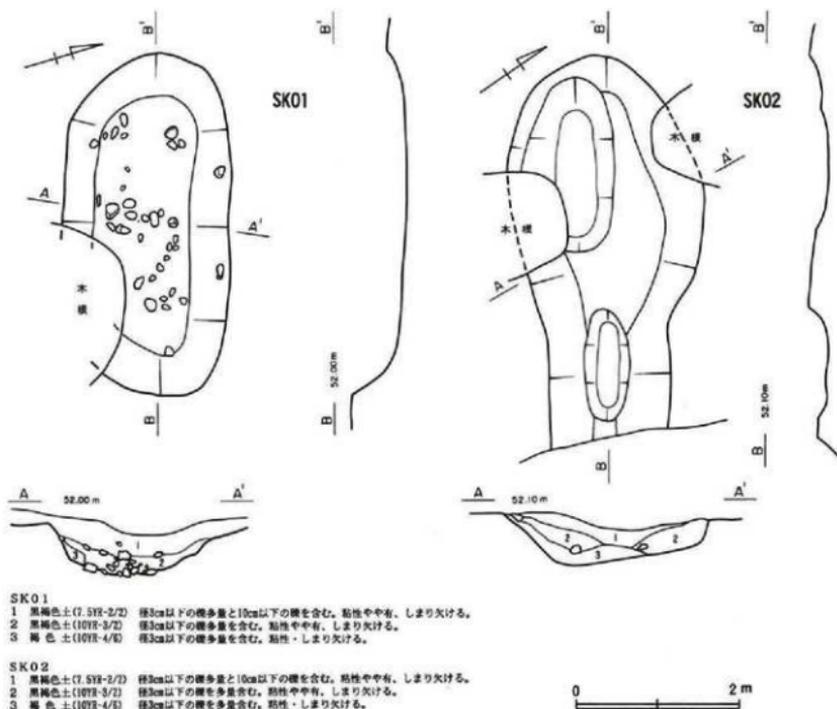
SK02は南・北に木根がかかり一部未調査である。また、東側は斜面に沿って崩落している。形状は溝状を呈するが、西側2/3の形状は楕円形を呈しており複数の遺構が重複している可能性があるが確認できなかった。規模は長軸は480cmまで確認され、短軸242cm、深さ62cmを測る。底面の2箇所には楕円形の掘り込みが見られる。覆土下層からは拳大の礫が若干出土し、礫の上位から若干の土器片が出土した。

出土遺物(第19図 第1表 図版18-2)

1は壺頸部でSK01から、2は壺口縁部でSK02から出土した。



第19図 SK01・02出土遺物実測図



第20図 SK01・02平面図

SX01 (焼土跡) (第21図 図版7-8)

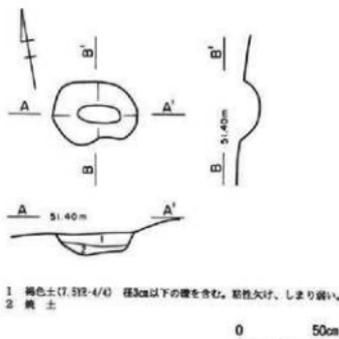
丘陵頂部より西側に若干下った位置にあり、SX01の南側5mに位置する。

本跡は土坑内から焼土が検出されたもので、土坑の形状は不整楕円形を呈し、長径52cm、短径39cm、深さ13cmを測る。焼土は土坑の底面から6～3cmの厚さで検出されている。

遺物は出土していないが、検出状況から該期と判断した。

遺構外の遺物

該期に属する遺物は、若干の土器片が出土しているがいずれも小片で図示し得なかった。



第21図 SX01平面図

b. 時期不明の遺構

SX02 (配石遺構) (附図 図版6-2、7-2)

本跡は丘陵頂上部の尾根状地形に沿った、長さ40m、幅3～7m程の範囲に拳大を中心とする礫が分布するもので、前述の弥生時代の遺構を覆って調査区全域から検出された。附図ではSX01・SX02上部を若干掘り込んでしまったため凹部となっているが、この上部からも礫が検出されている。弥生時代の遺構確認面から本跡上面までの層厚は20cm前後を測り、含まれる礫の状況からみて調査区周辺の地山層に由来する土層であると推測される。礫の分布には際立った粗密は認められない。

本跡からは須恵器と銅銭が出土している。須恵器坏(1)と銅銭(3)は表土の除去作業中に配石最上面から出土し、須恵器蓋(2)はSZ01第2主体部直上から出土した。出土位置付近は本根による攪乱が著しく、本跡の時期を示す確証を持ちうる出土状況ではない。従って本跡の時期についても時期不明として報告する。

出土遺物 (第22図 第7表 図版18-2)

1は須恵器坏で奈良時代前半に属すると思われる。2は須恵器片で、極めて小片であるため詳細は不明だが、蓋と思われる。3は寛永通寶(4文銭)で、径2.8cm、孔径0.7cm、重さ4.6gを測る。



第22図 SX02出土遺物実測図

9 地点

1. 地点の概要 (第2・14図 図版6-1、8-1)

9 地点は遺跡中央にあり、東-西に走る細尾根状の丘陵上に位置する。丘陵は調査区東側で北東に走行方向を変え本遺跡6・8地点に連続し、西側は丘陵頂部をたどると10地点に至る。調査区の南側は丘陵を大きく削られ比高差4m程の崖面になっているが、本来は南西側に位置する本遺跡11地点につながる斜面であったものと思われる。北側は丘陵北側の沖積地に向かう急斜面となっており、現況での丘陵頂部の幅は4～6mを測る。

調査前の現況は山林で、現況での標高は最高点で約53mを測る。

本地点からは方形周溝墓と考えられる溝2組、土坑3基が検出された。分布状況は尾根状の丘陵頂部にはほぼ等間隔に1列に並んでおり、互いの遺構の存在が強く意識されていると推測される。SK02の他は出土遺物から時期を特定できないが、検出状況からすべて同時期に属するものと思われる。

調査は、樹木の伐採後、木根の撤去と遺構確認までの排土を重機によって行い、人力で精査し、遺構調査に移行した。

調査区の堆積土層は全体に砂質で、小礫が多く含まれる。遺構確認面は径1cm前後の礫を多量に含む砂礫層である。

2. 検出された遺構・遺物

a. 弥生時代

SZ01 (方形周溝墓) (第23図 図版8-2)

調査区西寄りに位置する。

東-西溝が検出されたのみであるが、溝の平行する形状から方形周溝墓とした。南側を前述の崖面で切られている。北溝は検出されておらず、当初より存在しなかった可能性と共に、北側斜面の崩落によって消滅した可能性が考えられる。東-西溝共に北端は立ち上がりしており、北溝が存在した場合その間に陸橋部を持つものと考えられる。東-西溝の走行方向を主軸方位とした。N-6°-Wを指す。方台部盛り土は確認されていない。東西溝間の距離は6.1～6.6mを測り、検出された溝の長さからみて残存部は1/2以下と推測される。

東溝は長さ2.9mまで確認され、確認面の幅1.3～1.6m、底面の幅0.9～1.2m、深さ29cmを測る。横断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。

西溝は長さ2.7mまで確認され、確認面の幅1.1～1.5m、底面の幅約0.8m、深さ40cmを測る。横断面は逆台形を呈するが、立ち上がりは丸みをもつ。底面は平坦である。

遺物は出土していない。

SZ02 (方形周溝墓) (第23図 図版8-3)

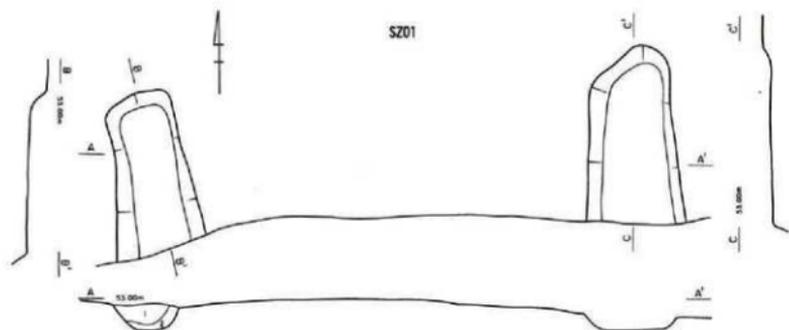
調査区中央に位置する。

SZ01と西溝を共有している。遺存状況はSZ01と同様で、残存部は1/2以下と推測される。東-西溝の走行方向を主軸方位とした。N-3°-Wを指す。方台部盛り土は確認されておらず、東西溝間の距離は6.5～7.0mを測る。

東溝は長さ2.8mまで確認され、確認面の幅2.0m、底面の幅1.5m、深さ20cmを測る。横断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。

遺物は出土していない。

SZ01

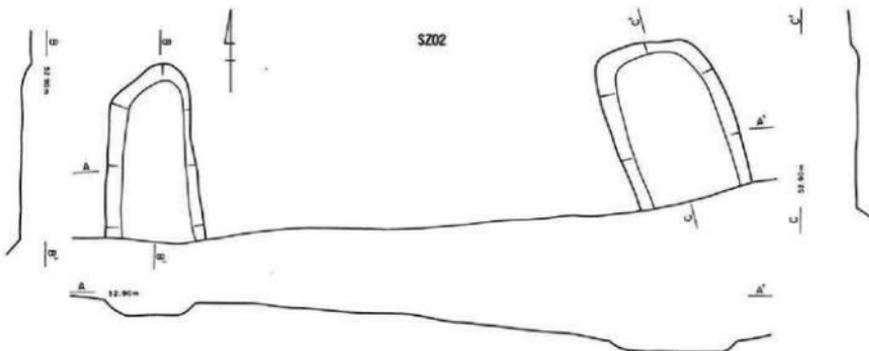


西溝

- 1 黒褐色土(018-2/2) 径3cm以下の礫を多量含む。粘姓・しまり弱い。
- 2 暗褐色土(018-3/4) 径3cm以下の礫とシルト岩粒子を含む。粘姓やや弱。しまり弱い。

0 2 m

SZ02



0 2 m

第23図 SZ01・02平面図

SK01 (第24図 図版8-4)

調査区東側にあり、本地点の遺構群の東端に位置する。

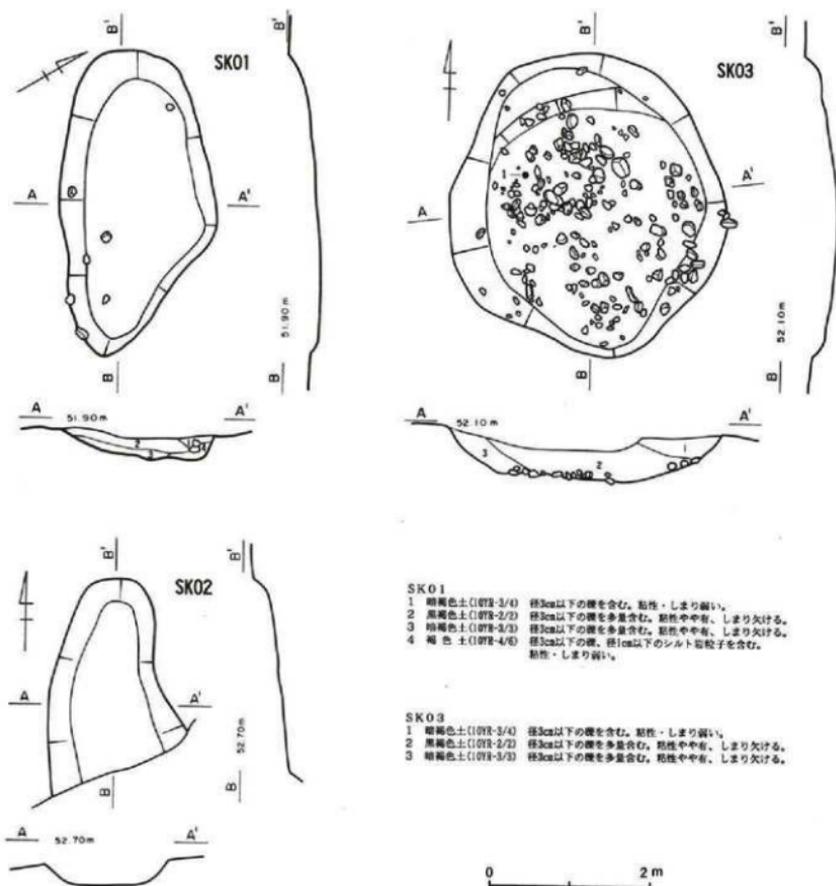
形状はやや不整な楕円形を呈し、6・8地点で検出された周溝墓の周溝と類似した形状であるが、周溝墓を構成する組み合わせは検出されていない。規模は長軸384cm、短軸198cm、深さ42cmを測る。断面形は皿状を呈する。覆土下層からは拳大の礫が若干出土した。

礫以外の遺物は出土していない。

SK02 (第24図)

調査区西側にあり、本地点の遺構群の西端に位置する。南側を崖面に切られ全容は不明であるが、あるいは溝であるかもしれない。

形状は不整な楕円形を呈すると思われ、規模は長軸が280cmまで確認され、短軸171cm、深さ38cmを測る。断面形は皿状を呈する。遺物は出土していない。



- SK01
- 1 暗褐色土 (I01F-3/4) 径3cm以下の礫を含む。粘性・しまり弱い。
 - 2 黒褐色土 (I01F-2/2) 径3cm以下の礫を多量含む。粘性やや弱、しまり欠ける。
 - 3 暗褐色土 (I01F-3/3) 径3cm以下の礫を多量含む。粘性やや弱、しまり欠ける。
 - 4 褐色土 (I01F-4/6) 径3cm以下の礫、径1cm以下のシルト磁粒子を含む。粘性・しまり弱い。

- SK03
- 1 暗褐色土 (I01F-3/4) 径3cm以下の礫を含む。粘性・しまり弱い。
 - 2 黒褐色土 (I01F-2/2) 径3cm以下の礫を多量含む。粘性やや弱、しまり欠ける。
 - 3 暗褐色土 (I01F-3/3) 径3cm以下の礫を多量含む。粘性やや弱、しまり欠ける。

第24図 SK01~03平面図

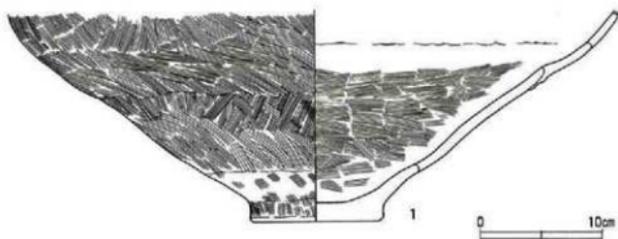
SK03 (第24図 図版8-5・6)

調査区東寄りにあり、SK01とSZ02の中間に位置する。

形状は楕円形を呈し、規模は長軸385cm、短軸342cm、深さ62cmを測る。断面形は皿状を呈する。底面からは拳大を中心に径30cmまでの礫が多量出土した。遺物は覆土上層から壺型土器1点が出土した。出土状況から、正位でその場に埋納されたものと考えられる。

出土遺物 (第25図 第2表 図版19-1)

1は胴部下位に最大径を持つと思われる壺底部で、弥生時代後期以降に属するものと思われる。



第25図 SK03出土遺物実測図

b. 平安時代

遺構は検出されていないが、灰釉陶器2点が出土した。

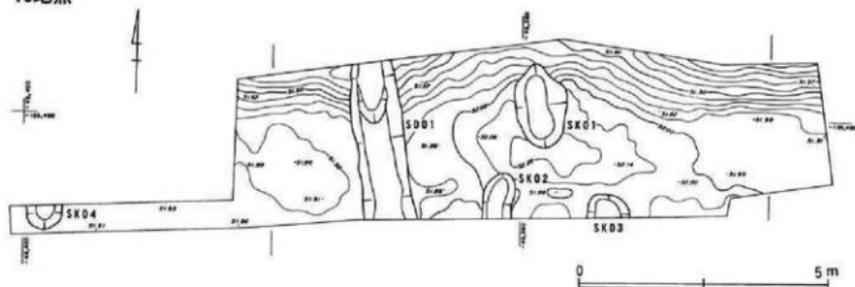
遺構外の遺物 (第26図 第8表 図版19-1)

1・2は灰釉陶器碗の底部片である。



第26図 遺構外出土遺物実測図 (平安時代)

10地点



第27図 遺構配置図

1. 地点の概要 (第2・27図 図版8-7)

10地点は遺跡北西端にあり、東-西に走る細尾根状の丘陵上に位置する。調査区の南北は丘陵を開析する小支谷が迫り急斜面となっている。南東側は斜面の勾配が緩く本遺跡11地点へと続き、南側の斜面下には本遺跡12地点が位置している。調査前の現況は植林による杉林で、現況での標高は、最高点で約52.5mを測る。

本地点からは溝1条、土坑4基が検出された。分布状況は丘陵を横断するように位置するSD01の東側からSK01~03が集中して検出され、西側にやや離れてSK04が検出された。SD01の他は出土遺物から時期を特定できないが、覆土の類似からすべて同時期に属するものと思われる。

調査は、樹木の伐採後、木根の撤去と遺構確認面までの排土を重機によって行い、人力で精査し、遺構調査に移行した。

調査区の堆積土層は全体に砂質で、小礫が多く含まれる。遺構確認面は径1cm前後の礫を多量に含む砂礫層である。

2. 検出された遺構・遺物

SD01 (第28図 図版8-8)

調査区西寄りに位置する。

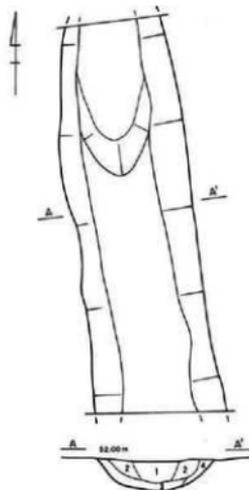
丘陵頂部を横断しており、両端とも調査区外にかけ全容は確認されていない。走行方向はN-8°-Wを指す。

直線的に走り、長さ6.5mまで確認され、確認面の幅1.6~2.1m、底面の幅0.9~1.1m、深さ50cmを測る。横断面はレンズ状を呈し、北側底面は1段掘り窪められている。

遺物は折り返し口縁を持つ壺口縁部片が1点出土しているが、小片で図示し得なかった。弥生時代後期の範疇でとらえられよう。

SK01 (第29図 図版9-2)

やや不整な楕円形を呈する。規模は長軸は340cm、短軸215cm、深さ41cmを測る。断面形は皿状を呈する。



- | | |
|------------------|-------------------------------|
| 1 黒色土(10YR-2/1) | 径3cm以下の礫を含む。粘性・しまりやや中。 |
| 2 黒褐色土(10YR-2/2) | 径1cm以下の礫を含む。粘性有。しまり中やや中。 |
| 3 黒褐色土(10YR-3/1) | 径3cm以下の礫を多量含む。粘性やや強い。しまり中やや中。 |
| 4 暗褐色土(10YR-3/3) | 径1cm以下の礫を含む。粘性有。しまり中やや中。 |

0 2m

第28図 SD01平面図

SK02 (第29図 図版9-3)

南側が調査区外にかかり全容は不明である。確認部分の形状はやや不整な楕円形を呈するが、溝状にのびる可能性が考えられる。規模は長軸は190cmまで確認され、短軸120cm、深さ38cmを測る。断面形は皿状を呈する。

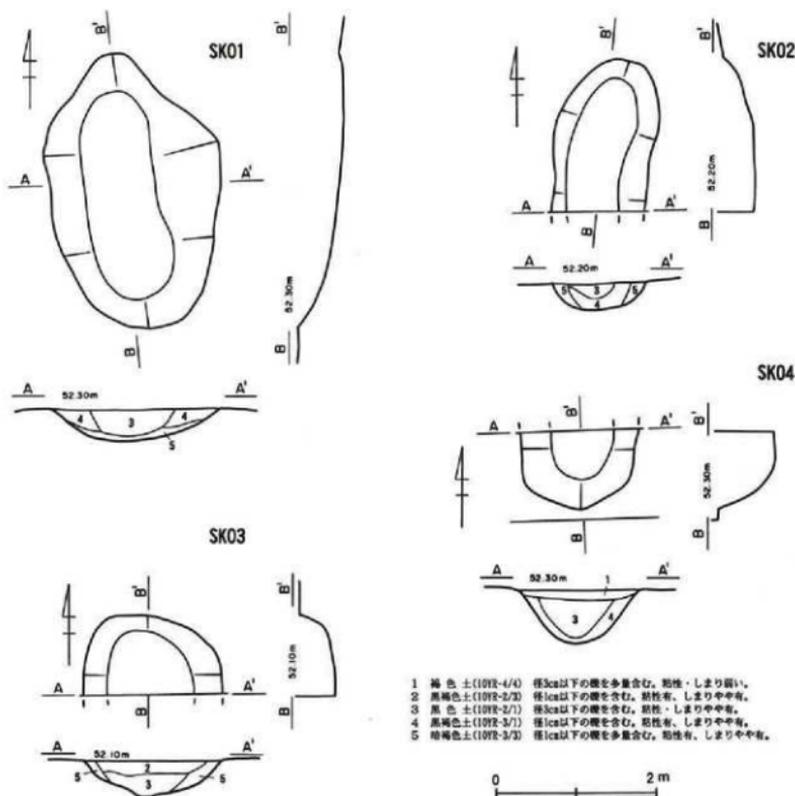
SK03 (第29図)

南側が調査区外にかかり全容は不明である。確認部分の形状は楕円形を呈する。規模は長軸171cm、深さ43cmを測り、短軸は99cmまで確認された。断面形は皿状を呈する。

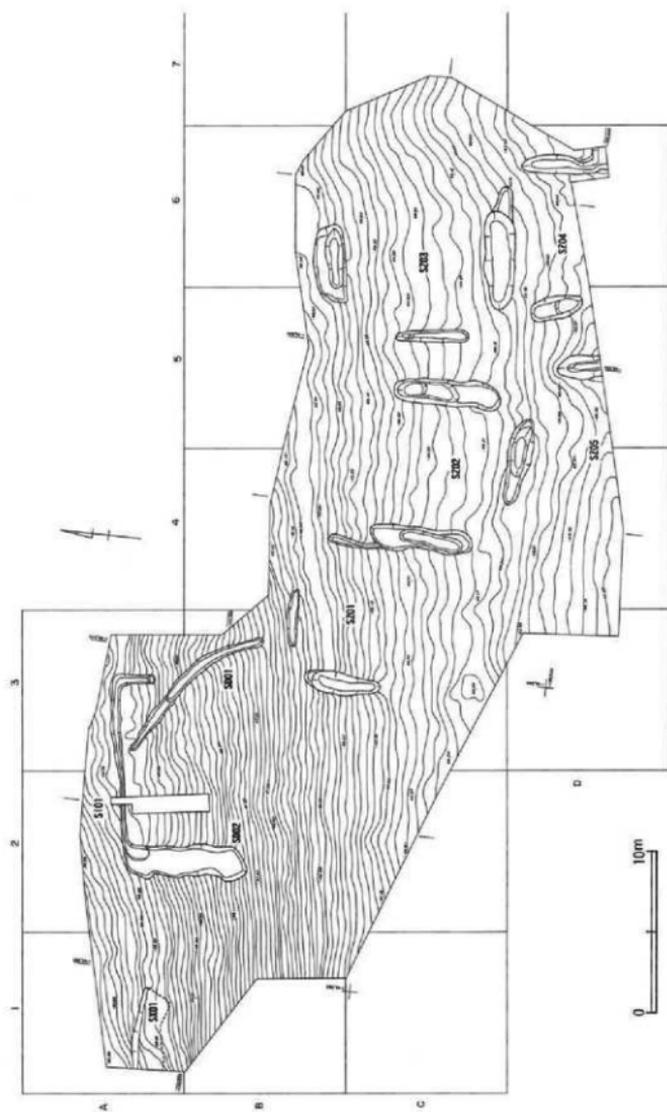
SK04 (第29図)

北側が調査区外にかかり全容は不明である。確認部分の形状は楕円形を呈する。規模は長軸147cm、深さ67cmを測り、短軸は99cmまで確認された。断面形は碗状を呈する。

SK01~04からは遺物は出土していない。



第29図 SK01~04平面図



第30图 遺構配置図

11地点

1. 地点の概要 (第2・30図 図版9-1・4・5)

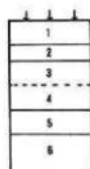
11地点は遺跡内の西寄りにあり、丘陵南側の斜面上に立地する。調査区北東側は大きく削平され、丘陵頂部との比高差4mを測る崖面となっているが、本来は丘陵頂部から本地点南端へと連続する斜面地形であったと考えられる。北側の丘陵頂部には本遺跡6・8、9、10地点があり、南西側へ下った谷内には12地点が位置している。調査前の現況は茶畑で、標高は43~51mを測る。

本地点からは弥生時代中期の方形周溝墓5基、古墳時代後期の溝2条、時期不明の竪穴2基が検出された。分布状況は調査区中央から南東側にかけて方形周溝墓が分布し、他の遺構は調査区北西側にまとまっている。

調査は、重機によって茶の木を撤去した後、任意の位置に設定したトレンチで遺構を確認した。その後、重機による遺構確認面までの排土と人力による精査を行い、遺構調査に移行した。遺構調査にあたっては調査区の全域に10m方眼の大グリッドを設定し南北方向を北からA・B・C・・・、東西方向を西から1・2・3・・・とし、遺構実測の基準とした。

層序 (第31図)

調査区の大部分では表土下が遺構確認面となっており、東半部の一部で確認面上に黒色土の堆積が認められた。この黒色土層は清覆土と類似しており、この土層と表土の間から弥生土器1点と灰釉陶器1点が出土している。遺構確認面以下の土層は、黄褐色土、褐色~灰褐色粘質土、黄褐色砂礫層、軟質のシルト岩層の順に堆積している。以下に模式図を示した。



- 1 表土 (耕作による擾乱層)
- 2 黒色土 (01R-1/2) シルト岩粒子を少量含む。腐植土と似る。上層から平安時代の遺物が出土。しまり有。
- 3 黄褐色土 (31R-5/4) ローム。周溝墓区間では最大厚約40cmを測り、それ以下は粘土化する層に推移する。
- 4 褐色土 (01R-4/0) 粘土質。下部は黄褐色 (01R-4/1) を示す。
- 5 黄褐色土 (31R-5/4) 10m程度の層を高調とする砂礫層。粘性有。しまり非常に強い。
- 6 シルト岩層 (51R-5/2) 基盤層。軟質でスコップで掘れる。



第31図 層序

2. 検出された遺構・遺物

a. 弥生時代

SZ01~SZ05 (方形周溝墓)

5基が検出された。SZ04・SZ05は調査区外にかかり全容は確認されていない。いずれからも主体部は検出されていない。SZ01・02・03は1辺には周溝が存在しない形態をとっており、SZ04・05も同様の形態の可能性が高いと考えられる。周溝の存在しない辺を正面として主軸方位を計測した。

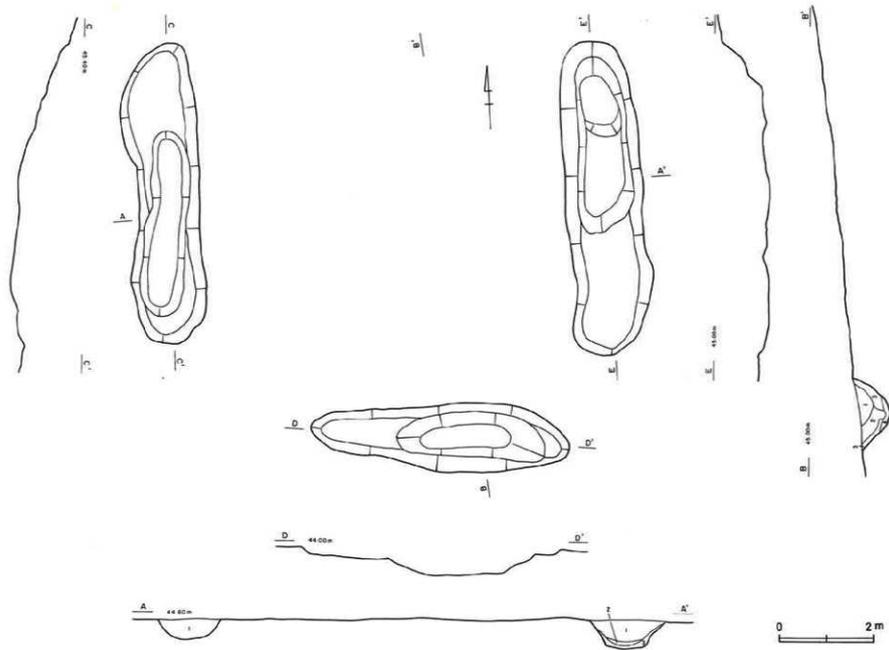
SZ01 (第32図 図版10-1)

5基の方形周溝墓の北西端にあり、B-3グリッド南東を中心位置する。SZ02と重複し、東溝がSZ02西溝に切られる。

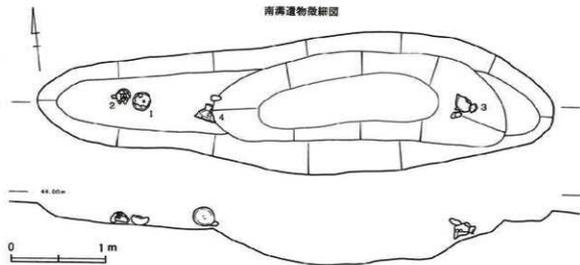
西・北・東溝が検出された。西溝に比して北・東溝の規模が著しく小さい。主軸方位はN-1°-Wを指す。周溝は北西・北東のコーナー部が切れ、北西部は1.7m、南西部は3.5mの陸橋部となっている。西・北溝の長軸は方台部側が直線的で、外側が緩い弧状を描く。方台部盛り土は確認されていない。方台部の規模は南北5.5m (西溝南端まで)、東西7.7mを測る。

西溝は北端部から50cmの位置に段を持ち南側は深く掘り込まれている。長辺の方台部側は直線的で外側は弧状を描く。確認面での長さ4.8m、幅0.7~1.4m、底面の長さ3.6m、幅0.5~0.6m、深さ30~80cmを測る。横断面は逆台形を呈し、縦断面は弧状を描き斜面に沿って南傾する。

北溝は直線的に走り、長辺の外側が緩い弧状を描く。確認面での長さ3.5m、幅0.5~0.6m、底面の長さ3.3m、幅0.3~0.5m、深さ5~25cmを測る。横断面はレンズ状を呈し、縦断面は水平であるが、凹凸が多い。

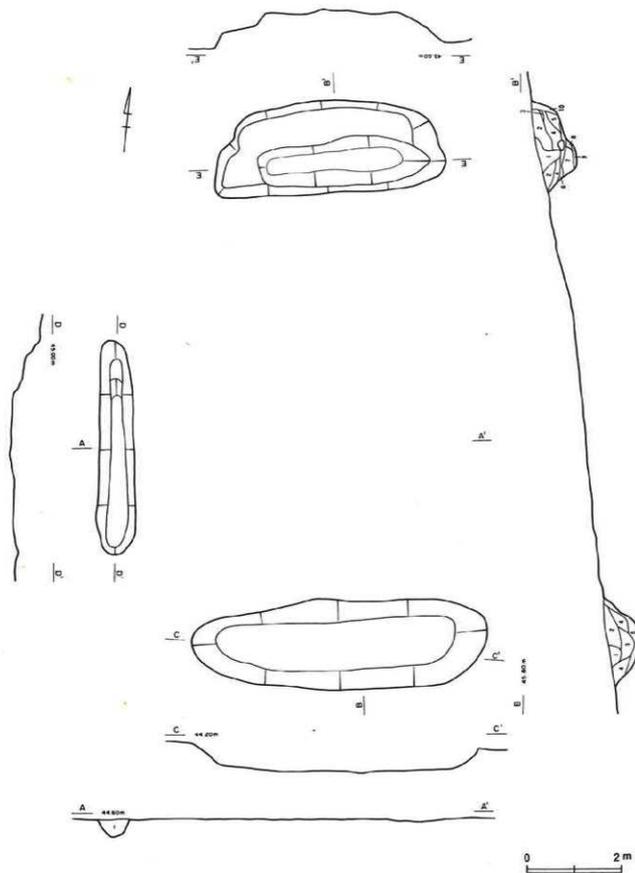


南海遺物散佈図



- 遺構
- 1 黒色土(17E-1.7/1) 径5~10mmのシルト岩片・黄褐色の砂岩礫を含む。粘性弱く、しまりや中。
 - 2 赤黒色土(17E-2/1) 径5~10mmのシルト岩・砂岩を若干と径10~20mmの礫少量を含む。粘性：しまりやや弱い。
 - 3 黄褐色土(17E-3/1) 黄褐色土が混入する。粘性やや中、しまり弱い。
- 遺物
- 1 黒色土(17E-1.7/1) 径5~10mmの砂岩片若干と微小な白色・褐色粒子少量を含む。径10mm程度の土層断面付近にみられた。
- 溝
- 1 黄褐色土(17E-2/2) 径5mm前後の礫を少量含む。粘性やや弱く、しまりやや中。
 - 2 黒色土(17E-2/1) 径5~10mmの礫少量、微小な白色・褐色粒子少量、炭化粒子若干を含む。粘性やや弱く、しまり弱。
 - 3 黄褐色土(17E-3/1) 径5~10mmの礫若干と黄褐色土粒子を含む。粘性やや中、しまり強い。
 - 4 黄褐色土(17E-3/2) 径5~10mmの礫を少量含む。粘性：しまり強い。

第33図 SZ02平面図・南海遺物散佈図



第34図 SZ03平面図・北溝遺物微細図

西溝

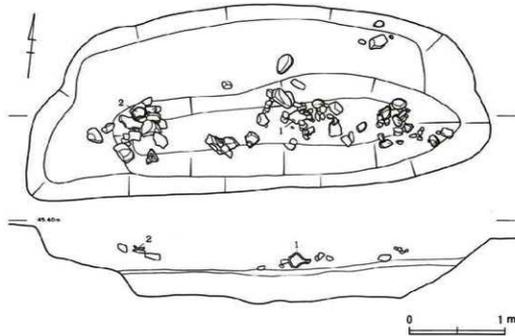
1 黒色土(7.518-2/1) 径10~20mmの礫石子と径1mm前後の黄褐色・褐色粒子少量を含む。粘性やや弱、しまり有。

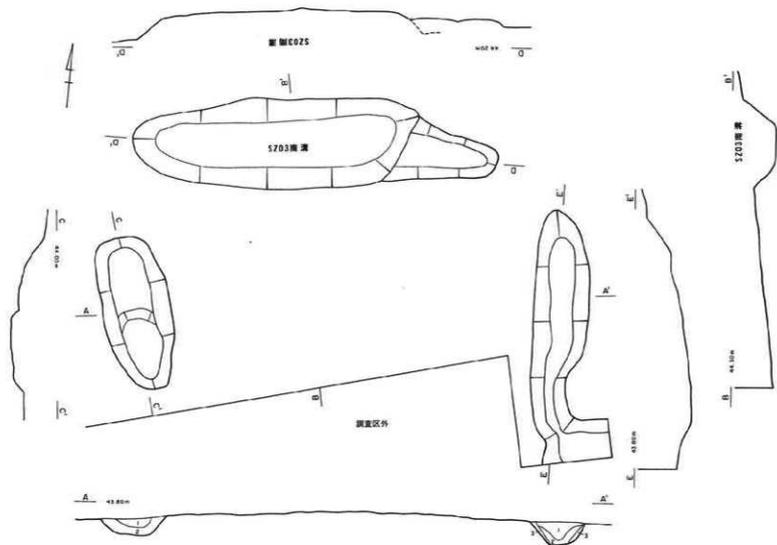
北溝

- 1 黄乱層(深層に伴う)
- 2 黒色土(2.517-2/1) 径3~5mmの砂岩粒子と微小な白色粒子少量を含む。粘性弱く、しまりやや弱。礫山とはばら。腐植層か、しまり強い。
- 3 黒色土(1.019-4/4) 1層に準ずるが、粒子の含有量が少ない。
- 4 黒色土(1.019-2/1) 層下の褐色土が混入する。しまり有。
- 5 黒色土(1.019-4/4) 礫山の褐色土と黒褐色土の混合層。底部に砕かれた土層。粘性やや弱、しまり強い。
- 6 黒褐色土(1.019-2/2) 礫土粒子少量と腐植物を含む。粘性やや弱く、しまり強い。
- 7 黒色土(7.518-2/2) 礫土粒子少量と腐植物を含む。粘性やや弱く、しまり強い。
- 8 黒色土(7.518-2/1) 7層に黒褐色土が少量に混入する。
- 9 黒褐色土(1.019-1/1) 石子の割合を増を含む。粘性、しまり有。
- 10 黒色土(1.019-4/4) 礫山とはばら。先行する黄の礫土(埋込土)。粘性やや弱、しまりきわめて強い。

南溝

- 1 黒色土(1.019-2/1) 径5~20mmの礫を多量含む。粘性弱く、しまり強い。
- 2 黒褐色土(1.019-3/1) 径2~3mmのシルト・粉片と径5mm前後の礫少量を含む。粘性弱く、しまり有。
- 3 黒色土(7.518-2/1) 径10mm前後と径50~50mmの礫それぞれ少量を含む。粘性やや弱、しまり有。
- 4 黒褐色土(7.518-2/1) 径5~20mmの礫を少量含む。粘性弱く、しまりやや弱い。
- 5 黒褐色土(1.019-2/3) 径5~20mmの礫多量と黒褐色土粒子を含む。粘性やや弱、しまり有。





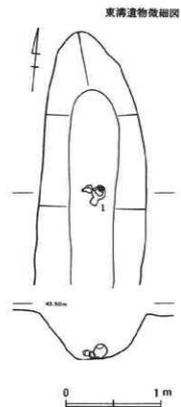
西溝

- 1 黒色土 (S1-2/1) 径5~30cmの溝を極めて多量含む。しまり強い。
- 2 暗褐色土 (T1-2/2) 径5~30cmの溝を極めて多量含む。しまり強い。

東溝

- 1 黒色土 (T1-2/1) 径10~40mmの礫と黒・黄褐色砂子を含む。粘性やや中。しまり有。
- 2 黄褐色土 (T1-2/1) 径5mm前後の礫と黄褐色土粒子多量を含む。粘性弱く。しまりやや有。
- 3 暗褐色土 (T1-2/2) 径5mm前後の礫を少量含む。黄褐色土が混入する。粘性やや中。しまり有。

0 2 m



第35図 SZ04平面図・東溝遺物発掘図

東溝は南側で外側に湾曲する。確認面での長さは3.6mまで確認され、幅0.3～0.5m、底面の長さは3.2mまで確認され、幅0.1～0.2m、深さ20cmを測る。横断面はレンズ状を呈し、縦断面は凹凸が多く斜面に沿って南傾する。

各溝の底面の標高は地形に応じており、向かい合う西・東溝は0.4mの比高差を持つ。

遺物は出土していない。

SZ02 (第33図 図版10-2、13-1～3)

5基の方形周溝墓のほぼ中央にあり、C-4グリッド東側を中心に位置する。西溝がSZ01東溝を切り、南溝がSZ05北溝と重複するが、土層断面から新旧関係が確認できなかったため、共有するとみておきたい。

西・南・東溝が検出された。主軸方位はN-4°Eを指す。周溝は南西・南東のコーナー部が切れ、南西部は3.1m、南東部は1.6mの陸橋部となっている。方台部の規模は8.0×7.6mを測る。

西溝は直線的に走り、北側の長辺外側は緩い弧状を描く。確認面での長さ6.4m、幅1.3～1.6m、底面の長さ6.0m、幅0.9～1.1m、深さ約20cmを測り、底面南寄りには長さ4.0m、幅0.8m、深さ20～35cmの掘り込みを持つ。横断面はレンズ状を呈し、縦断面は掘り込みを除けば概ね平坦で斜面に沿って南傾する。

南溝は直線的に走り、東側で若干外側に湾曲する。確認面での長さ5.4m、幅1.0～1.5m、底面の長さ5.1m、幅0.4～0.9m、深さ約20cmを測り、底面の東寄りに長さ3.1m、幅0.9m、深さ40cmを測る掘り込みを持つ。横断面はU字形を呈し、縦断面は掘り込みを除き平坦である。

東溝は直線的に走り、南側で若干方台部側に湾曲する。長辺の方台部側は直線的で外側は弧状を描く。確認面での長さ6.7m、幅1.4～1.6m、底面の長さ6.2m、幅1.0～1.1m、深さ35～50cmを測り、底面の北寄りに長さ3.8m、幅1.0～1.2m、深さ30cmを測る掘り込みを持つ。横断面は逆台形を呈し、縦断面は掘り込み底面は凹凸が多いが、全体に平坦で斜面に沿って南傾する。

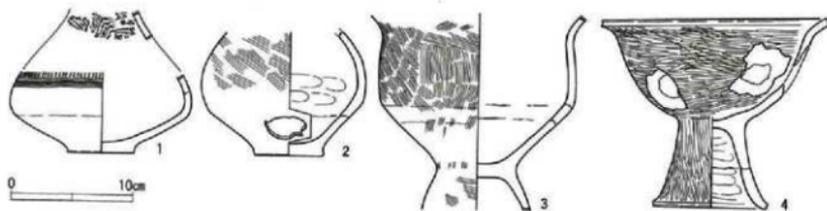
各溝の底面の標高は地形に応じており一定しない。

遺物は南溝から壺2点、甕1点、高環1点が出土した。いずれも弥生時代中期に属すると考えられる。

出土遺物 (第36図 第3表 図版19-2)

南溝出土の土器4点を図示した。

1・2は壺である。1は頸部以下が出土したが遺存状況が悪く、胴部上位を復元できなかった。2は底部に焼成後の穿孔が見られる。頸部以下がほぼ完形で出土したが、頸部以上の破片が出土しておらず、輪積み痕に沿って欠損した状態で埋納されたものと思われる。3は台付甕で胴部の2/3を欠損し、接合する破片は出土していない。4は高環でほぼ完形で出土した。坏部に2箇所の焼成後の穿孔が見られる。



第36図 SZ02出土遺物実測図

SZ03 (第34図 図版11)

5基の方形周溝墓の北東端にあり、C-6グリッド西側を中心に位置する。南溝がSZ04北溝を切る。

北・西・南溝が検出された。北・南溝に比して西溝の規模が小さい。主軸方位はN-81°Eを指す。周溝は北西・南西のコーナー部が切れ、北西部は3.8m、南東部は2.2mの陸橋部となっている。方台部の規模は南北8.5、東西7.1mを測る。

北溝は北側が若干張り出す形態を持ち、土層断面の観察によれば、この部分に先行する溝が重複していると考えられる。確認面での長さ4.9m、幅1.9~2.0m、底面の長さ4.5m、幅1.2~1.5m、深さ約70cmを測り、底面南寄りには長さ3.7m、幅0.8~1.1m、深さ25cmの掘り込みを持つ。横断面は逆台形を呈し、縦断面は掘り込みを除けば概ね平坦である。底面の掘り込み上面にはしまりの強い黒褐色土(6層)が貼られ、この直上からは径3~20cmの礫が集中して出土した。礫は掘り込みの西端、中央、東端付近に集中がみられ、礫とともに西端からは壺型土器底部1点、中央からは完形の壺型土器1点が出土した。

西溝は直線的に走る。確認面での長さ4.7m、幅0.6~0.8m、底面の長さ3.9m、幅0.2~0.4mを測り、底部は北端から80cmの位置に段を持ち、南側は深く掘り込まれている。深さは15~40cmを測る。横断面はU字形を呈し、縦断面は段差以下ではほぼ水平である。

南溝は長辺の方台部側は直線的で外側は弧状を描く。確認面での長さ6.2m、幅1.3~2.0m、底面の長さ5.0m、幅0.6~1.0cm、深さ45~60cmを測る。横断面は逆台形を呈し、縦断面は平坦でわずかに東傾する。

各溝の底面の標高は地形に応じており一定しない。

出土遺物(第37図 第3表 図版19-2)

北溝出土の土器2点を図示した。

1は壺で完形で出土した。わずかながら赤彩が残り、底部に焼成後の穿孔が見られる。弥生時代中期(白岩式期)に属するものと思われる。

SZ04(第35図 図版12-1)

5基の方形周溝墓の南東端にあり、D-6グリッドを中心に位置する。北溝西側をSZ03南溝に切られる。南側は調査区外にかかると。

西・北・東溝が検出された。主軸方位はN-7°Wを指す。周溝は北西・北東のコーナー部分が切れ、北東部は1.4mの陸橋部となっている。方台部の規模は南北6.2m以上、東西7.5mを測る。

西溝は短く楕円形を呈する。確認面での長さ3.3m、幅1.3~1.4m、底面の長さ2.8m、幅0.8m、深さ30~35cmを測り、底面南寄りには長さ1.5m、幅0.7m、深さ20cmの掘り込みを持つ。横断面は皿状を呈する。縦断面は弧状を呈し、掘り込み底面はほぼ水平である。

北溝は大部分をSZ03南溝に切られるが、方台部側が直線的で外側が弧状を描くと思われる。確認面での長さ2.5m、幅0.8~1.3m、底面の長さ2.0m、幅0.4~0.7m、深さ0.2~0.3mまで確認された。横断面は逆台形を呈し、縦断面は若干の凹凸があるがほぼ水平である。

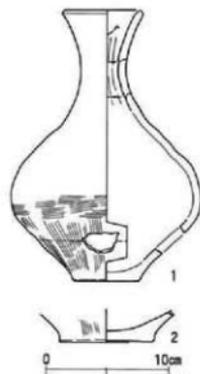
東溝は直線的に走り南側で幅を減じた後、確認された南端が東側に屈曲する形態を持つ。南側で他の遺構と重複している可能性が考えられるが、土層からは確認できなかった。確認面での長さ5.4m以上、幅0.7~1.2m、底面の長さ4.8m以上、幅0.5cm、深さ50cmを測る。横断面は逆台形を呈し、縦断面は平坦で地形に沿って南傾する。南側で他の遺構と重複するとした場合には、長さ4.8m程を測り、方台部側が直線的で外側が弧状を描く形状が想定される。底面上からは壺型土器1点が出土した。

各溝の底面の標高は地形に応じており一定しない。

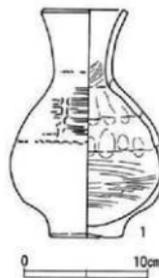
出土遺物(第38図 第3表 図版19-2)

東溝出土の壺1点を図示した。

1は壺である。ほぼ完形で出土したが極めてもろいため取り上げ時に胴部下位を欠損してしまった。そのため穿孔の有無は不明である。弥生時代中期(白岩式期)に属するものと思われる。



第37図 SZ03出土遺物実測図



第38図 SZ04出土遺物実測図

SZ05 (第39図 図版12-2)

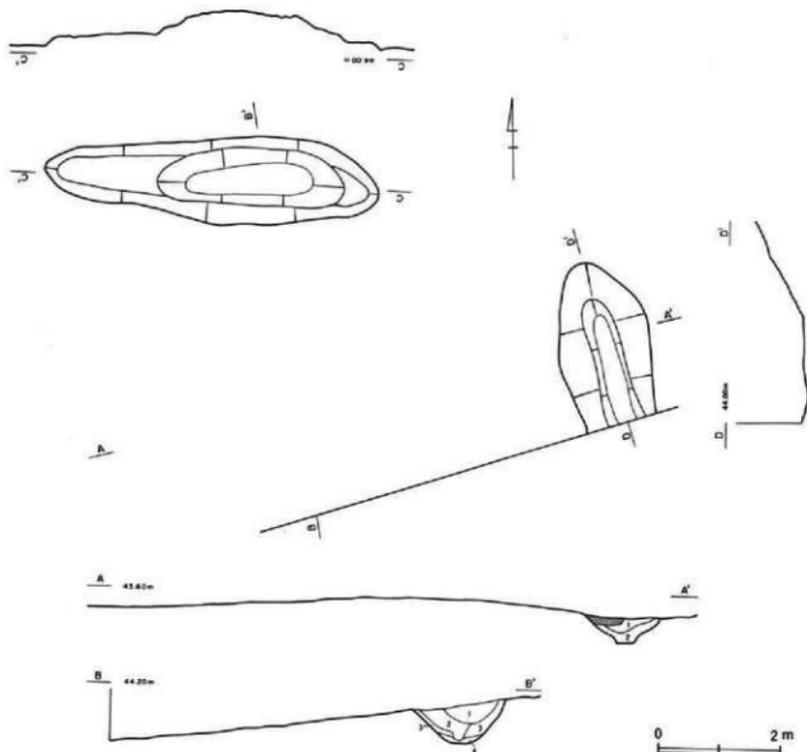
5基の方形周溝墓の南西端にあり、D-5グリッドを中心に位置する。北溝をSZ02と共有する。南側は調査区外にかかる。

北・東溝が検出された。他の方形周溝墓の形状からみて西側周溝は存在しないと思われる。主軸方位はN-82°-Eを指す。周溝は北東のコーナー部分が切れ、3.3mの陸橋部となっている。方台部の規模は南北6.0m以上、東西8.4mを測る。

北溝は共有するSZ02で触れたので割愛する。

東溝は確認面での長さ2.8m、幅1.1~1.5m、底面の長さ1.8m、幅0.2~0.3m、深さ0.5mまで確認された。横断面は碗状を呈し底部が急激にすばまる。縦断面は立ち上がりか緩やかで底面はほぼ水平である。

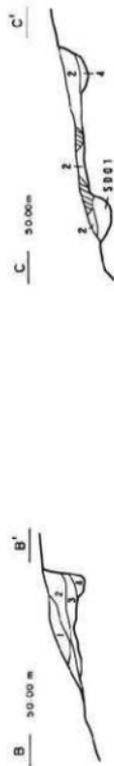
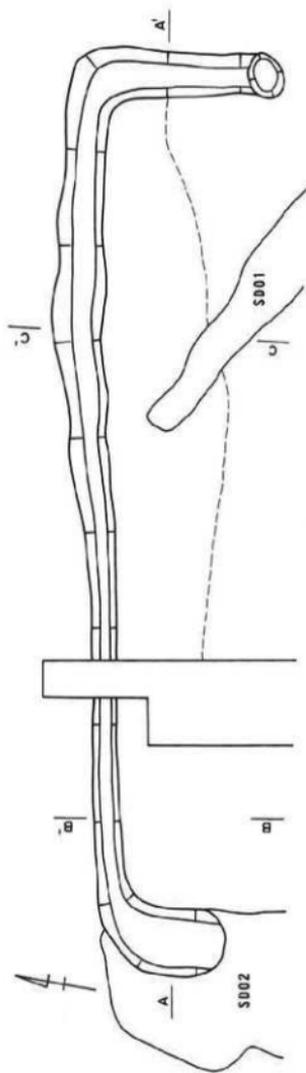
遺物は出土していない。



- 1 黒色土(2.51-2/1) 径10cm前後の礫を多量含む。粘性欠け、しまり有。
 2 黒褐色土(2.51-2/2) 径10~20mmの礫を極めて多量含む。粘性欠け、しまり強い。

北溝
SZ02参照

第39図 SZ05平面図



- 1 土質調査士(00R-4/A) 掘2～10mのシルト層片を含む、粘土、しまり強い。
- 2 砂 黄土(00R-2/3) 掘2～10mのシルト層片を多数含む、粘性弱く、しまり弱。
- 3 砂 黄土(00R-2/B) 掘2～10mのシルト層片を多数含む、粘性弱く、しまり弱。
- 4 土質調査士(00R-2/C) 掘2～10mのシルト層片を多数含む、粘性中程度、しまり強い。

第40図 SI01平面図

b. 古墳時代以降及び時期不明の遺構

SD01 (第40図 図版13-4・5)

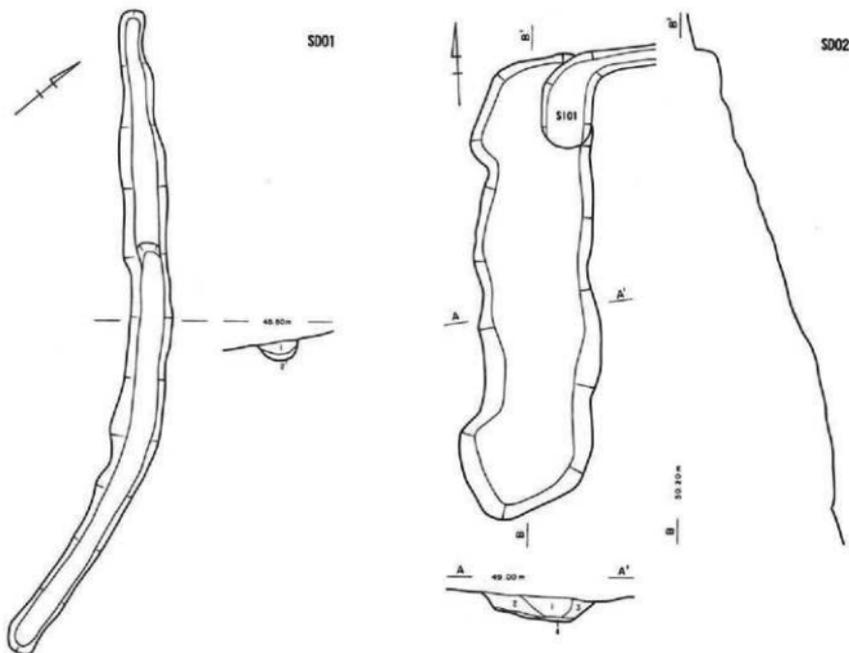
調査区北西側のA-2・3グリッドを中心に位置する。SD01を切っている。南側の大半を削平されていると考えられる。

本跡は斜面を竪穴状に掘り込み、平坦面を作出したもので、方形若しくは長方形を呈すると思われる。残存する長軸方向はN-82°-Eを指す。規模は東西11.6mを測り、南北は2.8mまで確認された。壁はほぼ直立し壁高は最大で40cmを測る。立ち上がりの直下には幅30~85cm、深さ10~18cmを測る周溝が巡る。床面は地山の岩盤層で凹凸が多く、やや南傾する。柱穴、その他の付帯施設は検出されていない。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、SD01との重複状況から古墳時代後期以降の所産と推測される。

SD01 (第41図 図版13-4・6)

調査区北西側のB-3グリッドを中心に位置する。北側で本跡上にSD01が構築されている。



SD01

- 1 黒褐色土(10YR-3/1) 径1mm前後の白色・褐色粒子を含む。粘性弱く、しまりや中弱い。
- 2 灰黄褐色土(10YR-4/2)

SD02

- 1 黒褐色土(10YR-2/3) 径5~10mmのシルト岩片多量、小礫粒、径1mm前後の褐色粒子少量を含む。粘性やや弱く、しまり有。
- 2 黒褐色土(10YR-2/3) 1層に穿するが、若干褐色。
- 3 暗褐色土(10YR-2/3) 径2~3mmのシルト岩片を含む。粘性・しまり有。
- 4 沖黄褐色土(10YR-5/4) 径2~3mmのシルト岩片と径1mm前後の褐色粒子少量を含む。粘性・しまり有。



第41図 SD01・02平面図

北西から南東に屈曲して走り、走行方向はN-14°-WからN-50°-Wに向かう。長さ11.2m、幅35~80cm、深さ30cmを測る。断面はU字形を呈し、底面は半ばに段差を持つ。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、覆土がSD02と類似していることから古墳時代後期の所産と推測される。

SD02 (第41図 図版13-4・7)

調査区北西側のA・B-2グリッドを中心に位置する。攪乱が多く見られ、北側でSI01と重複するが新旧関係は確認できなかった。

斜面方向に沿って走り、走行方向はN-4°-Eを指す。攪乱のため西辺は凹凸が多く見られるが、東辺程度には直線的であったと思われる。長さ7.5m、幅1.8~2.1m、深さ20~50cmを測る。横断面は皿状を呈し、縦断面は確認面に沿って南傾する。遺物は須恵器環と土師質の土器片各1点が出土しており、古墳時代後期に属すると考えられる。

出土遺物 (第42図 第9表 図版19-2)

1は須恵器環または有蓋高杯の坏部と思われる。須恵邑編年のMT15~TK10窯式に属すると考えられる。2は縦方向のハケメを持つ土器片で、1の須恵器とは時期は合致せず流れ込みと考えられる。



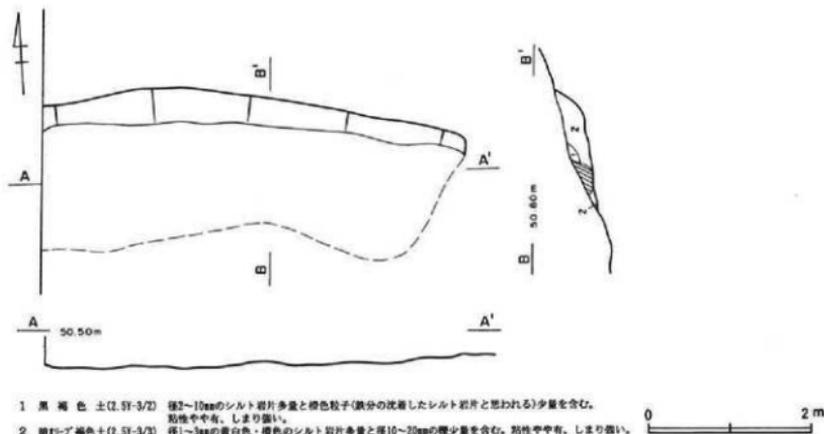
第42図 SD02出土遺物実測図

SX01 (第43図 図版13-8)

調査区北西端のA-1グリッドに位置する。西側は調査区外にかかり、南側は削平されている可能性がある。本跡は斜面を縦穴状に掘り込み平坦面を作出したものであるが、SI01に比して雑な作りで性格は不明である。残存する長軸方向はN-80°-Wを指す。北側(斜面上方)の立ち上がりか検出されたが、全体の形状は不明である。規模は東西5.2m、南北1.9mまで確認された。壁は丸みを帯びて立ち上がり、最大壁高35cmを測る。床面は平坦であるが南傾する。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

遺構外の遺物

底部を回転糸切りされる灰軸陶器碗底部1点が出土したが、小片で図示し得なかった。



第43図 SX01平面図

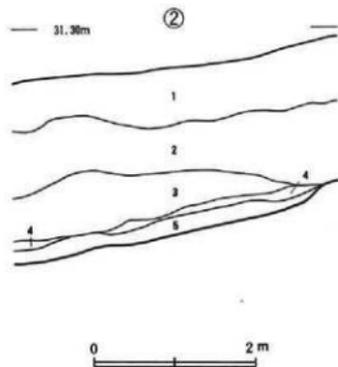
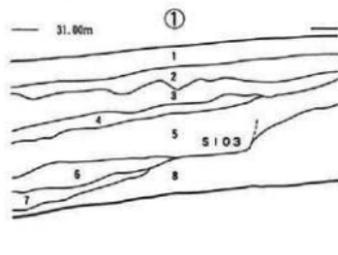
12地点

1. 地点の概要 (第2・45図 図版14-1・2)

12地点は遺跡内の南西端にあり、丘陵に南から切れ込む支谷内に立地する。支谷を北側に登りつめた丘陵上には本遺跡10地点が位置する。支谷は調査区南側から東方向への分岐を持ち、この分岐を登りつめると本遺跡11地点に至る。調査前の現況は茶畑で、前述の分岐付近には支谷を横切る方向に茶畑の耕作に伴うと考えられる段差が見られた。この段差は一部地山の岩盤層まで及んでおり、遺構確認面に影響を及ぼしている。調査区内では土層の境界を中心に所々から湧水が見られ、最も標高の低い調査区南西端では常に土層が水を含み軟質であった。調査区の標高は24~34.5mを測る。

本地点からは弥生時代後期の竪穴住居10軒、土器棺墓1基、土坑2基、焼土遺構1基、時期不明の土器溜まり2箇所が検出された。分布状況は調査区中央から北に向かう谷内にかけて竪穴住居跡が分布し、東に分岐する谷内からは土器棺墓と土坑が検出された。調査区南西側から検出された土器溜まりは自然地形の窪地に土器・礫が流れ込んだものと思われる。

調査は、重機によって茶の木を撤去した後、北側及び東側の支谷に沿う方向とこれに直交する方向に設定したトレンチで遺構と土層の堆積状況を確認した。この間4月3日~7日にかけての大雨でトレンチが崩落しS102・S109間の土層が大量に流された。その後、重機による遺構確認面までの排土と人力による精査を行い、遺構調査に移行した。遺構調査にあたっては調査区の全域に10m方眼の大グリッドを設定し南北方向を北からA・B・C・・・、東西方向を西から1・2・3・・・とし、さらに大グリッドを2m方眼の25の小グリッドに分割し、北西側から東方向にa・b・c・・・で示し遺構実測の基準とした。

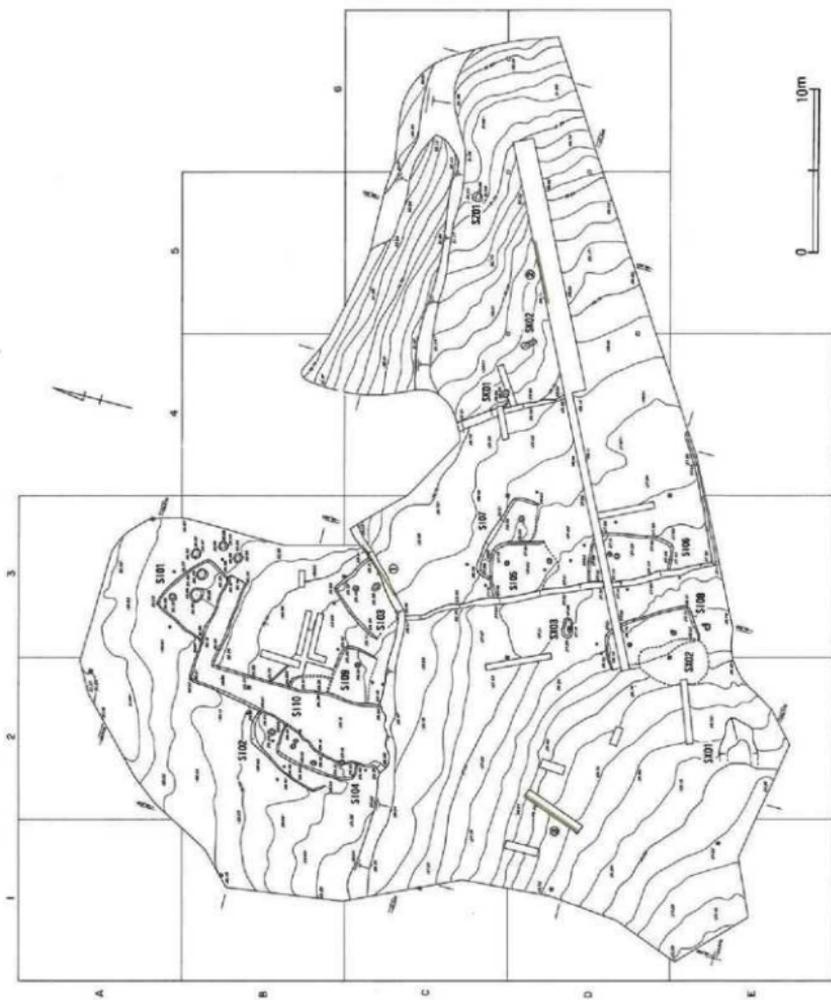


- ①
- | | |
|------------------|--------------------------------------|
| 1 表土 | 茶畑による耕作層。 |
| 2 黒褐色土(0.5R-5/2) | 径1mm前後のシルト岩粒子を含む、粘性・しまり有。乾燥時硬直に硬化する。 |
| 3 黒褐色土(10YR-3/1) | 径1~10mmのシルト岩粒子多量と小砂粒少量を含む。粘性有、しまり強い。 |
| 4 暗褐色土(10YR-5/2) | 硬質シルト岩を多量含む。粘性・しまり有。 |
| 5 黒色土(7.5YR-2/1) | 径1~5mmのシルト岩粒子と褐色粒子を含む。粘性・しまり有。 |
| 6 黒色土(10YR-2/1) | 径1~5mmのシルト岩粒子、褐色粒子、炭化物少量を含む。粘性・しまり有。 |
| 7 黒褐色土(10YR-3/1) | 径1~5mmのシルト岩粒子と褐色粒子を含む。粘性・しまり有。 |
| 8 シルト岩層(5Y-5/2) | 基岩層。上部は風化した褐色の頁岩土が割れ目に入入る。 |

- ②
- | | |
|--------------------|--------------------------------------------------------------|
| 1 黒褐色土(10YR-2/1) | 径1cm以下の塊、シルト岩粒子、焼土を含む。しまり有。含有物は1層に準ずるが、粒径が大きく量も多い。粘性中等。しまり有。 |
| 2 黒色土(7.5YR-1.7/1) | 1~10mmのシルト岩粒子を少量、径1~2cmの塊と焼土をごく少量含む。粘性・しまりやや強い。 |
| 3 黒褐色土(7.5YR-3/1) | 含有物は3層に準ずる。下部に向かい黄色がかかる。粘性・しまり強い。 |
| 5 暗褐色土 | シルト岩粒子を多量含む。崩落層と思われるにより粘土・砂を含む。 |

- ③
- | | |
|-------------------|-----------------------------------|
| 1 黒色土(10YR-2/1) | 径5mm前後のシルト岩粒子と炭化物少量を含む。粘性弱く、しまり有。 |
| 2 黒褐色土(2.5Y/1) | シルト岩ブロックを多量含む。粘性・しまり有。 |
| 3 黒色土(10YR-1.7/1) | 径1~2mmのシルト岩粒子と炭化物をごく少量含む。粘性・しまり有。 |
| 4 灰褐色砂層 | 水気の堆積層と思われる。 |

第44図 層序



第45図 遺構配置図

層序 (第44図 図版14-3)

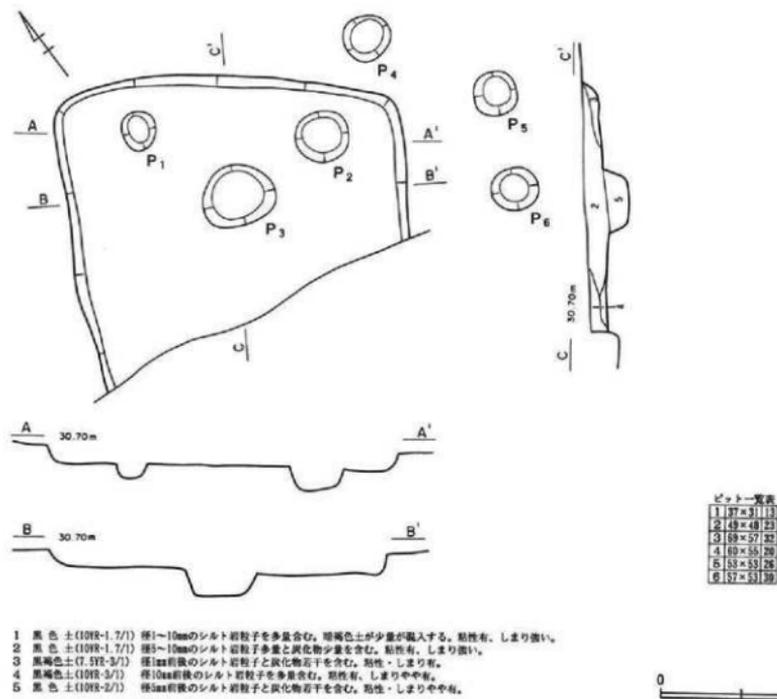
土層の確認は、調査区北東側の耕作に伴うと考えられる段差①、調査区東側のトレンチ②、調査区南西側のトレンチ③の3箇所で行った。図示した土層の最上面は、①は表土上面、②は表土撤去後の土層上面、③は弥生時代の遺構確認面である。調査区の土層の概要は、茶畑の耕作に伴う表土平安時代の遺物包含層である①-4層が部分的に見られ、これ以下は基盤の岩盤層に至るまで黒褐色土~黒色土が厚く堆積する。弥生時代の遺構確認面は概ね①-5層、②-3層上面からこの土層中であるが明確に確認することはできなかった。弥生時代の遺物は①-5層、②-3層以上の土層に含まれる。①-2・4層、②-5層は丘陵からの崩落層と思われる。また、すべての土層中に基盤層に由来するシルト岩粒子が含まれており、丘陵からは絶えず土砂の流出が見られたものと考えられる。調査区南西側の③では斜面と逆方向に傾斜した堆積状況が認められ、地滑りによる土層の移動に由来すると推測される。

2. 検出された遺構・遺物

a. 弥生時代

SI01 (第46図 図版14-4、15-1)

調査区北側のB-3グリッド北側を中心に位置する。南側はトレンチで削平してしまったため、北辺と東西辺の北側が検出された。



- 1 黒色土(19R-1.7/1) 径1~10mmのシルト岩粒子を多量含む。珪藻土が少量が混入する。粘性有、しまり強い。
- 2 黒色土(19R-1.7/1) 径3~10mmのシルト岩粒子多量と炭化物少量を含む。粘性有、しまり強い。
- 3 黒褐色土(19R-3/1) 径10mm前後のシルト岩粒子と炭化物若干を含む。粘性、しまり有。
- 4 黒褐色土(19R-3/1) 径10mm前後のシルト岩粒子を多量含む。粘性有、しまりやや有。
- 5 黒色土(19R-2/1) 径10mm前後のシルト岩粒子と炭化物若干を含む。粘性、しまりやや有。

第46図 SI01平面図

形状は方形もしくは長方形を呈すると考えられる。残存する長軸方向はN-52°-Wを指す。規模は東西4.2mを測り、南北は3.8mまで確認された。壁は丸みを帯びて立ち上がり、壁高は24cmを測る。床面は地山床で凹凸が多い。床面からは3本のピットが検出されており、P1・P2は位置からみて支柱穴と考えられる。東側の壁外には3本のピットが検出されている。本跡との関係は不明だが、あわせて図示した。

炉跡、周溝は検出されていない。

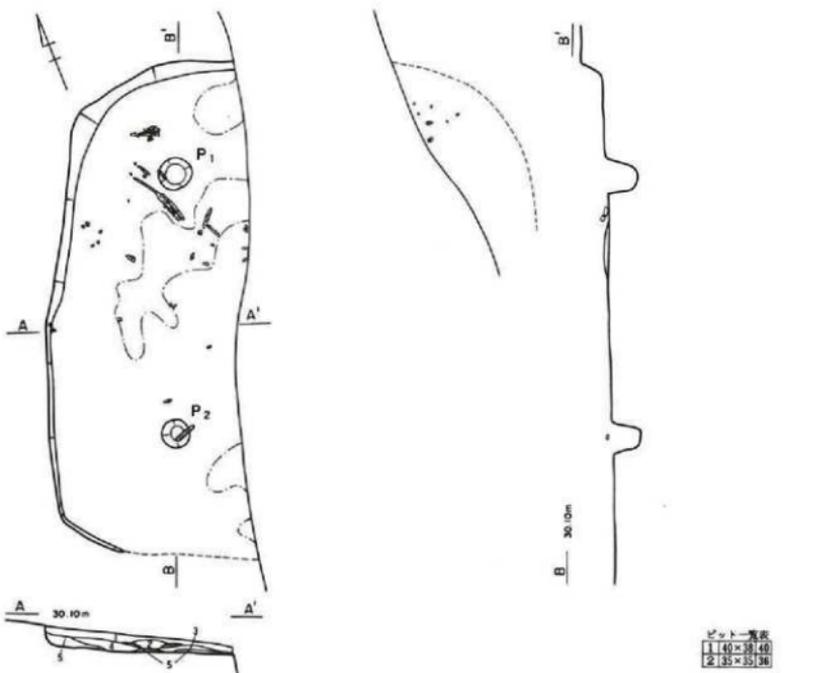
遺物は覆土中から土器片少量が出土したが、いずれも小片で図示し得なかった。

SI02 (第47図 図版14-4、15-2~4)

調査区北側のB-2グリッドに位置する。中央部はトレンチで削平してしまった。SI04を切っただけ直上に構築されている。

本跡は焼失家屋で床面からは焼土・炭化材が検出された。トレンチの東側では壁の立ち上がりは確認できなかったが、炭化物の分布する範囲から床面の範囲を推定し図示した。

形状は隅丸方形を呈すると考えられ、残存する長軸方向はN-22°-Eを指す。規模は南北は6.1mまで確認され、東西は5.9m程と推定される。壁は丸みを帯びて立ち上がり、壁高は26cmを測る。床面は地山床で平坦だが軟弱で、やや南傾する。床面からは2本のピットが検出されており、4支柱構成の支柱穴と考えられる。



- 1 黒色土(7.518-1.7/1) 概1-2mmの白色・褐色粒子和炭化物少量を含む。粘性やや弱、しまり有。
- 2 暗赤褐色土(319-1/4) 粘土を多量含む。粘性やや弱、しまり有。
- 3 黒色土(1019-1.7/1) 炭化物を多量含む。特に細2mm未満の粒子状のものが多く見られる。粘性やや弱、しまり有。
- 4 黒色土(1019-2/1) 焼土・炭化物粒子を少量含む。粘性・しまり有。
- 5 黒色土(1019-1.7/1) 炭化物粒子若干を含む。他の土層に比して軟質。

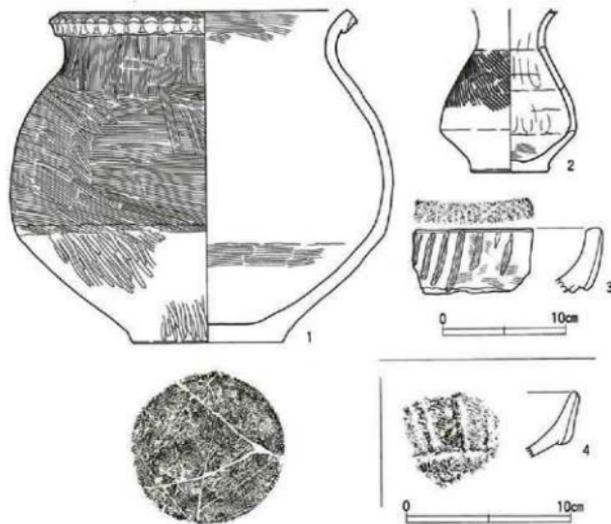
第47図 SI02平面図

炉跡、周溝は検出されていない。

焼土は床面上の柱穴を結ぶ線を中心に分布するが、覆土中からも検出されている。炭化材は住居跡の中心に向かって放射状に分布する。調査終了後炭化材のうち遺存状況の良い3点について樹種同定を行った(付編参照)。

出土遺物(第48図 第4表 図版20・21)

遺物は床面上から比較的多くの資料が出土した。そのうち4点を図示した。1は広口壺(または鉢)で1箇所につぶれた状態で出土し、ほぼ完形に復元された。2は小型の壺で口縁部を欠く。3・4は棒状浮文をもつ壺口縁部である。



第48図 SI02出土遺物実測図

SI03 (第50図 図版14-4、15-5)

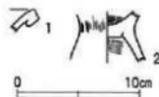
調査区北側のC-3グリッド北側を中心に位置する。南側を耕作に伴うと考えられる段差によって失い、北東・北西辺が検出された。

形状は方形を呈すると考えられる。主軸方向はN-37°Eを指す。規模は北東-南西は4.2m、北西-南東は2.9mまで確認された。壁は直線的に立ち上がり、壁高は31cmを測る。床面は地山床で、平坦であるが顕著な硬化は見られない。床面からは1本のピットが検出されており、4支柱構成の主柱穴と考えられる。

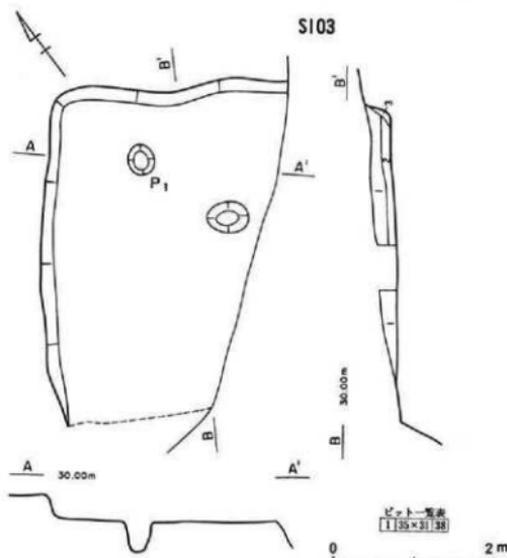
炉跡は北東壁寄りと考えられる位置から検出された。主柱穴を結ぶ線の内側に位置するものと思われる。楕円形を呈する地床炉で、規模は48×36cm、深さ9cmを測る。焼土は覆土上層から検出されており底面はほとんど火熱を受けていない。

出土遺物(第49図 第4表)

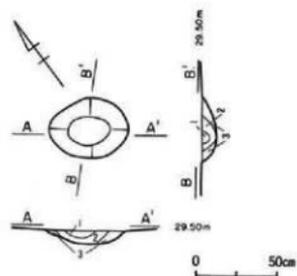
遺物は主に覆土内から出土した。上層には灰陶陶器片が含まれており、土層断面では確認できなかったが攪乱されているものと考えられる。出土遺物のうち2点を図示した。1は壺口縁部、2は台付甕である。



第49図 SI03出土遺物実測図

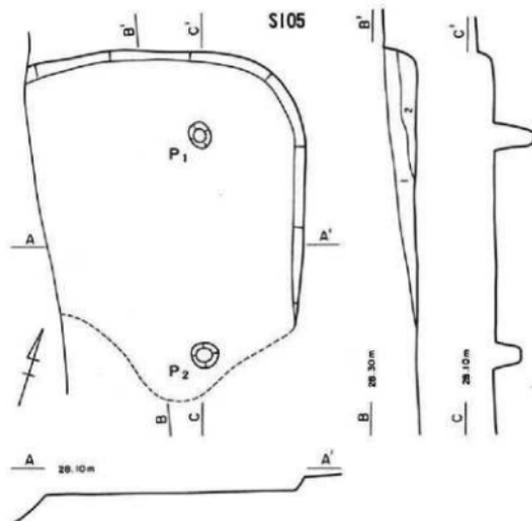


- 1 黒褐色土(7.5R-3/1) 径1~3cmのシルト岩粒子、黄土、炭化物少量を含む。粘性やや弱、しまり強い。
- 2 黒色土(10YR-2/1) 径1~3cmのシルト岩粒子、黄土、炭化物少量を含む。1層より軟質。
- 3 黒褐色土(10YR-3/1) シルト岩ブロックを多量含む。粘性・しまり有。



伊勢

- 1 黒褐色土(7.5R-3/1) 黄土粒子を多量含む。粘性・しまり有。
- 2 黒褐色土(7.5R-2/2) 黄土粒子を少量含む。径2cm以下のシルト岩ブロックを少量含む。粘性・しまり有。
- 3 黒色土(7.5R-2/1) 径2cm以下のシルト岩ブロックを少量含む。粘性・しまり有。



- 1 黒色土(10YR-1.7/1) 径1~3cmのシルト岩粒子と炭化物を少量含む。粘性やや弱、しまり有。
- 2 黒色土(10YR-1.7/1) 1層に準ずる。部分的に黄土石干を含む。

第50図 S103・05平面図

SI04 (第51図 図版14-4、15-6・7)

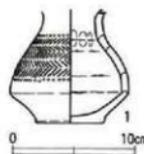
調査区北側のB-2グリッド南側を中心に位置する。中央部はトレンチで削平してしまったため、西辺と南北辺の西側が検出された。上部をSI02に切られる。

形状は方形を呈すると考えられる。残存する長軸方向はN-3°-Eを指す。規模は南北5.1mを測り、東西は2.1mまで確認された。壁は直線的に立ち上がり、壁高は36cmを測る。床は地山床で平坦であるが軟弱である。床面からは3本のビットが検出されており、P1・P3は4主柱構成の主柱穴と考えられる。

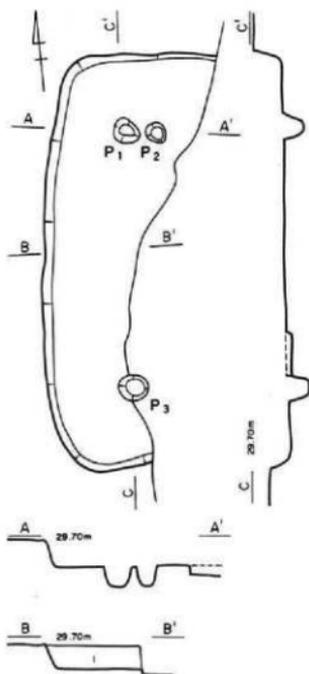
炉跡、周溝は検出されていない。

出土遺物 (第52図 第4表 図版20)

遺物は床西壁際を中心に若干が出土している。そのうち1点を図示した。1は小型甕で、口縁部を欠くほかはほぼ完形で出土した。土器内には炭化した種子が充填されており、種子種同定を行い麻の種子との結果を得た(附編参照)。



第52図 SI04出土遺物実測図



1 黒色土(7.5E-1.7/) 径2~5mmのシルト岩粒子・炭化物を少量、黄土若干を含む。粘性・しまり中等。

ビット一覧表	
1	33×27/24
2	29×25/24
3	38×30/28



第51図 SI04平面図

SI05 (第50図 図版14-5、15-8)

調査区中央のD-3グリッド北側を中心に位置する。西・南側を耕作に伴うと考えられる段差と削平によって失い、北・東辺が検出された。SI07を切っている。

形状は隅丸方形を呈すると考えられる。残存する柱穴を結ぶ方向はN-17°-Wを指す。規模は南北4.3m、東西は3.4mまで確認された。壁は丸みを持って立ち上がり、壁高は42cmを測る。床は地山床で平坦であるが顕著な硬化は見られない。床面からは2本のビットが検出されており、4主柱構成の主柱穴と考えられる。

炉跡、周溝は検出されていない。

出土遺物 (第53図 第4表)

遺物は少数であるが主に床面から出土した。そのうち壺口縁部1点を図示した。

SI06 (第54図 図版14-5、16-1・2)

調査区南側のD-3グリッド南側を中心に位置する。西側を耕作に伴うと考えられる段差によって失い、東北辺と南・北辺の東側が検出された。

形状は隅丸方形を呈すると考えられる。残存する長軸方向はN-4°-Wを指す。規模は南北5.2mを測り、東



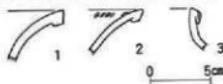
第53図 SI05出土遺物実測図

西は3.1mまで確認された。壁は丸みを持って立ち上がり、壁高は19cmを測る。床は地山床で平坦であるが顕著な硬化は見られない。床面からは2本のビットが検出された。P1は位置から見て4主柱構成の主柱穴の可能性があるが掘り込みは浅く、これに対応するものは検出されていない。

炉跡、周溝は検出されていない。

出土遺物 (第55図 第4表 図版21)

遺物は南東コーナー部を中心に出土した。そのうち3点を図示した。1・2は壺口縁部、3は広口壺口縁部である。

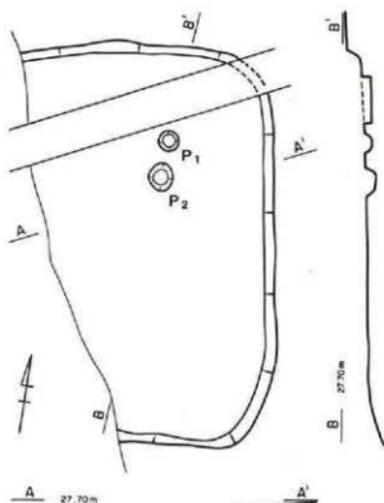


第55図 SI06出土遺物実測図

SI07 (第56図 図版14-5、15-8)

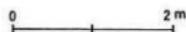
調査区中央のD-3グリッド北側を中心に位置する。南側を耕作に伴うと考えられる削平によって失い、北辺と東・西辺の北側が検出された。西側をSI05に切られる。

形状は方形を呈すると考えられる。長辺方向はN-76°-Wを指す。規模は東西5.5mを測り、南北は2.4mまで確認された。壁は直線的に立ち上がり、壁高は30cmを測る。床は地山床で平坦であるが顕著な硬化は見られない。

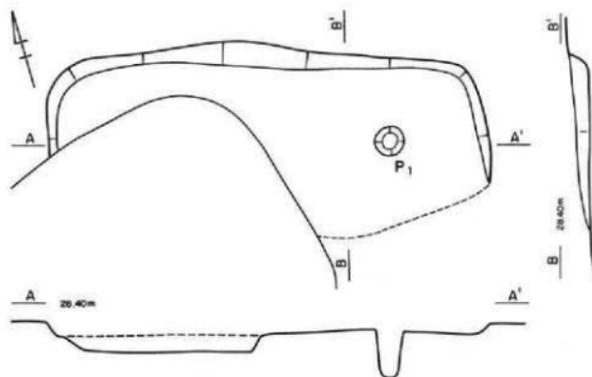


- 1 黒色土(7.5% \pm 1.7%) 径1~20mmのシルト岩砂子少量と炭化物若干を含む。粘性・しまり有。
2 黒色土(7.5% \pm 2.1%) 径2~4mmのシルト岩砂子と炭化物若干を含む。粘性やや有、しまり有。

ビット一覧表	
1	114×25 6
2	38×22 12



第54図 SI06平面図



- 1 黒色土(10% \pm 2.7%) 径1mm前後のシルト岩砂子と10mm前後の礫若干を含む。粘性やや有、しまり有。

ビット一覧表	
1	38×27 38



第56図 SI07平面図

床面からは1本のピットが検出されており、位置から見て4主柱構成の主柱穴と考えられるが重複するSI05の床面の、これに対応する位置から柱穴は検出されていない。

炉跡、周溝は検出されていない。

出土遺物(第57図 第4表)

遺物は少数であるが床面を中心に出土した。そのうち2点を図示した。1は壺底部、2は甕口縁部である。

SI08(第58図 図版14-5、16-3・4)

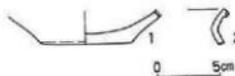
調査区南側のD-3グリッド南西側を中心に位置する。西側をSX02と耕作に伴うと考えられる削平によって失い、東辺と北・南辺の東側が検出された。

形状は方形を呈すると考えられる。残存する柱穴を結ぶ方向はN-30°-Wを指す。規模は南北5.8mを測り、東西は2.8mまで確認された。壁は丸みを帯びて立ち上がり、壁高は31cmを測る。床は地山床で平坦であるが顕著な硬化は見られない。床面からは2本のピットが検出されており、4主柱構成の主柱穴と考えられる。

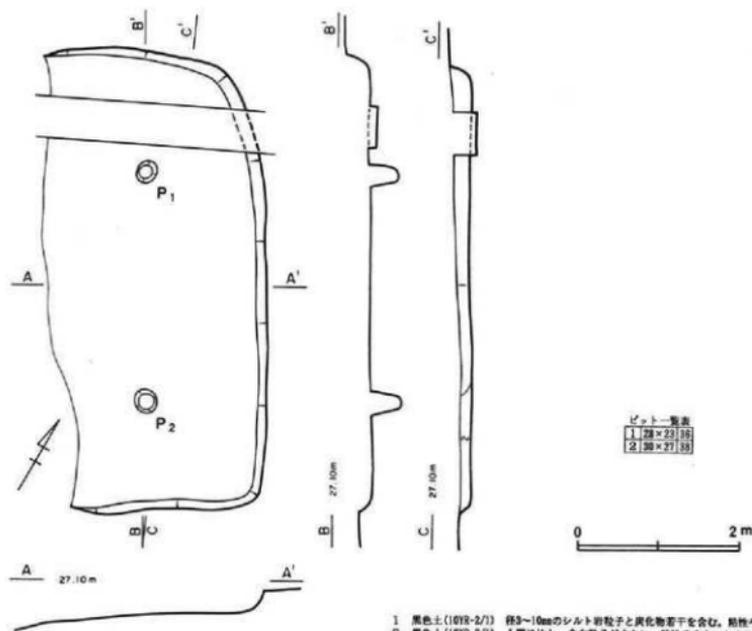
炉跡、周溝は検出されていない。

出土遺物(第59図 第4表 図版21)

遺物は南半部の覆土下層を中心に出土した。そのうち11点を図示した。1~3、6~10は壺、11は甕、4は台付甕、5は高坏である。このうち8の壺は重複するSX02出土の破片と接合した。

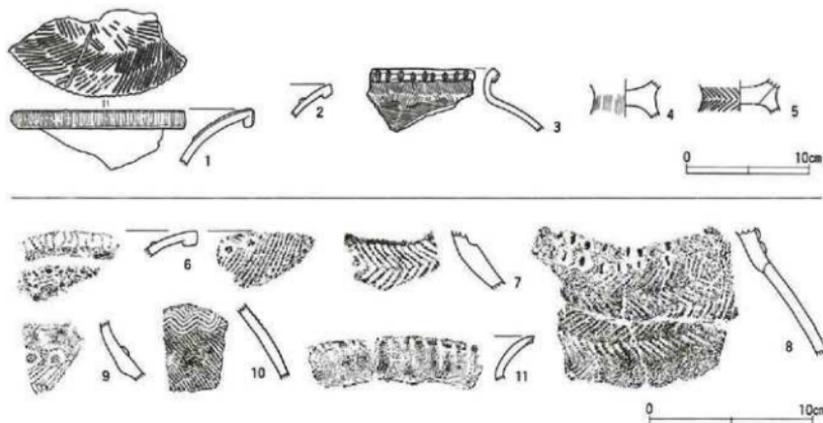


第57図 SI07出土遺物実測図



- 1 黒色土(1013-2/1) 径3~10mmのシルト岩粒子と炭化物若干を含む。粘性やや有。しまり有。
2 黒色土(1013-2/1) 1層に比し、含有粒子が少ない。粘性やや有。しまり強い。

第58図 SI08平面図



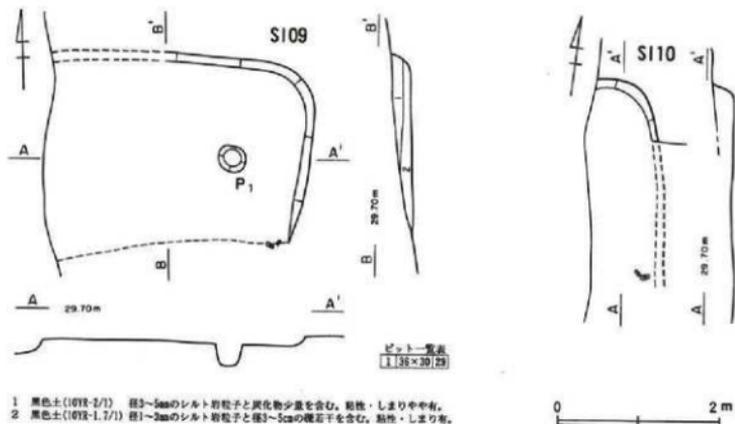
第59図 SI08出土遺物実測図

SI09 (第60図 図版16・5・6)

調査区南側のC-2グリッド北東側を中心に位置する。南側を耕作に伴うと考えられる段差、西側をトレンチで削平されたため、北・東辺の一部のみが検出された。床面の範囲は極めて不明瞭であったが炭化物の分布する範囲をおおよそ床面とした。北側でSI10と重複すると考えられるが新旧関係は不明である。

形状は隅丸方形を呈すると考えられる。残存する長軸方向はN-85°-Wを指す。規模は南北2.6m、東西3.2mまで確認された。壁は丸みを帯びて立ち上がり、壁高は24cmを測る。床は地山床で平坦であるが軟弱である。床面からは1本のピットが検出されており、4主柱構成の主柱穴と考えられる。

炉跡、周溝は検出されていない。



- 1 黒色土(019R-2/1) 径3~5cmのシレット粒子和炭化物少量を含む。粘性・しまり中や。
- 2 黒色土(019R-1.7/1) 径1~2cmのシレット粒子和径3~5cmの礫石を含む。粘性・しまり弱。

第60図 SI09・10平面図

出土遺物 (第61図 第4表)

遺物は東壁際を中心に出土した。そのうち2点を図示した。
1は甕口縁部、2は高坏である。



第61図 SI09出土遺物実測図

SI10 (第60図)

調査区北側のB-2グリッド南東側に位置する。西側をトレンチで削平してしまったため、北東コーナー部分のみ検出された。炭化物の検出された範囲をおおよその床面とした。南側はSI09と重複すると考えられるが新旧関係は不明である。

形状は方形を呈すると考えられる。規模は南北2.3m、東西は0.9mまで確認された。壁は丸みを帯びて立ち上がり、壁高は32cmを測る。床は地山床で平坦であるが顕著な硬化は見られない。

ビット、炉跡、周溝は検出されていない。

遺物は少量の土器片が出土したが、小片で図示し得なかった。

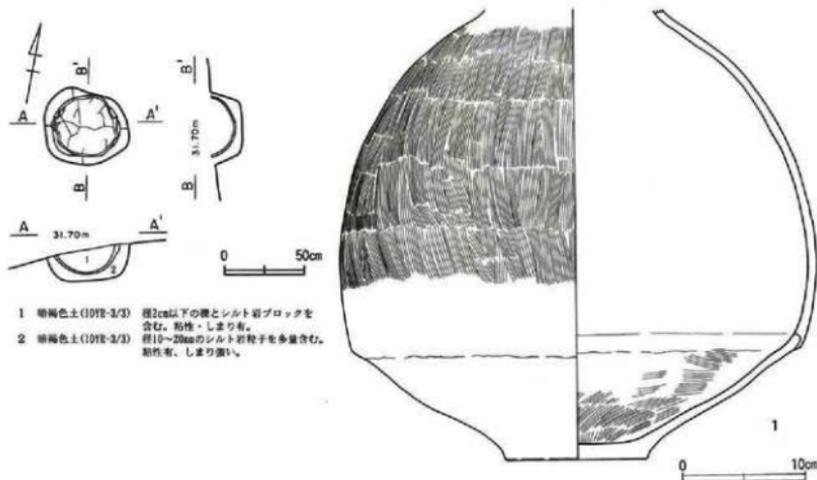
SZ01 (土器棺墓) (第62図 図版16-7・8)

調査区東側のC-5グリッド南東側に位置する。耕作に伴い上部を削平されていると考えられる。

本跡は土坑内から壺が検出されたものである。土坑は平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈し、規模は54×46cm、深さ23cmを測る。土器は横向きの胴部が土坑一杯に検出されており、埋納時に頸部以上を欠かれたものと考えられる。削平により1/2以上を失っていることから、当初の土坑の深さは現在の2倍以上であったと推測される。

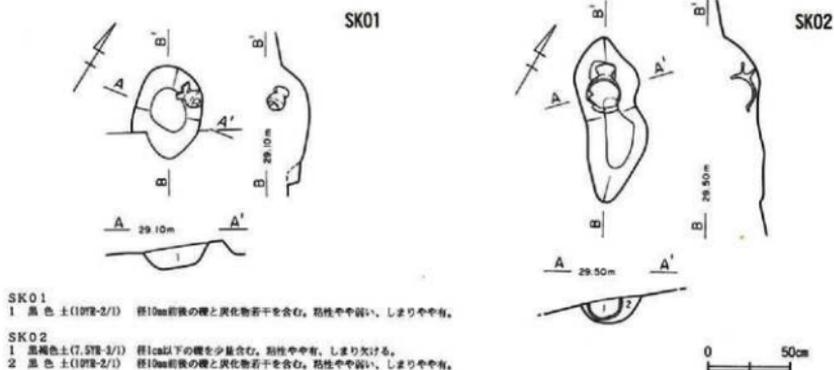
出土遺物 (第62図 第4表 図版20)

1は壺で前述のように削平により縦方向に1/2強を失っている。



- 1 赤褐色土(10YR-2/3) 径2cm以下の炭とシルト質ブロックを含む。粘性・しまり有。
- 2 赤褐色土(10YR-2/3) 径10-20mmのシルト質砂子を多量含む。粘性有、しまり強い。

第62図 SZ01平面図・出土遺物実測図



第63図 SK01・02平面図

SK01 (第63図 図版17-1・2)

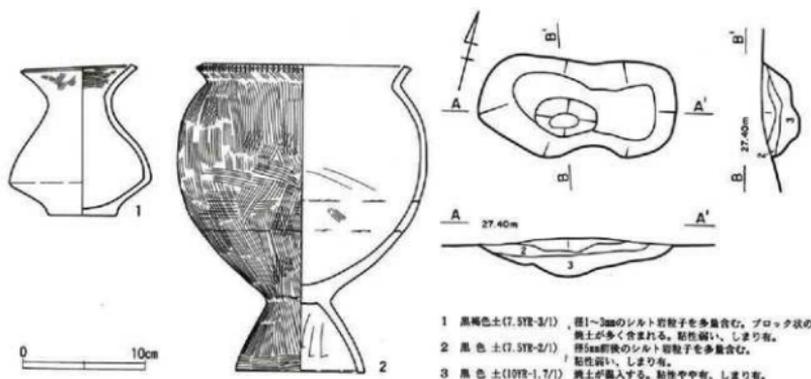
調査区東側のC-4グリッド南側に位置する。トレンチで南側の一部を削平してしまった。耕作に伴い上部を削平されていると考えられる。

形状は楕円形を呈し、規模は57×42cm、深さ15cmを測る。土坑上からは小型の壺1点がほぼ完形で出土した。

SK02 (第63図 図版17-3・4)

調査区東側のD-4グリッド北東側に位置する。耕作に伴い上部を削平されていると考えられる。

形状は不整な楕円形を呈し、規模は1m×36cm、深さ25cmを測る。断面形は横断面がU字形、縦断面が皿状を呈する。土坑底部からは台付壺1点が出土した。削平により上部を欠くが完形であったと思われる。



第64図 SK01・02出土遺物実測図



第65図 SX03平面図

出土遺物 (第64図 第4表 図版20)

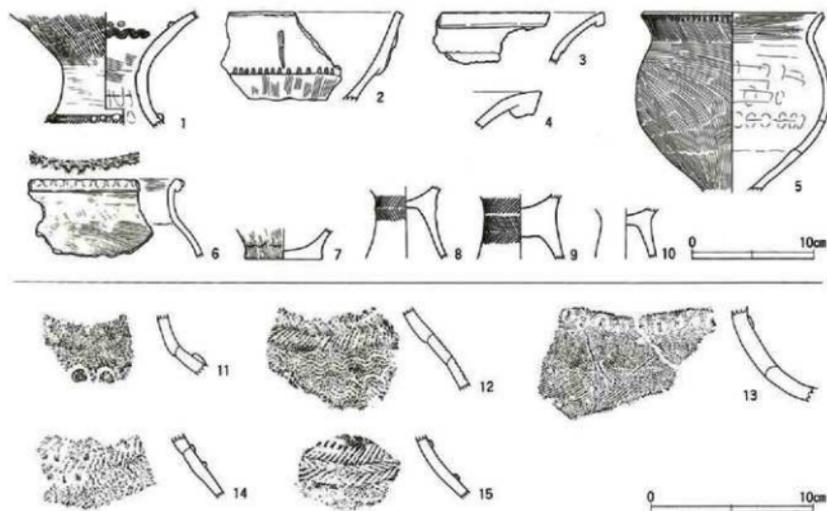
SX01・02出土遺物を図示した。1はSX01出土の小型の甕、2はSX02出土の台付甕である。SX03 (焼土跡) (第65図 図版17-7)
調査区中央のD-3グリッド北西側から検出された。住居跡が集中する区画であることから、住居の炉跡のみが遺存している可能性が考えられる。

本跡は土坑内から焼土が検出されたもので、土坑は不整な楕円形を呈し、規模は121×62cm、深さ23cmを測る。焼土は覆土の上層からまとまって検出されている。

遺物は出土していないが、検出状況から該期に含めた。

遺構外出土遺物 (第66図 第4表 図版20・21)

弥生時代の遺構以外の地点から出土した遺物を取り上げた。15点を図示した。1～4・6・7・11～15は甕、5は甕、8～10は高坏である。



第66図 遺構外出土遺物実測図 (弥生時代)

b. 時期不明の遺構

SX01 (土器溜まり) (第67図 図版17-5)

調査区南西側のE-2グリッドに位置する。

本跡は窪地内から多量の土器・礫が出土したものである。土器の大半は弥生土器であるが南側縁辺部の上層から灰釉陶器2点が出土している。出土遺物には比較的形状を保ったものが含まれる点と、灰釉陶器の出土位置が遺物集中部の縁辺である点からは、これらが弥生時代に人為的に廃棄された可能性は否定できない。しかし、本跡と類似する次項のSX02が、平安時代以降の自然災害によると考えられる点から、本跡も平安時代以降の自然災害による可能性が高いと考えられる。以上の点から、ここでは時期不明の遺構として報告する。

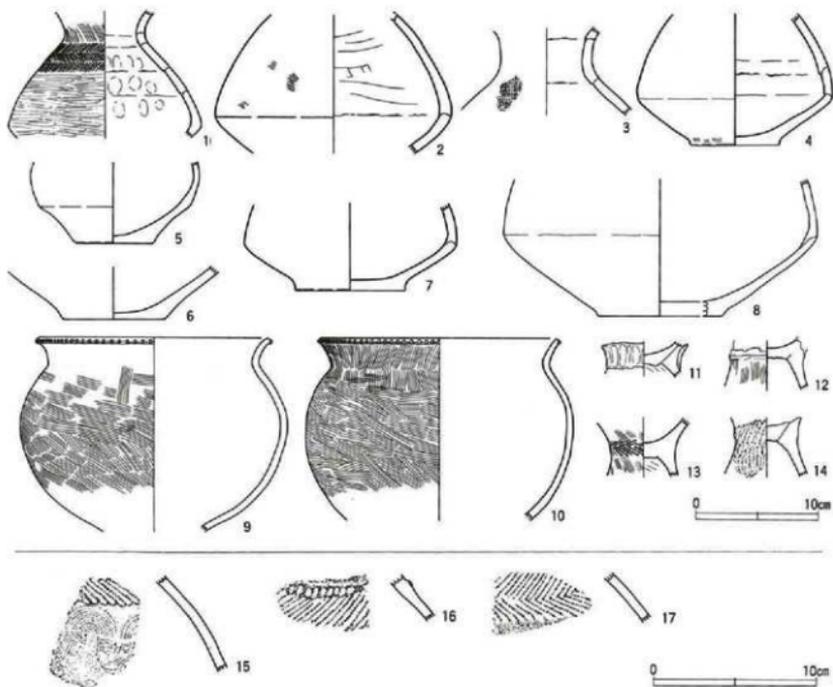
遺物は3×3mの範囲を中心に分布し、遺物の下は幅2.7m、長さ2.3mの浅い窪みとなっている。出土状況は、窪みの上層から大部分が出土し、底面近くにも若干の分布が見られた。土器片175点、礫306点が出土した。

出土遺物（第68図 第4表 図版20・21）

出土土器のうち17点を図示した1～8・15～17は壺、9～12は甕、13～14は高坏である。また、灰釉陶器のうち1点は、第71図に図示した（第71図-20）。



第67図 SX01平面図



第68図 SX01出土遺物実測図

SX02 (土器溜まり) (第69図 図版17-6)

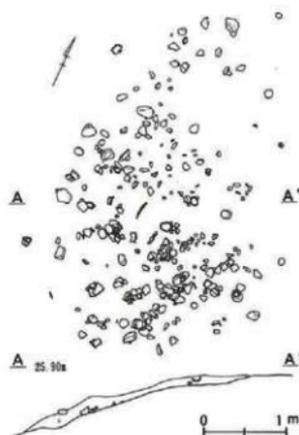
調査区南側のE-2グリッド北東に位置する。S I 0 8の西側を壊している。

本跡は斜面に沿って多量の土器・礫が出土したものである。土器の大半は弥生土器であるが、灰釉陶器1点が出土している。また、弥生土器中にはS I 0 8覆土出土の土器と接合する破片が出土している。これらのことから本跡は平安時代以降の自然災害(S I 0 8西側を流す土砂崩れ)によって形成された可能性が高いと考えられる。ここではSX01同様時期不明の遺構として報告する。

遺物は3×4mの範囲を中心に分布し、土器片140点、礫128点が出土している。

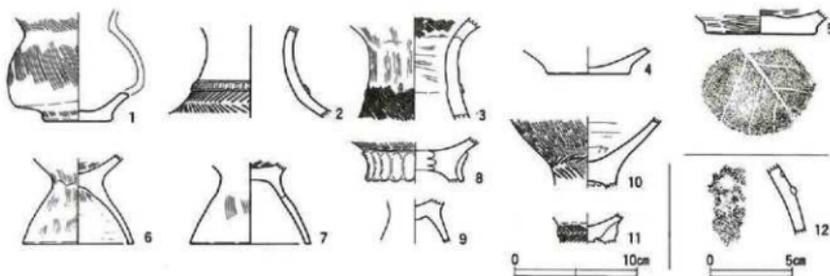
出土遺物(第70図 第4表 図版20・21)

出土土器のうち12点を図示した。1～5・12は壺、6～8は甕、9～11は高坏である。



1 黒色土(7.5YR-1.7/1) 径3-5mmのシルト岩砂子と炭化物少量を含む。粘性や平や、しまり有。遺物の出土はこの土層中。

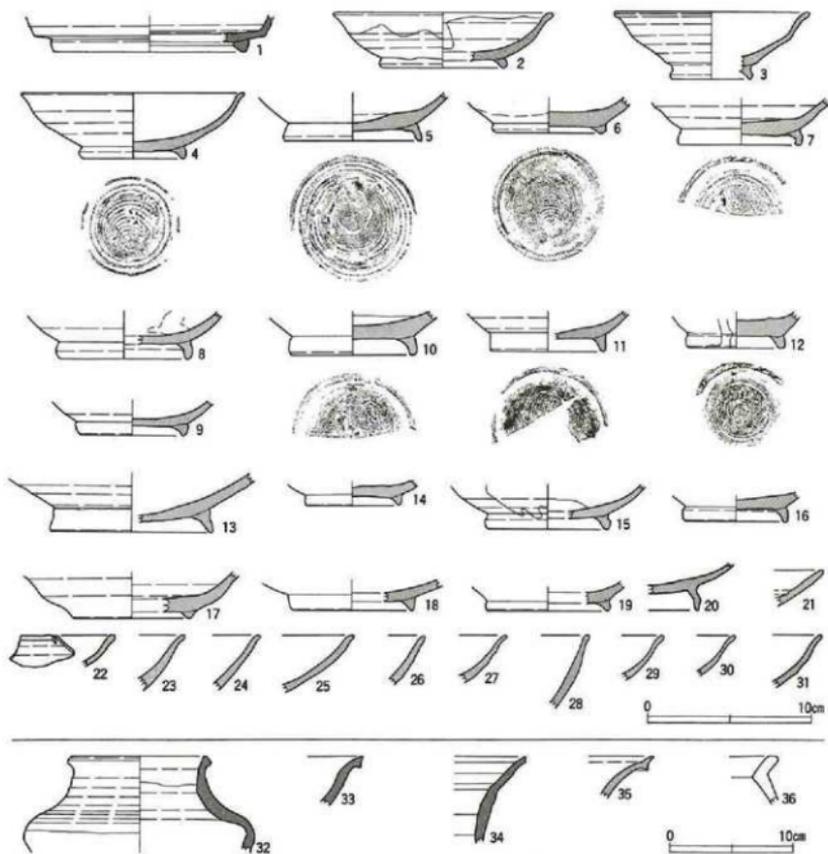
第69図 SX02平面図



第70図 SX02出土遺物実測図

c. 奈良・平安時代の遺物(第71図 第10表 図版22)

本地点からは奈良・平安時代に属する遺構は検出されていないが、同時期の須恵器、灰釉陶器が一定量出土している。特に、層序に抜粋したセクション①-4層中からは比較的まとまった灰釉陶器の出土がみられた。このうち36点を図示した。1・33・34は須恵器で、1は坏、33は鉢(?)、34は甕である。34は口唇部内面と頸部外面に鉄釉が粗く刷毛塗りされる。鉄釉の施された須恵器はこのほかにも甕胴部片が出土している(図版22 3段目右端)。2～31、32・35は灰釉陶器で2・4～20・23～31は碗(18は皿の可能性あり)、3は小碗、21は段皿、22は輪花碗、32は短頸壺、35は長頸瓶、36は土師器甕である。



第71図 遺構外出土遺物実測図(奈良・平安時代)

第1表 6・8地点出土土器観察表(弥生時代)

単位: cm, ~ 残存値, () 推定

遺物番号	器種	器面	胎土調色	調整・文様		備考
				外	内	
16図	高坏 口縁部1/4 脚部定形 SZ01南溝	口 25.7 高 18.9 底 5.0 脚 11.7	スコリア 砂粒多量 褐色(7.5YR-7/6)	折り返し口縁 口唇 ハケキザミ 坏部 斜ハケ 接合部 ヘラ掻き羽状文 脚部 ハケ少し残る	口辺 ヨコハケ少残 脚部 煙いハケ ヨコナデ	内面・脚部 外面荒れて 観察困難 図上復元
2	壺 胴部片 SZ01北溝	高 5.9~	スコリア 砂粒少量	褐色(7.5YR-7/6)	クシ掻き横線文	
18図	壺 底部1/3 SZ02	高 11.7~ 底 12.8)	砂粒少量 にぶい褐色(7.5YR-6/4)	ヨコミガキ ハケ残る	ヘラ掻き ヨコヘラナデ	
19図	壺 1 胴部完形 SK01	高 8.7~	スコリア 長石 砂粒多量 褐色(7.5YR-7/6)	クシ刺突羽状文? 円形浮文?		荒れて観察 困難
2	壺 口縁部片 SK02	高 3.8~	砂粒少量 にぶい褐色(7.5YR-6/4)	折り返し口縁 口唇 ハケ工具による加飾	ヨコハケ	

第2表 9地点出土土器観察表(弥生時代)

単位: cm, ~ 残存値, () 推定

遺物番号	器種	器面	胎土調色	調整・文様		備考
				外	内	
25図	壺 1 底部完形 SK03	高 17.2~ 底 10.7	砂粒少量 黄褐色(7.5YR-7/8)	細かい斜→ヨコ→斜ハケ 粗い斜ハケ 細かいタテハケ	細かいヨコハケ	

第3表 11地点出土土器観察表(弥生時代)

単位: cm, ~ 残存値, () 推定

遺物番号	器種	器面	胎土調色	調整・文様		備考
				外	内	
36図	1 壺 1 頸部1/4 底部完形 SZ02南溝	高 12.8~ 胴 14.9 底 5.5	スコリア 長石 砂粒 にぶい黄褐色(10YR-7/4)	クシもしくはヘラ掻き沈線		内外面荒れて 調整観察 不能
2	壺 胴部完形 SZ02南溝	高 10.3~ 胴 13.5 底 5.7	長石少量 砂粒少量 明黄褐色(10YR-7/6)	ハケ少し残る	ヨコナデ	外面風化顕著 底部焼成後 穿孔
3	台付罎 胴部~脚部 1/3 SZ02南溝	高 16.1~ 胴 16.2 底 6.6 脚 8.9)	長石少量 砂粒 にぶい黄褐色(10YR-6/4)	斜・タテハケ		内面荒れて 観察不能
4	高坏 ほぼ完形 SZ02南溝	口 18.5 高 15.9 底 5.5 脚 9.5	長石多量 スコリア・チャート 少量 砂粒 褐色(5YR-7/8)	坏部 ヨコミガキ ハケ残る 脚部 タテミガキ	脚部 ヨコナデ	2箇所に焼 成後穿孔
37図	1 壺 1 ほぼ完形 SZ03北溝	口 6.5 高 22.3 底 5.3 胴 15.5	スコリア 長石 チャート 砂 粒 褐色(5YR-6/6)	ハケ残る	頸部 しぼり	外面・口辺 内面に赤彩 底部に焼成 後穿孔
2	壺 底部完形 SZ03北溝	高 2.6~ 底 7.2	長石 チャート 雲母微量 砂 粒 黄褐色(7.5YR-7/8)	ハケ少し残る		内面荒れて 観察不能
38図	1 壺 1 ほぼ完形 SZ04東溝	口 7.0 高 18.8 胴 12.6 底 6.0	スコリア 長石 砂粒 褐色(5YR-7/8)	頸部 波状文 肩~胴部上半 擬流水文 波状文	頸部 ヘラナデ 胴部 滑オサエ ヨコヘラナデ	

第4表 12地点出土土器観察表(弥生時代)

単位: cm, ~ 残存値, () 推定

遺物番号	器種	器面	胎土調色	調整・文様		備考
				外	内	
48図	1 壺 1 またほぼ ほぼ完形 SI02 底	口 23.4 底 12.2 高 27.1 胴 31.3	褐色粘土 砂粒多量 褐色(5YR-6/8)	折り返し口縁 口唇 ハケ 指張押線 頸部~胴部 タテ・ヨコ・斜ハケ 胴部下半 ミガキ	口辺 ヨコハケ 胴部下半 ヨコハケ	底部木炭灰

遺物番号	器種	器測	胎土調	調整・文様		備考
				外	内	
2	壺 頸部以下 ほぼ完形 SI02	高 13.3~ 胴 11.1 底 6.4	長石多量 砂粒 黄褐色(7.5YR-7/8)	胴部上位 縄文LR	胴部 タテナデ 底部 粗いハケ	内外面風化 顕著
3	壺 口縁部片 SI02	高 4.9~	褐色粒子 砂粒 にふい褐色(7.5YR-5/3)	複合口縁 棒状浮文 ハケ少し残る		内面荒れて 観察不能
4	壺 口縁部片 SI02	高 3.8~	砂粒少量 褐色(5YR-6/8)	有段口縁 口辺 ヨコハケ 棒状浮文 頸部 タテハケ		
49回 1	壺 口縁部片 SI03	高 1.8~	砂粒少量 にふい褐色(7.5YR-6/4)	折り返し口縁		
2	台付壺 接合部完形 SI03	高さ 4.4	スコリア 砂粒 褐色(2.5YR-7/8)	接合部 タテハケ少し残る	底部・脚部 粗いハケ	
52回 1	壺 頸部以下 ほぼ完形 SI04	高 9.4~ 胴 9.7 底 5.6	褐色粒子多量 スコリア褐色(5 YR-6/8)	胴部上位 クシ刺突による羽織 文の上下に竹管による 刺突列	頸部 指オサエ	内外面風化 顕著 内部から炭 化種子(萩) 出土
53回 1	壺 口縁部片 SI05 床	高 4.6~	スコリア 砂粒 褐色(5YR-6/8)	折り返し口縁 口唇 キザミ(工具不明)	頸部 縄文LR少し残る	内外面荒れ て観察困難
56回 1	壺 口縁部片 SI05	高 3.8~	長石 砂粒多量 黄褐色(7.5YR-7/8)	折り返し口縁	口辺 浮文少し残る	内外面荒れ て観察困難
2	壺 口縁部片 SI05	高 4.3~	長石多量 褐色粒子 砂粒 褐色(5YR-6/8)	折り返し口縁 口唇 工具不明の加飾わずかに 残る		内外面荒れ て観察困難
3	広口壺 口縁部片 SI05	高 3.4~	砂粒 褐色(7.5YR-7/6)	折り返し口縁 口唇 工具不明のキザミ		内外面荒れ て観察困難
57回 1	壺 底部1/4 SI07 床	高 2.7~ 底 (7.6)	褐色粒子 スコリア長石 砂粒 褐色(7.5YR-6/8)			内外面荒れ て観察不能
2	壺 口縁部片 SI07	高 3.0~	スコリア 長石 砂粒 褐色(7.5YR-6/6)	口唇 キザミ タテハケ残る	ヨコハケ残る	
59回 1	壺 口縁部片 SI08	高 4.8~	スコリア 長石 砂粒 褐色(7.5YR-6/6)	折り返し口縁 口唇 キザミ	口辺 縄文LR	外面荒れて 観察困難
2	壺 口縁部片 SI08	高 2.7~	スコリア 長石 黄褐色(7.5YR-7/8)	折り返し口縁	口辺 円形浮文	内外面荒れ て観察困難
3	広口壺 口縁部片 SI08	高 5.2~	スコリア 長石少量 褐色(7.5YR-7/6)	折り返し口縁 口唇 ハケキザミ 頸部 タテハケ 肩部 ヨコハケ	ヨコハケ	
4	台付壺 接合部2/3 SI08	高さ 5.0	スコリア 砂粒 黄褐色(7.5YR-7/8)	タテハケ	底部 ナデ	
5	高坏 接合部1/3 SI08	高さ 6.0	褐色粒子多量 長石 褐色(7.5YR-6/8)	クシ刺突による羽状文?		内外面荒れ て観察困難
6	壺 口縁部片 SI08	高 1.6~	スコリア多量 砂粒 黄褐色(7.5YR-7/8)	折り返し口縁 口唇部 工具不明の加飾	縄文LR 円形浮文×2	外面荒れて 観察不能
7	壺 肩部片 SI08	高 3.9~	スコリア 砂粒少量 褐色(7.5YR-6/8)	羽状文		
8	壺 肩部片 SI08・SX02	高 8.0~	スコリア多量 砂粒 褐色(5YR-5/8)	肩部 浮文2列 クシ刺突羽状文		内面荒れて 観察不能

遺物番号	器種	器測	結土調色	調整・文様		備考
				外	内	
9	甕 頸部片 SI08	高 4.0~	スコリア少量 砂粒 に白い褐色(7.5YR-6/4)	頸部 ヨコナデ 肩部 円形浮文 羽状文		
10	甕 胴部片 SI08	高 4.5~	スコリア微量 砂粒微量 褐色(5YR-6/6)	斜ハケ残る クシ編み羽状文		
11	甕 口縁部片 SI08	高 2.7~	スコリアやや多量 長石 褐色(5YR-6/6)	口唇部 ハケキザミ		
61R1	甕 口縁部片 SI09	高 3.9~	スコリア 長石 チャート微量 に白い褐色(7.5YR-5/3)	口唇 ハケキザミ 斜ハケ	ヨコハケ	
2	高坏 坪部底面 SI09	高 4.0~ 底 5.1	スコリア 砂粒 褐色(7.5YR-7/6)	坏部 タテハケ少し残る ヨコナデ 接合部 羽状文(磨耗のため工 具不明)	ナデ	
62R1	甕 胴部1/2 SZ01	高 37.0~ 底 (11.4) 胴 (37.0)	褐色粒子極めて多量 長石 砂粒 褐色(5YR-6/8)	胴部 タテハケ	底面 ヨコ 斜ハケ	
64R1	甕 ほぼ光形 SK01	高 12.4 口 9.5 胴 11.5 底 5.6	砂粒やや多量 褐色(5YR-6/8)	口縁部 ハケ少し残る 胴部 円形浮文?	口縁部 ハケ	内外面荒れて観察困難
2	台付甕 口縁1/3 脚部完形 SK02	高 25.5 口 (17.7) 胴 (20.4) 底 5.3 脚 10.6	スコリア微量 砂粒多量 褐色(5YR-6/6)	口唇部 キザミ 胴部上・下位 タテハケ 胴部中位 ヨコ・斜ハケ 脚部 タテハケ 脚部最下部 ヨコハケ	胴部 ナデ ハケ少し残る 脚部 ヘラナデ	胴部に炭化物 付着
66R1	甕 胴部完形 D-1-j	高 9.8~	スコリアやや多量 砂粒 褐色(5YR-7/8)	口縁 糸の粗いハケ 頸部 ヨコナデ 円形浮文 羽状文(風化のため工具 不明)	口縁 円形浮文 クシガキ遺状文 頸部 ヨコハケ少 指頭直	
2	甕 口縁部片 B-1-x	高 7.4~	スコリア 砂粒 褐色(7.5YR-6/8)	有段口縁 口縁 棒状浮文 下縁ハケキザミ 口辺~頸部 タテハケ		
3	甕 口縁部片 B-3-a	高 4.3~	スコリア 炭岩粒 砂粒 褐色(5YR-6/8)	折り返し口縁		内外面荒れて観察不能
4	甕 口縁部片 D-3	高 4.6~	スコリア多量 砂粒多量 褐色(7.5YR/8)	折り返し口縁		内外面荒れて観察不能
5	甕 口縁部~胴 部1/8 C-3-c	口 (15.2) 高 15.0~ 胴 (16.0)	スコリア 砂粒 褐色(7.5YR-6/6)	口唇 ハケキザミ 口辺 斜ハケ 胴部 ヨコ・斜・タテハケ	口辺 ヨコハケ 胴部 ヨコヘラナデ 指オサエ	外面炭化物 付着
6	広口甕 口縁部片 D-1-w	高 6.5~	褐色粒子多量 スコリア 少量 砂粒 浅褐色(7.5YR-8/4)	口唇 ハケ 頸部押捺部部 ヨコ・タテハケ 肩部 ヨコ・斜ハケ	口辺 ヨコハケ	内面荒れて 観察困難
7	甕? 底面完形 D-2-x	高 2.7~ 底 6.0	スコリアやや多量 砂粒微量 浅褐色(7.5YR-8/6)	タテハケ		
8	高坏 接合部完形 D-1-w	高 6.0~ 底 5.0	スコリア少量 砂粒 明黄褐色(10YR-7/6)	接合部 クシ刺突による 羽状文		内外面荒れて 観察困難
9	高坏 接合部2/3 D-2-x	高 5.4~ 底 6.0	砂粒 褐色(5YR-6/6)	接合部 クシ刺突による 羽状文		内外面荒れて 観察困難
10	高坏 接合部完形 B-3-1	高 4.2~ 底 4.1	スコリア多量 砂粒 黄褐色(7.5YR-7/8)			内外面荒れて 観察不能
11	甕 頸部片 C-1-e	高 4.0~	スコリア 長石少量 褐色(7.5YR-6/8)	頸部 タテハケ少し残る 円形浮文		

遺物 番号	器 種	器 測	胎 土 色 調	調 整・文 様		備 考
				外	内	
12	壺 胴部片 B-2-j	高 5.3-	褐色粒子多量 砂粒少量 褐色(7.5YR-6/8)	羽状文 クシ括き波縄文2段		
13	壺 胴部片 B-2-j	高 7.0-	スコリア 砂粒 褐色(7.5YR-6/6)	浮文 縄文RL, RL, LR, LR		
14	壺 胴部片 D-1-w	高 4.2-	褐色粒子多量 長石少量 砂粒少量 褐色(7.5YR-6/8)	円形浮文2列 羽状文		
15	壺 肩部片	高 4.0-	スコリア多量 砂粒 褐色(5YR-6/8)	肩部 突帯とキザミ 羽状文		
6021	壺 胴部-胴部 2/3 SX01	高 10.6- 胴 (15.8)	スコリア多量 砂粒 褐色(7.5YR-6/6)	頸部 斜ハケ 羽縄文 ヨコミガキ	指オサエ	
2	壺 胴部1/3 SX01	高 11.6- 胴 (19.4)	スコリア微量 砂粒微量 黄褐色(7.5YR7/8)	ハケ少し残る	ヨコヘラナデ	風化顕著
3	壺 胴部完形 SX01	高 7.4-	スコリア少量 砂粒 褐色(5YR-6/8)	頸部 タテハケ少し残る		内外面荒れて 観察困難
4	壺 胴部-底部 1/4 SX01	高 11.0- 胴 (16.0) 底 (7.2)	褐色粒子多量 砂粒 褐色(7.5YR-6/8)			内外面荒れて 観察不能
5	壺 底部完形 SX01	高 6.9- 胴 (13.8) 底 6.4	スコリア 砂粒 黄褐色(7.5YR-7/8)			内外面荒れて 観察不能
6	壺 底部2/3 SX01	高 4.5- 底 8.6	スコリア少量 砂粒 褐色(5YR-6/8)			荒れて観察 困難
7	壺 胴部-底部 2/3 SX01	高 7.4- 胴 (17.5) 底 9.0	褐色粒子多量 砂粒 にふい褐色(7.5YR-6/4)			荒れて観察 不能
8	壺 胴部-底部 1/4 SX01	高 11.5- 胴 (25.6) 底 (10.3)	スコリア多量 長石砂粒多量 褐色(7.5YR-6/6)			荒れて観察 不能
9	壺 口縁-胴部 1/3 SX01	口 (19.4) 胴 (22.0) 高 16.3-	スコリア 砂粒 黄褐色(10YR-5/6)	口唇部 キザミ ヨコ・斜ハケ		内面荒れて 観察不能 外面炭化物
10	壺 口縁-胴部 1/4 SX01	口 (20.0) 胴 (22.0) 高 15.3-	スコリア 砂粒 褐色(7.5YR-6/6)	口唇部 キザミ タテハケ ヨコ・斜ハケ		内面荒れて 観察不能 外面炭化物
11	台付壺 接合部完形 SX01	高 2.9- 底 (6.4)	スコリア チャート微量砂粒 褐色(5YR-6/6)	接合部 粘土帯を直らせ帯端に よる加飾	脚部 ヘラナデ	
12	台付壺 接合部完形 SX01	高 4.1- 底 (6.0)	スコリア 長石 砂粒 褐色(5YR-6/6)	脚部 タテハケ少し残る		内外面荒れて 観察困難
13	高坏 接合部完形 SX01	高 4.9- 底 (5.6)	スコリア 砂粒 褐色(5YR-6/6)	ハケ少し残る 羽縄文(クシ刺突?)	脚部 ナデ	内外面荒れて 観察困難
14	高坏 接合部完形 SX01	高 5.0- 底 (5.2)	スコリア少量 砂粒 褐色(7.5YR-6/6)	接合部 クシまたはヘラによる 加飾		内外面荒れて 観察困難
15	壺 胴部片 SX01	高 5.9-	スコリア 砂粒少量 褐色(7.5YR-6/6)	羽状文 クシ括き文		10と同類?
16	壺 胴部片 SX01	高 3.2-	スコリア 砂粒 褐色(5YR-6/8)	頸部 突帯とキザミ 肩部 羽状文?		

遺物番号	器種	器測	胎土調色	調整・文様		備考
				外	内	
17	壺 胴部片 SX01	高 3.2-	スコリア 砂粒少量 橙色(7.5YR-6/6)	羽状文		11と同様?
70図 1	壺 胴部1/2 底部完形 SX02	高 9.3- 底 5.7 胴 (11.0)	スコリア 砂粒少量 橙色(7.5YR-7/6)	タテ 斜ハケ		ゆがみ強い
2	壺 胴部完形 SX02	高 7.4-	長石 砂粒 黄褐色(7.5YR-7/8)	肩部 突起(加飾不明) 羽状文(クシ刺突?)		荒れて観察 不能
3	壺 胴部1/2 SX02	高 8.5-	スコリア 長石 砂粒 橙色(7.5YR-7/6)	タテハケ残る 浮文 縄文LR	口辺 縄文LRを縦に転がす 胴部 ヨコヘラナデ	
4	壺 底部完形 SX02	高 2.2- 底 6.8	褐色粒子 砂粒 明黄褐色(10YR-7/6)			内外面荒れ て観察不能
5	壺 底部2/3 SX02	高 2.0- 底 (9.0)	砂粒 橙色(7.5YR-7/6)	ヨコミガキ	ハケ	底部木炭痕
6	台付壺 胴部 1/2完形 SX02	高 7.4- 底 4.0 胴 (8.9)	スコリア 長石 砂粒多量 黄褐色(7.5YR-7/8)	タテハケ	底部 ハケ 胴部 ヘラナデ	
7	台付壺 胴部1/2 SX02	高 6.7- 底 4.9 胴 (9.9)	スコリア 長石少量砂粒 橙色(7.5YR-7/6)	ハケ少し残る	ハケ	内外面荒れ て観察困難
8	台付壺 底部1/3 SX02	高 3.7- 底 (8.4)	スコリア 長石 砂粒 黄褐色(7.5YR-7/8)	ハケ 接合部 粘土帯を巡らせ指環に よる加飾		
9	高環 接合部完形 SX02	高 3.7- 底 (4.0)	スコリア 砂粒 橙色(5YR-6/8)			内外面荒れ て観察不能
10	高環 底部完形 SX02	高 5.9- 底 (5.0)	スコリア 砂粒 にふい橙色(5YR-6/4)	ミガキ ハケ ハケ工具による?羽縄文	ヘラナデ	
11	高環 底部2/3 SX02	高 2.5- 底 4.9	スコリア 砂粒 橙色(5YR-6/8)	羽縄文(クシ刺突?)		
12	壺 胴部片	高 4.2-	スコリア 砂粒 橙色(7.5YR-6/6)	円形浮文 縄文LR、RL		

第5表 3地点出土土器観察表 (古墳時代以降)

単位: cm, - 残存値, () 推定

番号	器種	器測	形態・整形	胎土・焼成・色調	残存	備考
6図 1	土師器 SZ01 表土	口 (13.0) 高 3.2-	口縁部は内湾し内側が口の唇部 で軽く外反する	含有物なし 焼成普通 橙色(5YR-6/6)	口縁片	内外面刺磨著しい
9図 1	かわらけ SZ02	口 8.5 底 4.0 高 2.9	突出ぎみの底部から直線的に立ち 上がる 口クロ整形 底部回転承切り	含有物なし 焼成不良 軟質で粉っぽい 浅黄褐色(7.5YR-8/6)	半完形	口縁2/3は磨耗により未接合
2	かわらけ SZ02	口 (8.8) 底 (4.8) 高 1.7	底部から直線的に開口唇部で軽 く内湾する 口クロ整形 底部回転承切り	橙色スコリアをごく少量含む 焼成不良 軟質で粉っぽい にふい橙色(7.5YR-7/4)	1/2	
3	かわらけ SZ03	口 9.3 底 4.3 高 2.8	底部から直線的に立ち上がる 口クロ整形 底部回転承切り	粒子等含まない 焼成やや不良 軟質 浅黄褐色(7.5YR-8/6)	口縁 1/2欠	
4	かわらけ SZ03	口 9.4 底 3.6 高 3.0	突出ぎみの底部からおわずかに内湾 して立ち上がり口唇部で肥厚する 口クロ整形 底部回転承切り	橙色スコリアをごく少量含む 焼成不良 軟質で粉っぽい 浅黄褐色(7.5YR-8/6)	口縁 1/2欠	
5	かわらけ SZ03	口 (8.6) 底 (4.0) 高 1.4	底部から内湾ぎみに開く 口クロ 目を強く残す 口クロ整形 底部回転承切り	粒子等含まない 焼成良好 浅黄褐色(7.5YR-8/4)	1/4	

番号	器種	器測	形態・整形	胎土・焼成・色調	残存	備考
6	かわらけ SZ03	口 7.9~ 底 (4.0) 高 1.4~	底部から直線的に開く ロクロ口を強く狭す ロクロ整形 底部回転糸切り	粒子等含まない 焼成やや不良 浅黄褐色 (7.5YR-6/4)	底部 2/3	
7	かわらけ SZ05	口 7.8 底 4.0 高 1.9	底部から内湾ぎみに立ち上がり端部でわずかに外反する 底部回転糸切り	褐色粒若干含む 焼成普通 褐色 (5YR-7/6)	4/5	外面の一部が褐色がかかる
8	かわらけ SZ05	口 7.9 底 4.0 高 2.1	底部から内湾ぎみに立ち上がり端部で外反 口唇部は面取りされる ロクロ整形 底部回転糸切り	褐色スコリア若干含む 焼成普通 褐色 (5YR-7/6)	9/10	
9	かわらけ SZ06	口 10.2 底 5.0 高 2.7	きわめて厚い底部から内湾ぎみに立ち上がる 底部回転糸切り	砂っぽい 微細な金雲母を含む焼成普通 褐色 (7.5YR-6/6)	7/10	内面部分的に褐色がかかる
10	かわらけ SZ06	口 9.0 底 4.7 高 2.5	突出ぎみの底部から内湾して立ち上がる 底部回転糸切り	粒子等ほとんど含まない焼成普通 褐色 (5YR-6/6)	4/5	
11	かわらけ SZ07	口 9.9 底 3.4 高 2.9	突出する底部から直線的に立ち上がる 内外面ナデ 底部回転糸切り後ヘラケズリ	褐色スコリア含む焼成普通 褐色 (5YR-7/6)	5/6	
12	かわらけ SZ07	口 9.4 底 3.9 高 3.3	突出する底部から直線的に立ち上がり端部で肥厚する ロクロ整形 内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	褐色スコリア含む焼成良好 褐色 (5YR-7/6)	2/3	
13	かわらけ SZ08	口 (9.0) 底 (5.2) 高 2.5	突出ぎみの底部から内湾して立ち上がる ロクロ整形 内外面ナデ 底部回転糸切り	褐色スコリアごく少量含む焼成良好 褐色 (5YR-6/6)	1/5	
14	磁器 茶碗	口 8.2 台 2.9 高 4.7	印刷による雷文と三角文	粒子等含まない 焼成良好 白色(9/0)	ほぼ 定形	
15	磁器 茶碗	口 7.6 高 3.5~	印刷による縦横に梅花と松枝文	粒子等含まない 焼成良好 白色(9/0)	口縁部 2/3	
16	陶器 茶碗	口 7.5 台 3.0 高 3.3	内外面灰白色の釉 全面に貫入	粒子等含まない 焼成良好 白色(9/0)	口縁部 一部欠	
17	陶器 骨壺蓋 SZ05	口 10.9 高 2.1	丸みのある天井部中央に粘土粒によるつまみが貼付される 天井部回転糸切り後開閉を回転ヘラケズリ 暗褐色の鉄粒	含有物なし 焼成良好 ぶい赤褐色 (5YR-5/3)	9/10	18の蓋
18	陶器 骨壺 SZ05	口 (11.3) 底 11.0 高 24.4 胴 15.6	上唇底の底部から直線的に立ち上がり胴部で丸みをもってすぼまる 口縁は折り返され上端に平坦面をもつ胴部下位は縮みナデ 暗褐色の鉄粒	含有物なし 焼成良好 ぶい赤褐色 (5YR-5/3)	口縁 4/5を 欠く	
19	陶器 骨壺蓋 SZ09	口 (13.2) 底 (6.4) 高 2.8	平坦な天井部からわずかに外反して開く 口縁部半ばにかえりを持つ ロクロ成形 内外面ナデ 外面暗褐色鉄粒	長石粒ごく少量含む 小気泡多い 焼成良好 褐色 (5YR-7/6)	1/3	20の蓋
20	陶器 骨壺 SZ09	口 (12.8) 高 8.0~ 胴 (16.4)	上端に平坦面をもつ断面三角形の口縁部から内湾ぎみの胴部が開く ロクロ整形 内面ロクロ目強く残る外面と内面上位に褐色の鉄粒	長石粒ごく少量含む 小気泡多い 焼成良好 褐色 (5YR-6/6)	口縁 1/8	
21	陶器 骨壺	口 (14.0) 高 7.1~ 胴 18.6	張りのある胴部から短い口縁部が直立する ロクロ成形 内外面ナデ	褐色スコリアごく少量含む 焼成普通 褐色(5YR-7/6)	口縁	

第6表 4地点出土土器観察表 (近世)

単位: cm, ~ 残存値, () 推定

番号	器種	器測	形態・整形	胎土・焼成・色調	残存	備考
13B	磁器 茶碗	台 (3.1) 高 3.3~	底部から内湾して立ち上がり直線的に開く 内外面に白色の釉 全面に貫入	含有物なし 焼成良好 灰色 (2.5Y-8/2)	口縁と 高台の 一部欠	

第7表 6・8地点出土土器観察表(奈良時代)

単位: cm, - 残存値, () 推定

番号	器種	器測	形態・整形	粘土・焼成・色調	残存	備考
22区 1	須臾器 杯 SX02表土	台 (10.4) 高 1.3~	底部は平坦 断面長方形の高台が「ハ」の字に開く 口口整形 底部回転ヘラケズリ 後高台貼り付け	黒色粒少量含む 焼成良好 灰白色 (2.5YR-7/1)	底部 1/7	内面→断面に炭化物付着
2	須臾器 蓋? SX02		口唇部内面に割目	極少量の白色粘土 焼成良好 褐灰色 (10YR-5/1)	口縁部 片	

第8表 9地点出土土器観察表(平安時代)

単位: cm, - 残存値, () 推定

番号	器種	器測	形態・整形	粘土・焼成・色調	残存	備考
26区 1	灰釉陶器 碗	台 (6.0) 高 3.0~	体部は内湾して立ち上がる 丸みを帯びた高台は「ハ」の字に開く 内外面ロクロナデ 体部内面にきわめて薄い釉 (剥落?) 底部不明 高台貼り付け	白色の軟質粒ごくわずか含む 焼成良好 灰白色 (10YR-7/1)	底部 1/4	
2	灰釉陶器 碗	台 (7.0) 高 1.6~	断面三角形の高台をもつ ロクロナデ 底部不明 高台貼り付け	粒子等含まない 部分的に軟質灰成や不良 灰白色 (10YR-7/1)	底部1/ 4	

第9表 11地点出土土器観察表(古墳時代)

単位: cm, - 残存値, () 推定

番号	器種	器測	形態・整形	粘土・焼成・色調	残存	備考
42区 1	須臾器 SD02	口 (12.2) 高 4.6 径 (15.2)	底部下端に平坦面をもつ 立ち上がりは内傾し 進部内面に割い段をもつ 受け部は短く突出する 口口整形 底部回転ヘラケズリ	長石粒含む 焼成良好 灰色 (N-5/1)	1/10	坏身または有蓋高杯の坏部か? MT15-TK10

第10表 12地点出土土器観察表(奈良・平安時代)

単位: cm, - 残存値, () 推定

番号	器種	器測	形態・整形	粘土・焼成・色調	残存	備考
71区 1	須臾器 杯 B-2-t D-4-d	底 (14.2) 台 (11.6) 高 2.3~	平坦な底部から直線的に口縁部が立ち上がる 断面三角形の高台は底部内寄りに貼付される ロクロナデ 貼り付け	少量の黒色粒含む 焼成良好 灰黄色 (2.5YR-7/2)	底部- 高台 1/5	
2	灰釉陶器 碗 C-4-x	口 (13.6) 台 (7.5) 高 3.4	底部から内湾して立ち上がり口唇部で外反する 高台は「ハ」の字に開く 内外面ロクロナデ 底部不明 高台貼り付け 直線程度のごく薄い釉	ごく少量の長石粒 焼成良好 褐灰色 (10YR-6/1)	1/4	重ね焼き痕
3	灰釉陶器 小碗 B-2-b	口 (12.0) 台 (4.7) 高 4.2	底部から弱く外反して開き、体部中で屈曲する 口唇部で外反する 高台は断面三角形と思われる ロクロナデ ナデ 高台貼り付け	ごくわずかの長石粒 焼成良好 灰白色 (10YR-7/1)	1/8	
4	灰釉陶器 碗 C-4-x	口 (13.8) 台 6.3 高 4.1	底部から内湾して立ち上がり口唇部で外反する 高台は断面三角形内外面ロクロナデ 底部回転糸切り後高台貼り付け	径2mm程度の石を若干含む やや粉っぽく軟質 焼成普通 暗黄褐色 (2.5Y-5/2)	1/3	無釉 業地(?)
5	灰釉陶器 碗 C-5-k	台 8.4 高 2.9~	高台は「ハ」の字に開く 内外面ロクロナデ 底部回転糸切り後高台貼り付け	若干の黒色粒と径2mm前後の石 焼成良好 灰褐色 (10YR-6/1)	底部の み	重ね焼き痕
6	灰釉陶器 碗 B-3-m	台 6.5 高 2.2~	底部から内湾して立ち上がる 高台外面は大きく面取りされる 内面わずかに飛沫状の釉 外面ごく薄い釉 外面の無釉部分は褐色を帯び焼き跡 底部回転糸切り	径3-7mmの砂粒ごく少量 焼成良好 灰黄褐色 (10YR-5/2)	底部の み全周	重ね焼きの内側黒色味帯びる
7	灰釉陶器 碗 ①セク4層	台 (7.4) 高 2.8~	底部から内湾して立ち上がる 高台は断面方形 内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	黒色粒・長石粒少量含む 焼成良好 灰白色 (10YR-7/1)	底部 1/2	重ね焼き痕
8	灰釉陶器 碗 A-2-x	台 (7.5) 高 2.9~	底部から内湾して立ち上がる 高台は日月形 内外面ロクロナデ 体部内面と見込み中央にオリブ褐色の灰釉 底部回転糸切り後高台貼り付け	ごくわずかの長石粒 焼成良好 灰褐色 (2.5YR-5/1)	底部 1/8	重ね焼き痕 高台の接合部割れ目多い

番号	器種	器面	形態・整形	胎土・焼成・色調	残存	備考
9	灰釉陶器 碗 C-1-e	台 6.4 高 2.2	断面三角形の高台 ロクロ整形 底部回転糸切り後高台貼り付け	極少量の黒色粒子を含む 焼成良好 灰白色 (5Y-7/1)	底部 1/2	
10	灰釉陶器 碗 ①セク4層	台 (7.6) 高 2.7~	高台は断面方形 ロクロナデ 体部内面にオリブ 褐色の釉 底部回転糸切り後高台貼り 付け	白色粒含む 焼成良好 灰白色 (10YR-7/1)	底部 1/2	重ね焼き痕 接合部やや雑
11	灰釉陶器 碗 ①セク4層	台 7.0 高 2.5~	底部から内湾して立ち上がる 高台は断面三角形 内外面ロクロナデ 接合部にヒビ 底部回転糸切り後高台貼り付け	ごく少量の長石粒含む 焼成普通 灰黄色 (2.5YR-7/2)	底部 1/3	
12	灰釉陶器 碗 C-4-m	台 6.0 高 2.3~	断面台形の高台が付き 内外面ロクロナデ 内面わずかの 飛沫状の釉 外面部分的に白色の 厚い釉 底部停止糸切り後高台貼り 付けと思われる 高台の貼り付け は雑	わずかの黒色粒 焼成良好 灰黄褐色 (10YR-6/2)	底部 全周 高台の 一部欠	重ね焼き痕 高台縁割痕
13	灰釉陶器 碗 ①セク4層	台 (10.2) 高 3.7~	底部から連続的に丸みをもって立ち 上がる 高台は帯状でやや高い 内外面ロクロナデ 底部不明 高 台貼り付け	わずかの黒色粒・砂粒含む 軟質 粉っぽい 焼成やや不良 灰黄色 (2.5Y-7/2)	底部 1/3	重ね焼き痕
14	灰釉陶器 碗 ①セク4層	台 6.0 高 1.5~	高台は断面三角形 内外面ロクロナデ 底部高台貼り 付け時にナデられ不明	混入物ほとんどなし 粉っぽい 焼成やや不良 灰白色 (2.5Y-8/2)	底部の み	
15	灰釉陶器 碗 ①セク4層	台 (7.4) 高 2.8~	底部から内湾して立ち上がる 高 台は上部に狭をもつ 内外面ロクロナデ 口縁部内外面 に薄い灰白色を施す灰釉 施釉 方法不明 底部・高台接合時にナ デ消され不明	白色粒ごく少量含む焼成良好 灰白色 (10YR-6/1)	底部 1/3	
16	灰釉陶器 碗 E-2-c	台 (6.0) 高 1.8~	高台は断面三角形 内面にわずかに飛沫状の釉 底部 回転糸切りと思われる	黒色粒ごくわずか含む 焼成良好 灰白色 (10YR-7/1)	底部 1/4	
17	灰釉陶器 碗 ①セク4層	台 7.3 高 2.8	底部から内湾して立ち上がる 高 台は断面三角形 内外面ロクロナデ 底部不明 高 台	粒子等含まない 焼成良好 灰白色 (N-5/1)	底部 1/3	
18	灰釉陶器 碗 B-2-p	底 (7.2) 高 1.9~	高台は断面三角形 内外面ロクロナデ 底部不明 高 台貼り付け	黒色粒 ごく少量の白色の軟質砂 粒含む 焼成良好 灰黄色 (2.5YR-6/2)	底部1/ 8	
19	灰釉陶器 碗 D-3-x	台 7.4 高 1.8~	口縁内面に暗緑色の自然釉 (ほと んど剥落) 底部不明 高台貼り 付け	軟質の白色粒子を多く含む 焼成良好 黄灰色 (2.5Y-5/1)	底部 1/4	
20	灰釉陶器 碗 SX01		体部内面に暗緑色の自然釉	黒色粒子ごく少量を含む 焼成良好 灰白色 (2.5Y-7/1)	底部片	
21	灰釉陶器 紋皿 ①セク4層		口縁部はごく深く内湾する 内面に暗オリブ褐色の灰釉	黒色粒子を含む 焼成良好	口縁部 片	口径12cm程と思われる 口縁内面に重ね焼き痕黄灰色 (10YR-6/1)
22	灰釉陶器 輪花瓶 ①セク4層		口縁内外面に暗緑色の灰釉	黒色粒子ごく少量を含む 焼成良好 灰色 (5Y-6/1)	口縁部 片	
23	灰釉陶器 碗 ①セク4層		内湾する口縁部は端部で軽く外反 する	白色粒ごくわずか 粉っぽい 焼成不良 灰白色 (2.5Y-8/1)	口縁部 片	口径11.5cm程と思われる
24	灰釉陶器 碗 ①セク4層		直線的に伸びる口縁部は端部でわ ずかに外反する 口縁端部に淡緑色の釉が施す ほと んど剥落	黒色粒ごく少量 焼成良好 灰黄色 (2.5Y-6/2)	口縁部 片	
25	灰釉陶器 碗 ①セク4層		内湾する口縁部は端部で軽く外反 する	軟質の白色粒少量 部分的に軟質 焼成普通 灰白色 (10YR-7/1)	口縁部 片	口径15.0cm程と思われる
26	灰釉陶器 碗 ①セク4層		口縁部は直線的に伸びる 内面飛沫状の釉ごく少量	長石粒ごく少量 焼成良好 灰白色 (10YR-7/1)	口縁部 片	口径16.0cm程と思われる

番号	器種	器割	形態・整形	胎土・焼成・色調	残存	備考
27	灰釉陶器 碗 ①セク4層		内湾する口縁部は端部でごく軽く外反するごく薄い釉	灰石粒多く含む 焼成良好 灰黄褐色 (10YR-6/2)	口縁部片	口径12.6cm程と思われる
28	灰釉陶器 碗 C-6-w		内湾する口縁部は端部で軽く外反する オリーブ褐色の釉が内面と口外面に施釉	黒色粒少量含む 焼成良好 灰黄色 (2.5Y-6/2)	口縁部片	口径14.6cm程と思われる
29	灰釉陶器 碗 C-4-x		内湾する口縁部は端部で外反する 内面に白色の濃淡状の釉	黒色粒多く含む 焼成良好 黄灰色 (2.5Y-5/1)	口縁部片	口径12.6cm程と思われる
30	灰釉陶器 碗 C-4-x		内湾する口縁部は端部で外反する 白色のごく薄い釉が口縁内外面に施釉	含有物なし 焼成良好 灰黄色 (2.5Y-7/2)	口縁部片	口径13.6cm程と思われる
31	灰釉陶器 碗 A-2-y		口縁内外面に暗緑色の灰釉 (ほとんど剥落)	黒色粒子少量含む 焼成良好 灰白色 (10YR-7/1)	口縁部片	
32	灰釉陶器 短頸壺 C-4-t	口 (8.0) 胴 14.2 高 6.0→	張りのある肩部から断面三角形の口縁部にかけてすばまり縁部で軽く外反する オリーブ褐色の釉 口クロ整形	黒色粒子若干含む 焼成良好 灰黄褐色 (10YR-6/2)	口縁→ 肩部 1/6	外面はやや荒れザラつく
33	須恵器 鉢? E-2-c		開いた口縁端部は面取りされる口クロ整形 外面に飛沫状の釉	焼成良好 褐灰色 (10YR-6/1)	口縁部片	口径31.6cm前後
34	須恵器 鉢 B-1-j		口クロ整形 口縁内面に褐色の鉄釉 頸部に黒褐色の鉄釉 (雑なハケ塗り)	白色砂を含む 焼成良好 にぶい黄褐色 (10YR-7/2)	口縁部片	
35	灰釉陶器 長頸瓶 ①セク4層	高 2.5	外反して開く口縁端部は上下に引き出される 内外の全面に灰釉	焼成良好 黄灰色 (2.5Y-6/1)	口縁部片	口径17.5cm程と思われる
36	土師器 甕 A-2-w	高 3.9	口縁部は「く」の字状に屈曲する 内外面ナデ	灰石粒を多く含む 焼成普通 にぶい褐色 (7.5YR-6/4)	口縁部片	

第11表 3 地点出土鉄貨一覧表

(単位 cm g)

番号	位置	銭貨名	外径	孔径	重さ	備考	番号	位置	銭貨名	外径	孔径	重さ	備考
22	SZ02	寛永通宝	2.3	0.6	3.5	鉄銭	30	銭C	寛永通宝	2.5	0.6	3.2	文銭
23	SZ03	寛永通宝	2.2	0.6	1.8		31	銭D	不明	2.4	0.6	1.2	銅銭
24	銭A	寛永通宝	2.4	0.6	3.3	ス貝質	32	銭D	不明	2.3	0.6	3.1	銅銭
25	銭A	寛永通宝	2.5	0.6	3.2	文銭	33	銭D	不明	2.8	0.6	3.0	鉄銭
26	銭B	寛永通宝	2.5	0.6	3.5	文銭	34	銭D	不明	2.8	0.6	—	鉄銭
27	銭B	寛永通宝	2.3	0.5	2.8	ス貝質	35	銭D	不明	2.5	0.6	1.6	鉄銭
28	銭B	寛永通宝	2.5	0.6	2.8	文銭	36	表土	寛永通宝	2.1	0.6	2.5	
29	銭C	寛永通宝	2.4	0.6	3.1	文銭	37	表土	1銭	2.3	—	3.4	大正7年

第5章 まとめ

今回の調査では弥生時代から近世以降に至る遺構・遺物が検出された。ここではこれらを時期ごとに概観し、まとめとした。

弥生時代

[中期]

11地点から5基の方形周溝墓が検出された。いずれも「コ」の字状に溝が配され、コーナーに陸橋部をもつ形態をとる。埋葬施設は検出されておらず、後世の削平で失われたものと思われる。SZ03北溝はこれに先行する溝と重複しており、SZ03の北側は基盤の岩盤層まで削平されているが、この区域に遺構の存在した可能性は高い。SZ04東溝も他の遺構と重複している可能性があり、溝の角度の開いたSZ05南側にも他の周溝墓が存在する可能性が考えられる。従って本来の周溝墓の分布範囲は南北に広がるものと推測される。各周溝墓の主軸方向、またはその直交方向は近似する。

遺構の変遷は、SZ01→SZ02、SZ04→SZ03の重複関係から2期以上にわたって周溝墓が営まれたことが明らかであり、SZ02とSZ05にも重複関係が認められる。また、前述のようにSZ03、SZ04はそれぞれ別に重複関係を持つ可能性があることからさらに多期にわたる可能性がある。出土遺物はいずれも中期後葉白岩式期に属し、東側のSZ03・04出土のものは古段階、西側のSZ02出土のものは新段階に属すると考えられる。

これらの方形周溝墓群の築造主体と考えられる該期の集落跡は今回の調査区内からは検出されていない。

[後期]

6・8・9・10・12地点から遺構・遺物が検出された。

6・8・9地点は細い尾根上に並んで位置し、方形周溝墓、土器棺墓、溝、土坑、焼土跡が検出された。検出された遺構は、いずれの地点においても尾根を横断する方向に長軸方向をもつものが中心となるといって一貫した規則性が窺える。6・8地点SZ01出土の高坏は、後期菊川様式新様相(中嶋1991)に属すると考えられる。そのほかの遺物は時期を確定するには不十分な遺存状態であるが、大きな時期差はないものと考えられる。6・8地点SK01・02と9地点SK03は形状は異なるが、覆土下層に多くの礫が検出され、その上位から土器が出土するという類似した様相を示している。これらは土坑として報告しているが土坑墓の可能性が考えられる。これらの点から6・8地点と9地点は一連の墓域であった可能性が高いと思われる。また、丘陵の屈曲部にあたる6・8地点SX01から9地点SK01までの約19mの間には遺構が検出されておらず、地形に即して墓域群がグループをなしているものと考えられる。

10地点も6・8・9地点と同じ尾根状に位置し、尾根を横断する方向に遺構の主軸方向をもつという様相が共通する。遺物はSD01から内面に縄文の施文された折り返し口縁壺片1点が出土したのみで、遺物から遺構の性格を推測し得る状況ではない。各遺構の長軸方向がほぼ一致し、覆土の状態が極めて近いことから、検出された遺構全体が関連をもって営まれた可能性が高いと考えられる。

12地点は竪穴住居跡10軒からなる集落跡で、このほかに土器棺墓、土坑が検出された。住居跡の分布は調査区北側と東側に分岐する支谷の分岐付近に集中している。住居跡群に囲まれた調査区南西側のやや開けた地区からは遺構は検出されておらず、低湿地をさけた占地状況であった可能性とともに、後世の削平のため失われた可能性や、セクション③に見られるような地滑りのために流された可能性も考えられる。

全容が明らかになった住居跡はないが、残存部からみて、平面形は隅丸方形及び方形、柱穴は4柱穴構成を基調とすると思われる。主軸方向は炉跡の検出されたSI03のほかは不明であるが、残存する軸方向の北寄りのものを採ると、N-22°E-N-38°E(SI01~03)とN-14°E-N-17°W(SI04~07・09)にややまとまりが認められる。

東側の谷戸内からは、住居跡群からやや離れて2基の土坑が検出されている。土坑は上部を削平されており全容は不明であるが、墳墓遺構の一部であるかもしれない。土坑の検出された地点より谷奥には土器棺墓が検出された。1基のみの検出であるが周囲の削平状況を考え合わせれば本来は集落に隣接した墓域であった可能性が考えられる。

出土した遺物は土器のみであるが、全般に遺存状況が悪く、12地点で図示し得た個体数は73点と少ない。壺(44点)・甕(22点)・高坏(7点)の3器種がみられる。出土土器に関する若干の特徴としては、広口壺としたもの(48図1等)5点、接合部を粘土帯で補強した台付甕2点が含まれる点、壺の文様に描き波状文のみられる点、壺、高坏の調整に多くみられる櫛刺突による羽状文の中にいわゆる有段羽状が少ない(羽状文の施文される壺11点中1点、高坏7点中2点)点があげられる。住居跡の継続状況からは多少の時間幅が存在すると思われるが、概ね弥生時代後期菊川様式の中様相に属すると思われる。SZ01出土の壺は頸部が細くやや後出のものかと思われる。

以上に概観した弥生時代後期の遺構が検出された調査地点の立地状況からは、12地点の集落の墓域として、集落の位置する谷を登りつめた丘陵頂部の6・8・9地点に各遺構が構築されたとみるのが自然であると思われる。しかし、6・8地点と12地点の出土遺物には若干の時間差が存在すると思われる。また、12地点では集落に隣接して土器墓が検出されており、これらの墓域の差は今後検討すべき点であろう。

古墳時代

1地点、3地点で各1基の古墳が調査された。周辺の丘陵上に分布する源ヶ谷古墳群に属するものである。いずれも地山整形によって墳丘を構築しており、1地点SZ01は丘陵の分岐点付近、3地点SZ01は丘陵端部という立地を活用し墳丘の成形は最小限に留められていると思われ、墳丘裾部は捉えがたい。周溝は3地点SZ01で丘陵を横断する2箇所に掘削されたのみで、葺石・埴輪等の外表施設は検出されていない。

1地点SZ01は墳丘の一部が残るのみで、残存状況も不良であった。墳丘裾部と思われる勾配の転換部の径から推測して、径20~25mほどの円墳の一部と思われるが、墳丘形が明確に捉えられたとは言い難い。既調査部分の報告を待ちたい。

3地点SZ01は径14mほどの小円墳であるが、形状は隅丸台形に近い形態を呈する。墳頂から本棺直葬と考えられる主体部2基が検出された。遺物は、東主体部から小型の鉄剣と滑石製小玉、西主体部から土師器片1点、墳丘上から土師器片1点が出土したが、土器片は小片で時期を窺うには乏しい資料である。本遺跡の載る丘陵を挟んで流れる垂木川、倉真川流域の丘陵では小規模な後期の群集墳が形成されている状況からは、本古墳もそのような古墳の1基かと思われるが、鉄剣の副葬からは若干遡る時期かと考えられる。

このほか、11地点SD02からは古墳時代後期の須恵器が出土しているが、遺構の性格は明らかにし得なかった。

奈良・平安時代

6・8・9・11・12地点から遺物が出土しているが、遺構は検出されていない。中心となるのは平安時代の灰釉陶器で、12地点から一定量の破片が出土している。器種は圧倒的に碗が多く、段皿、輪花碗が1点ずつ出している。灰釉陶器の口縁部・高台の形状、胎土には多彩なものがあり、複数の窯の製品が混在しているものと考えられるが、生産窯の特定はできなかった。底部の調整は明らかにヘラケズリされるものがみられず、余切り痕を残すものが多いことから、概ね10世紀代以降の製品(須賀原跡群折戸53号窯式併行期以降)と思われる。これらには第71図3・4のように施釉した痕跡が認められないものも含まれており、素地の製品である可能性も考えられる。この他には、少量ながら、9地点、11地点から灰釉陶器碗、6・8地点、12地点から須恵器環などが出土しており、須恵器環は8世紀前葉頃に属するものと思われる。明らかにこれらの時期に属する遺構は確認されていないが、遺物の出土量からは該期の遺構が存在した可能性が考えられる。

12地点出土の甕口縁部(第71図32 図版22)は、口唇内面と頸部外面に粗くハケ塗りされた鉄釉が施されている。また、図示していないが外面に粗く鉄釉が施された須恵器甕胴部片(図版22の3段目右端)も出土している。鉄釉が施された須恵器については吉村睦司氏の指摘があり(吉村1982)、本例もそのような製品と考えられる。

近世以降

3地点SZ01墳丘上と4地点から遺構が検出されているが、4地点SX01は近代に属すると考えられる。3地点からは火葬墓と集石遺構が検出された。火葬墓では、向かい合わせたかわらけ内に歯を納める例が確認された。銭貨の埋納もみられたが、枚数は1~5枚で6枚が埋納されるものは確認されなかった。SZ04出土の骨壺と蓋(第9図17・18)は図上の対比では袋井市上石野1号墓から出土した19世紀の志戸呂

窯製品と極めて類似している。3地点SX01(集石遺構)と類似する遺構としては、袋井市愛野向山墳墓群に近世の集石墓群がみられ、立地状況から見てSX01も同様の墳墓遺構の可能性が考えられるが、愛野向山の例では集石下に掘り込みを持つものは少ない。

時期不明の遺構

上記の他に時期を特定できなかった遺構が若干存在する。このうち6・8地点SX02について若干触れたい。6・8地点SX02は丘陵上の広い範囲に礫を含む土層が敷かれたもので、弥生時代の遺構群を覆っている。出土遺物には奈良時代前葉に属する須恵器環、古墳時代後期以降の須恵器蓋と思われる小片、銅銭があるが、遺構の年代を決定するには心許ない出土状況であることから時期不明として報告した。あえて所属時期を推定すると、前述のように丘陵上に展開する墓域においてグループをなすと考えられる遺構群を覆っていることから、これらと同時期の弥生時代後期である可能性が考えられ、出土遺物を重視すれば、古墳時代後期～奈良時代の所産と考えられる。遺構の性格は、前者の場合、葬送に伴うものと推測され、後者においても生活、生産に関わる要素が全くみられないことから、祭祀に関わる可能性が高いと考えられる。この遺構に関しては類例の増加を待ちたい。

おわりに

第1・2章でも若干ふれたが、本遺跡の東に隣接する源ヶ谷遺跡・六ノ坪遺跡では、本遺跡と重複する時期の多数の遺構・遺物の検出をみており、本遺跡の位置づけもこの遺跡との関連で再考すべきと思われる。

本遺跡の出土遺物に関しては、向坂鋼二、鈴木敏則、贅元洋の各氏に御教示頂きました。末筆ながら記して感謝の意とします。

〔参考文献〕 (第2章で取り上げたものは割愛した)

- 岩本 貴 1995「菊川式土器における編年上の問題」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立10周年記念論文集』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 久野正博 1991「三河・西遠江の後期弥生土器編年と地域性」『東海系時の移動からみた東日本の後期弥生土器 I 発表要旨・追加資料編』東海埋蔵文化財研究会
- 久野正博 1991「静岡県(西遠江)」『東海系時の移動からみた東日本の後期弥生土器 II 東海・近畿・北陸編』東海埋蔵文化財研究会
- 後藤建一 1991「3-5-B 静岡」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣出版
- 後藤建一 1993「生産地の様相と編年 湖西」『季刊考古学 第42号』雄山閣出版
- 後藤建一 1995「II 東海東部(静岡)」『須恵器集成図録 第3巻 東日本編 I』雄山閣出版
- 齋藤孝正 1991「3-5-A 愛知」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣出版
- 齋藤孝正 1993「生産地の様相と編年 遠投・美濃須恵」『季刊考古学 第42号』雄山閣出版
- 齋藤孝正 1995「I 東海西部(愛知・岐阜)」『須恵器集成図録 第3巻 東日本編 I』雄山閣出版
- 佐野五十三 1988「V-1-3 灰釉陶器」『梅橋北遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第14集
- 鈴木敏則 1996「遠江・駿河(後期)」『YAY I』弥生土器を語る会
- 永井義博 1987「6 結語」『鶴松遺跡II』袋井市教育委員会
- 中嶋郁夫 1988「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」『転機 2号』
- 中嶋郁夫 1991「東遠江における後期弥生土器編年と土器移動」『東海系時の移動からみた東日本の後期弥生土器 I 発表要旨・追加資料編』東海埋蔵文化財研究会
- 中嶋郁夫 1991「静岡県(東遠江)」『東海系時の移動からみた東日本の後期弥生土器 II 東海・近畿・北陸編』東海埋蔵文化財研究会
- 中嶋郁夫 1991「駿河における後期弥生土器編年と土器移動」『東海系時の移動からみた東日本の後期弥生土器 I 発表要旨・追加資料編』東海埋蔵文化財研究会
- 中村 浩編 1995「須恵器集成図録第1巻 近畿編 I」雄山閣出版
- 松井一明 1989「宮口古瀬群跡と清ヶ谷古瀬群跡における須恵器・灰釉陶器についての一考察」『静岡県の産業遺跡』静岡県文化財調査報告書 第42集
- 松井一明 1992「7 考察-中遠地方における竪穴住居の編年の様相-」『鶴松遺跡V』袋井市教育委員会
- 山上英吾 1991「静岡県(駿河)」『東海系時の移動からみた東日本の後期弥生土器 II 東海・近畿・北陸編』東海埋蔵文化財研究会
- 吉村隆司 1982「古代軸の起源と鉄軸」『考古学研究29-1』考古学研究会
- 和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』134号 考古学研究会

はじめに

六ノ坪IV遺跡12地点では、弥生時代後期の遺構・遺物が検出されている。このうち、焼失家屋と考えられる S I 1 0 2 の床面からは、住居構築材と考えられる炭化材が出土している。また、S I 1 0 4 の床面からは内部に種実が入った土器が出土している。

本報告では、これらの炭化材や種実遺体の種類を明らかにし、用材選択や植物食料等に関する資料を得る。

1. 炭化材の樹種

(1) 試料

試料は、S I 1 0 2 の床面から出土した炭化材3点(試料番号1,2,6)である。

(2) 方法

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

試料番号1 コナラ属アカガシ亜属、試料番号2 はエゴノキ属、試料番号6 はサカキに同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中層~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと同列放射組織とがある。柔組織は短接線状および散在状。

・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sied. et Zucc.) ツバキ科サカキ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2~3個が複合して配列し、道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1~20細胞高。

・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

散孔材で、横断面は楕円形、壁孔は交互に配列する。放射組織は異性II型1~3細胞幅、1~20細胞高。

(4) 考察

S I 1 0 2 から出土した炭化材は、いずれも床面から出土している。いずれも棒状の部材で、住居の中央に向かって倒れるように出土していることから、垂木の可能性がある。また、試料番号6は柱穴付近から出土しており、柱材の可能性もある。

樹種は3点とも異なっており、様々な種類が住居構築材として利用されていた様子がうかがえる。住居構築材は、関東地方の調査例(高橋・植木, 1994)等から、遺跡周辺で入手できる種類を利用したと考えられる。この結果から、本遺跡周辺にアカガシ亜属・サカキ等の常緑広葉樹やエコノギ属等の落葉広葉樹が生育していたことが推定される。確認された3種類の木材の強度が比較的高いことを考慮すると、生育していた種類の中から強度の高い種類を選択した可能性もある。また、垂木や柱や最低でも数mの部材を必要とする事から、長さやバランスよくむための形状等も考慮されていた可能性もある。

本地域では、住居構築材の用材選択に関する調査例が少なく、今後さらに類例を蓄積したい。

2. 種実遺体の種類

(1) 試料

S I 1 0 4 (弥生時代後期)床面の土器内から検出された種実遺体試料1点である。

(2) 方法

双眼実体顕微鏡下で、その形態の特徴から種類を同定する。

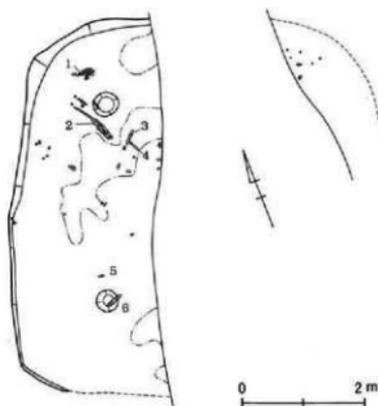
(3) 結果

検出された種実には保存状態が悪く、完形のものも少ないが、おそらくアサ (Cannabis sativa) の種子であると考えられる。形状は、灰褐色、楕円形で、大きさは4 mm程度。縦に全周する稜があり、下端に大きな「へそ」がある。表面は薄くて堅く、ややざらつく。

(4) 考察

アサは、植物体は繊維として、種実は食用・薬用として古くから利用されてきた食物である。その利用は弥生時代まで遡ることができ(粉川, 1988)、弥生時代では佐賀県菜畑遺跡等で報告例がある(粉川, 1988)。

今回の結果から、本遺跡でもアサが繊維や食用・薬用等に利用されていたと推定される。



12地点 S102 炭化種出土状況

<引用文献>

粉川昭平 (1988) 穀物以外の植物食。金関 恕・佐原 真編「弥生文化の研究2 生業」, P. 112-115, 雄山閣。

高橋 敦・植木真吾 (1994) 樹種同定からみた住居構築材の用材選択, PALYNO, 2, P. 5-18.

渡辺 誠・粉川昭平 (1982) 菜畑遺跡の大型種子。「菜畑 佐賀県唐津市における初期稲作遺跡の調査 分析・考察編」, P. 467-473, 唐津市。

写真図版



1. 遺跡遠景 (空撮、南から)



2. 遺跡全景 (空撮、南から)



1. 遺跡全景 (空撮)



2. 遺跡全景 (空撮、西から)



1. 1地点全景 (空撮)



2. 遺跡遠景



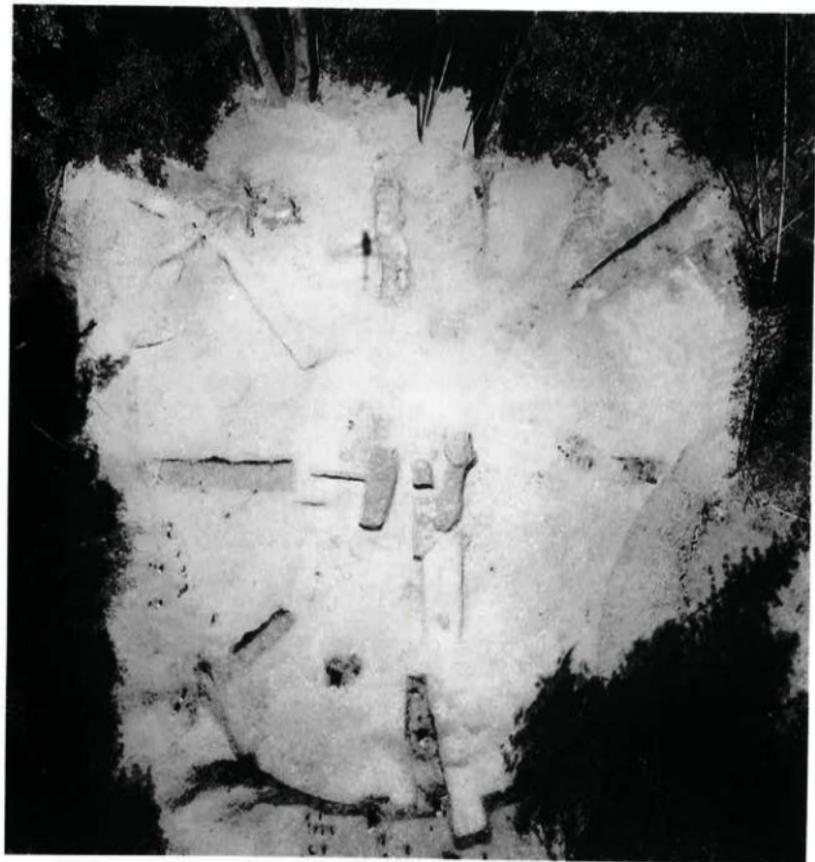
3. 1地点全景 (空撮、北から)



4. 3地点現況 (南から)



5. 3地点全景 (空撮、南から)



1. 3地点全景（空撮）



2. 3地点全景（南から）



3. 3地点全景（東から）



1. 3地点SZ01主体部(南から)



2. 3地点SZ01東主体部(←天)



3. 3地点SZ01西主体部(←天)



4. 3地点SZ01東主体部遺物出土状況



5. 3地点SZ01北側周溝セクション



6. 3地点SX01



7. 4地点全景(東から)



8. 4地点SX01

图版 6



1. 6·8·9地点全景(空撮)



2. 6·8地点SX02全景(空撮)



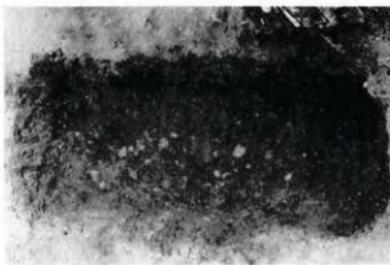
1. 6・8地点全景(西から)



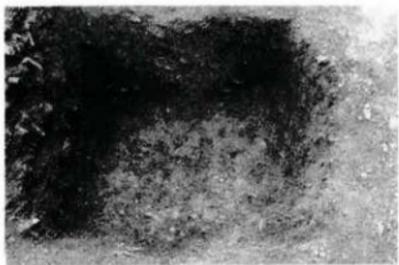
2. 6・8地点SX02全景(空撮、西から)



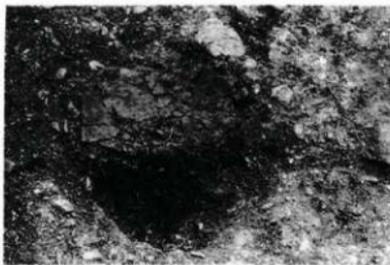
3. 6・8地点SZ01



4. 6・8地点SZ01第1主体部(←天)



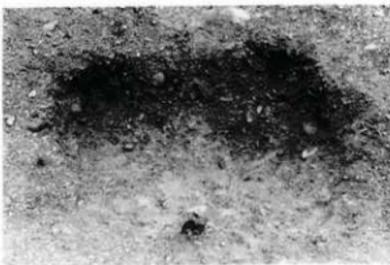
5. 6・8地点SZ01第2主体部



6. 6・8地点SZ02



7. 6・8地点SK01



8. 6・8地点SX01

図版 8



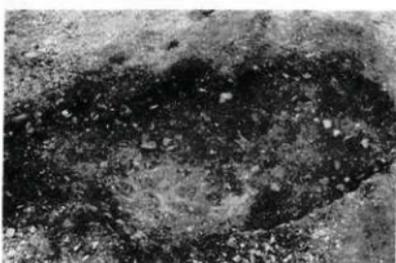
1. 9地点全景(西から)



2. 9地点SZ 01



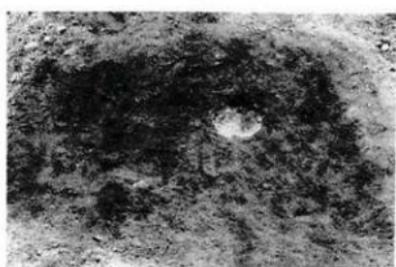
3. 9地点SZ 02



4. 9地点SK 01



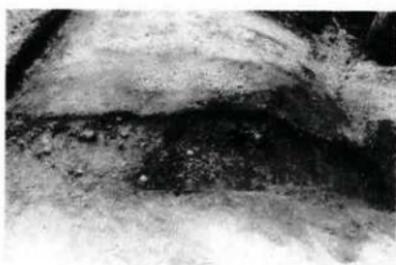
5. 9地点SK 03



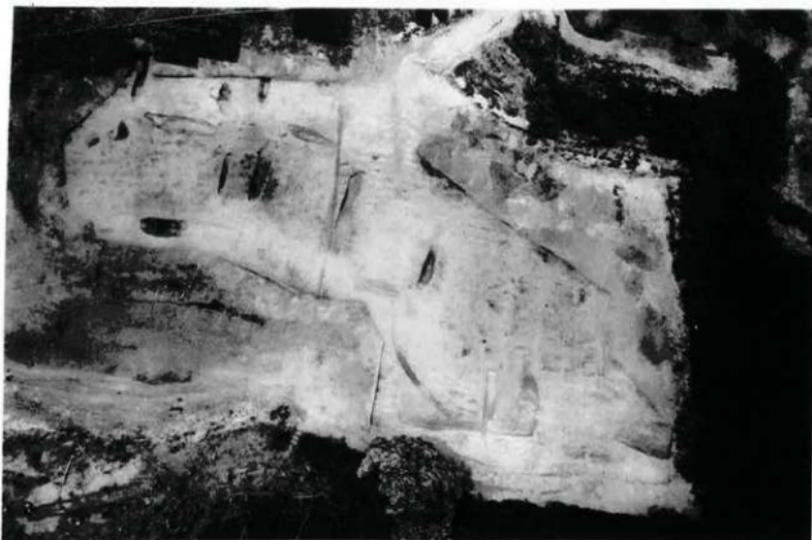
6. 9地点SK 03遺物出土状況



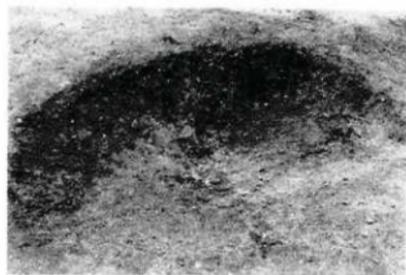
7. 10地点全景(東から)



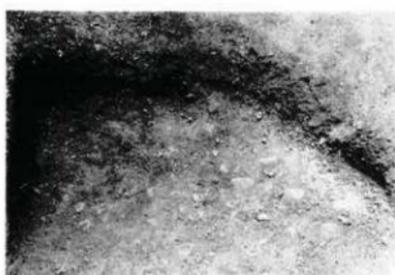
8. 10地点SD 01



1. 11地点全景 (空撮)



2. 10地点SK 01



3. 10地点SK 02

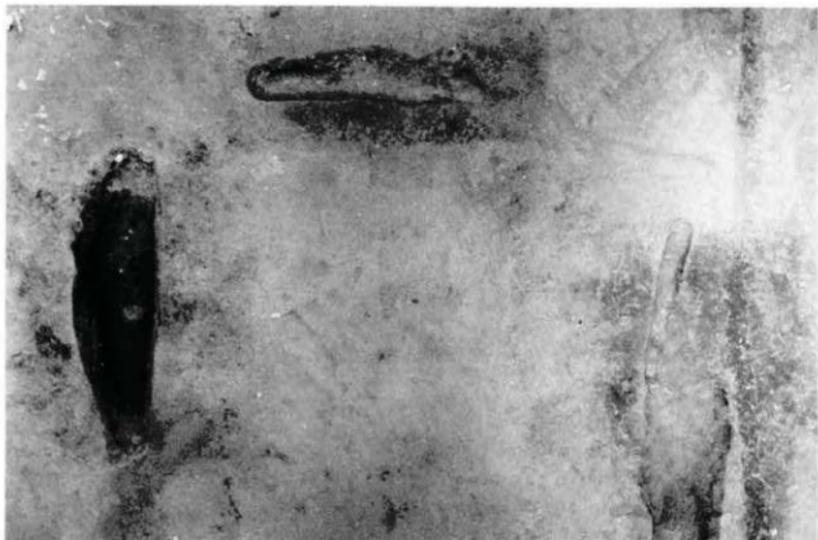


4. 11地点全景 (西から)



5. 11地点全景 (東から)

图版10



1. 11地点SZ 01 (空撮)



2. 11地点SZ 02 (空撮)



1. 11地点SZ03 (空槽)



2. 11地点SZ03北溝遺物出土狀況①



3. 11地点SZ03北溝遺物出土狀況②

图版 12



1. 11地点SZ04 (空撮)



2. 11地点SZ05 (空撮)



1. 11地点SZ02南溝遺物出土状況①



2. 11地点SZ02南溝遺物出土状況②



3. 11地点SZ02南溝遺物出土状況③



4. 11地点SI01、SD01・02 (空撮)



5. 11地点SI01 (東から)



6. 11地点SD01



7. 11地点SD02



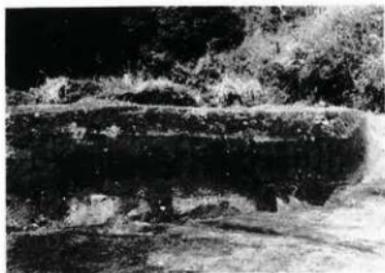
8. 11地点SX01



1. 12地点全景 (空撮)



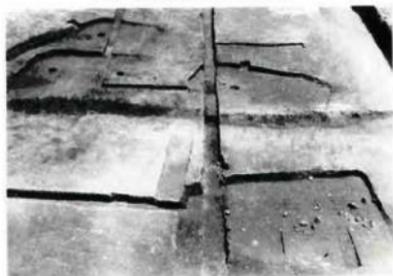
2. 12地点全景 (南から)



3. 12地点セクション①



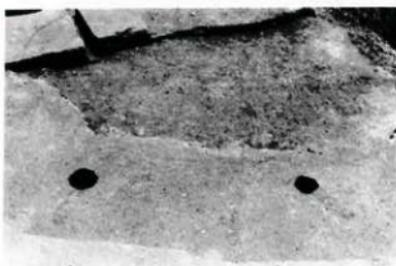
4. 12地点S101~04、09 (南から)



5. 12地点S105~08 (西から)



1. 12地点S101



2. 12地点S102



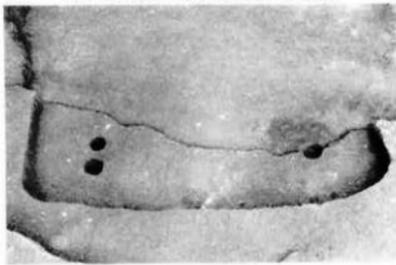
3. 12地点S102 遺物出土狀況①



4. 12地点S102 遺物出土狀況②



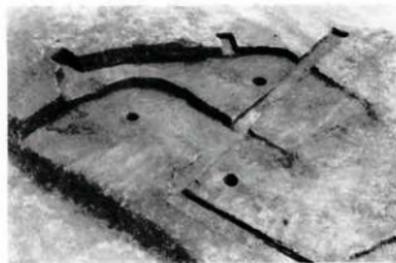
5. 12地点S103



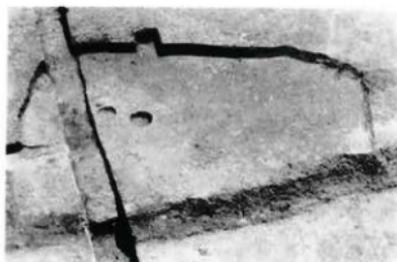
6. 12地点S104



7. 12地点S104 遺物出土狀況



8. 12地点S105・07



1. 12地点S106



2. 12地点S106遺物出土状況



3. 12地点S108



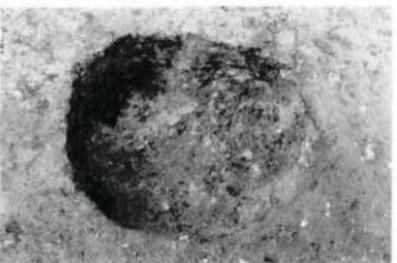
4. 12地点S108遺物出土状況



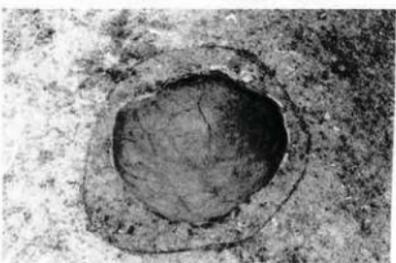
5. 12地点S109



6. 12地点S109遺物出土状況



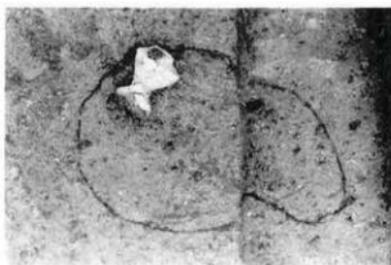
7. 12地点SZ01掘り方



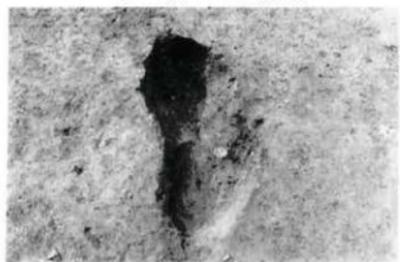
8. 12地点SZ01遺物出土状況



1. 12地点SK 01掘り方



2. 12地点SK 01遺物出土状況



3. 12地点SK 02掘り方



4. 12地点SK 02遺物出土状況



5. 12地点SX 01



6. 12地点SX 02



7. 12地点SX 03

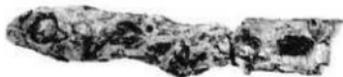


8. 調査状況(12地点)

图版18



6图-1



6图-2



6图-3



6图-4



9图-4



9图-8



9图-11



9图-9



9图-10



9图-17·18



10图-22



10图-23



10图-24



10图-25



10图-26



10图-27



10图-28



10图-29



10图-30



10图-31



10图-32



10图-33



10图-34



10图-35



10图-36



10图-37

1. 3地点出土遺物



16图-1



16图-2



18图-2



22图-3

2. 6·8地点出土遺物



25图—1



26图—1



26图—2

1. 9地点出土遗物



37图—1



38图—1



36图—1



36图—2



36图—3



36图—4



42图—1

2. 11地点出土遗物



62图-1



52图-1



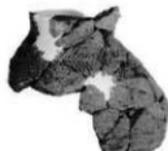
64图-1



66图-5



70图-1



66图-1



48图-2



70图-2



66图-7



66图-1



48图-1



66图-9

6/2



64图-2



70图-6



70图-7



70图-10



66图-14



59图-1



55图-1



55图-2



66图-3



48图-3



48图-4



66图-4



66图-2



59图-7



66图-13



66图-14



59图-8



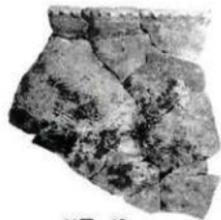
66图-12



66图-17



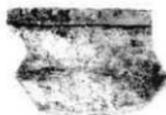
66图-15



66图-10



59图-3



66图-6



70图-8

图版22



71图-2



71图-6



71图-4



71图-15



71图-11



71图-10



71图-5



71图-34



71图-35



71图-32



71图-33



71图-1



71图-30



71图-27



71图-28



71图-17



71图-9



71图-25



71图-29



71图-26



71图-18



71图-19



71图-20



71图-8



71图-13



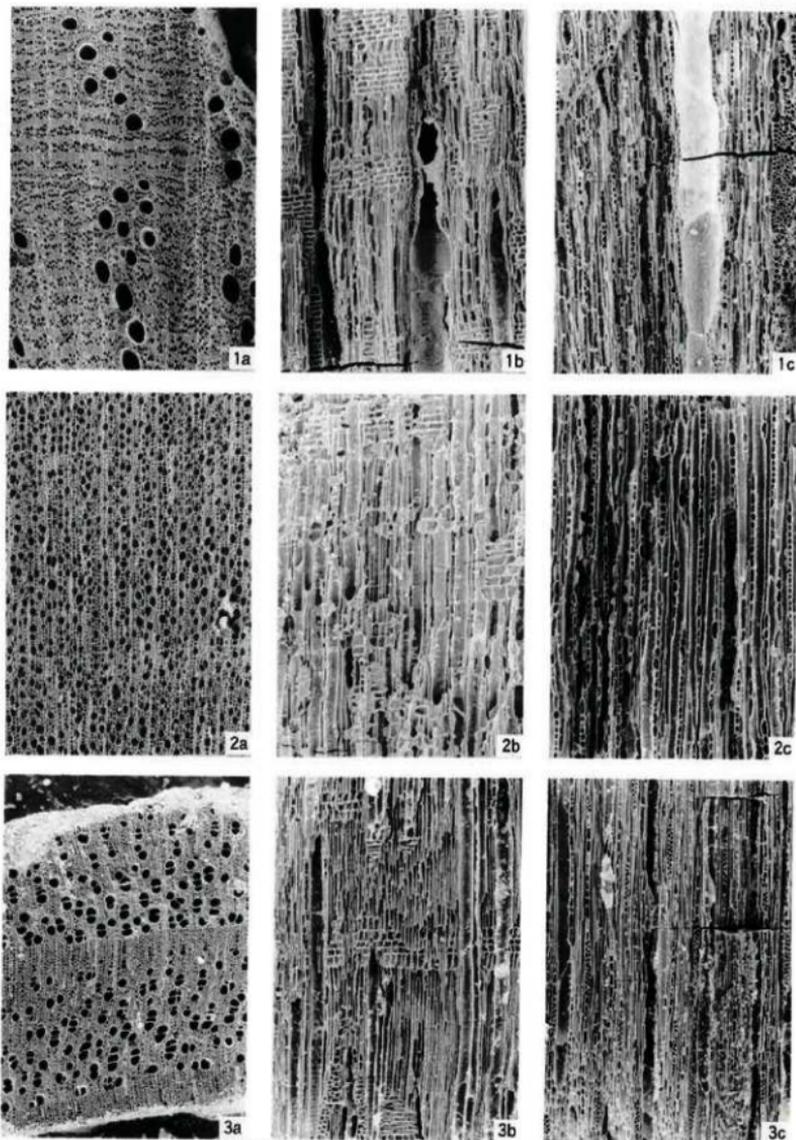
71图-14



71图-7

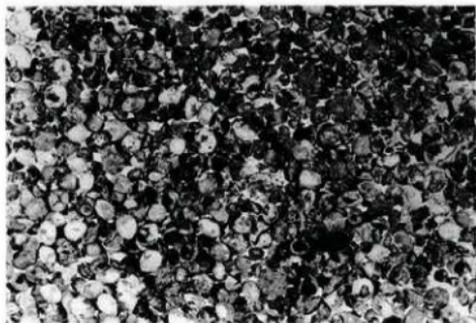


71图-12



1. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号 1)
 2. サカキ (試料番号 5)
 3. エゴノキ属 (試料番号 2)
- a: 木口, b: 径目, c: 板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c



1. アサ (4号住居跡出土土器内)

1 cm

遺跡抄録

ふりがな	ろくのつばよんいせき・げんがやこふんぐんはつつちょうさほうこくじょ							
書名	六ノ坪IV遺跡・源ヶ谷古墳群発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名						シリーズ番号		
編者名	前田庄一 大坪宜雄 北爪一行							
編集機関	(株)武蔵文化財研究所							
所在地	〒193-0942 東京都八王子市鶴田町539番地の1号 TEL0426-66-6030							
発行年月日	西暦1998年6月27日							
収録遺跡名	所在地	コード		北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
六ノ坪IV遺跡・ 源ヶ谷古墳群	静岡県掛川市秋葉路25-1他	22213	131-4	34度	137度	19970310	3,935m ²	民間宅地開発に伴う事前調査
			489	46分 37秒	59分 37秒	19970711		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
六ノ坪IV遺跡・ 源ヶ谷古墳群	墳墓 集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代		方形周溝墓 8基 古墳 2基 土器棺墓 2基 竪穴住居跡 11軒 溝 2条 土杭 11基		弥生土器・土師器・ 須恵器・灰陶磁器・ かわらけ・鉄製品・ 玉		

六ノ坪IV遺跡・源ヶ谷古墳群発掘調査報告書

平成10年6月19日印刷

平成10年6月27日発行

編集・武蔵文化財研究所
発行・掛川市教育委員会
〒436-0047 静岡県掛川市長谷701-1
TEL 0537-21-1158

印刷：樹ディグ



